上塩冶横穴群第20·21支群

斐伊川放水路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書II

1995年3月

県教育委員会
出雲工事事務所

上塩冶横穴群第20·21支群

斐伊川放水路建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書II

1995年3月

島根県教育委員会
建設省出雲工事事務所

上塩冶横穴群第21支群第10号横穴墓出土金糸

序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局の委託を受け、平成３年度以来、斐伊川放水路建設予定地内遺跡の調査を行っています。本書は、平成４年度に発掘調査を実施した遺跡の内、上塩冶横穴群第20・21支群について、その調査成果をまとめたものです。

出雲平野は、斐伊川・神戸川の２大河川によって形成された肥沃な土地で、島根県下でも有数の遺跡密集地域であります。今回の調査は、その両河川を結ぶ放水路開削部の内、神戸川との合流部に近い出雲市上塩冶町地内の上塩冶横穴群第20・21支群について行い、全国でも数少ない古墳時代の金糸を発見するなど、この地域の歴史を解明していく上で重要な成果を得ました。

本書が、多少なりとも地域の埋蔵文化財に関する理解に役立てば幸いに思います。

なお、発掘調査にあたり、建設省出雲工事事務所をはじめ、各方面からご支援、ご協力をいただきましたことに対し、心から厚くお礼申し上げる次第です。

平成７年３月

島根県教育委員会教育長
今　岡　義　治

例　　言

1．本書は、1992（平成４）年度に島根県教育委員会が建設省中国地方建設局の委託を受けて実施した、斐伊川放水路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の内、下記の遺跡の発掘調査報告書である。

上塩冶横穴群第20支群　　島根県出雲市上塩冶町半分3096－1番地外

上塩冶横穴群第21支群　　島根県出雲市上塩冶町半分3150番地外

2．図中の方位は、国土調査法による第Ⅲ座標系Ｘ軸方向を指す。したがって、磁北より6°50′、真北より－0°20′東の方向を指している。

3．調査にあたっては、池田満雄（島根県文化財保護審議委員）、三浦清（島根大学名誉教授）、村上隆（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研究指導部主任研究官）、山本清（島根大学名誉教授）、渡辺貞幸（島根大学法文学部教授）の各先生の指導を得た。

4．出土遺物及び実測図・写真は、島根県教育委員会で保管している。

5．掲載図面は、主に林健亮、定方克之、永井宏昌、黒崎康明、金津まり子、永島いづみ、金坂恵美子、釘宮和子、内海紀子、石川真由美、安達裕子、守屋かおる、金森千恵子が作成した。また、写真は、林健亮、定方克之が撮影した。

6．本書に使用した遺構略号は、ＳＫが土抗、ＳＸが性格不明遺構を表している。

7．本書は、文化課職員の協力を得て、林が編集した。また、第Ⅶ章を除き、定方の協力を得て林が執筆した。

本　文　目　次

Ⅰ　調査に至る経緯と調査の経過
1・調査に至る経緯…… 1
2・調査の経過…… 2
3・調査の組織…… 3
Ⅱ　上塩冶横穴群第20・21支群の位置と歴史的環境…… 5
Ⅲ　上塩冶横穴群第20支群の調査
1・トレンチ調査と調査区の設定…… 13
2・横穴墓の調査…… 16
3・その他の遺構について…… 24
4・上塩冶横穴群第20支群出土遺物について…… 26
Ⅳ　上塩冶横穴群第21支群の調査
1・トレンチ調査と調査区の設定…… 33
2・横穴墓の調査…… 37
3・その他の遺構について…… 51
4・上塩冶横穴群第21支群出土遺物について…… 52
Ⅴ　第21支群第10号横穴墓出土金糸について…… 77
Ⅵ　まとめ
1・遺構について…… 79
2・遺物について…… 80
Ⅶ　島根県出雲市上塩冶10号横穴墓出土金糸の材質と製作技法について　村上　隆…… 83

挿図・表目次

第1図　調査対象地位置図…… 1
第2図　斐伊川・神戸川及び調査地位置図…… 2
第3図　斐伊川放水路事業計画図…… 6
第4図　出雲市周辺遺跡分布図…… 7
第5図　斐伊川放水路周辺遺跡分布図…… 9
第6図　上塩冶横穴群第20支群の調査範囲及びトレンチ配置図…… 13
第7図　斐伊川放水路第14・15トレンチ土層断面図…… 15
第8図　上塩冶横穴群第20支群遺構配置図…… 16
第9図　第20支群第1号横穴墓閉塞状況…… 17
第10図　第20支群第1号横穴墓実測図…… 18

第11図　第20支群第２号横穴墓実測図…… 19
第12図　第20支群第３号横穴墓閉塞状況…… 20
第13図　第20支群第３号横穴墓実測図…… 21
第14図　第20支群第４号横穴墓閉塞状況…… 22
第15図　第20支群第４号横穴墓実測図…… 23
第16図　第20支群第５号横穴墓実測図…… 24
第17図　第20支群第１～５号横穴墓出土土器実測図…… 25
第18図　第20支群第５号横穴墓出土土器実測図…… 26
第19図　第20支群出土土器実測図…… 27
第20図　第20支群出土縄文土器実測図…… 28
第21図　第20支群第１号横穴墓出土鉄剣実測図…… 29
第22図　第20支群第２号横穴墓出土金属器実測図…… 29
第23図　第20支群出土石器実測図…… 30
第24図　上塩冶横穴群第21支群の調査範囲及びトレンチ配置図…… 33
第25図　斐伊川放水路第11・12トレンチ土層断面図…… 34
第26図　斐伊川放水路第13トレンチ土層断面図…… 35
第27図　上塩冶横穴群第21支群遺構配置図…… 36
第28図　第21支群第１号横穴墓実測図…… 37
第29図　第21支群第２号横穴墓閉塞状況…… 38
第30図　第21支群第２号横穴墓実測図…… 39
第31図　第21支群第３号横穴墓実測図…… 40
第32図　第21支群第４号横穴墓実測図…… 41
第33図　第21支群第５号横穴墓遺物出土状況…… 42
第34図　第21支群第５号横穴墓実測図…… 43
第35図　第21支群第６号横穴墓実測図…… 44
第36図　第21支群第６号横穴墓土層堆積状況…… 45
第37図　第21支群第７号横穴墓実測図…… 46
第38図　第21支群第８号横穴墓実測図…… 48
第39図　第21支群第９号横穴墓実測図…… 49
第40図　第21支群第10号横穴墓実測図…… 50
第41図　ＳＸ１実測図…… 52
第42図　ＳＫ１実測図…… 52
第43図　第21支群第１号横穴墓出土土器実測図…… 53
第44図　第21支群第１・２号横穴墓出土土器実測図…… 54
第45図　第21支群第３・４号横穴墓出土土器実測図…… 55
第46図　第21支群第５号横穴墓出土土器実測図…… 56

第47図　第21支群第６～10号横穴墓出土土器・陶磁器実測図…… 57
第48図　第21支群出土土器実測図…… 58
第49図　第21支群出土土器・陶磁器実測図…… 59
第50図　第21支群第１号横穴墓出土金属器実測図…… 61
第51図　第21支群第２号横穴墓出土金属器実測図…… 62
第52図　第21支群第３号横穴墓出土金属器実測図…… 63
第53図　第21支群第４・５号横穴墓出土金属器実測図…… 64
第54図　第21支群出土金属器実測図…… 65
第55図　第21支群出土石器実測図…… 66
第56図　斐伊川放水路第11トレンチ出土遺物実測図…… 67
第57図　第21支群第１号横穴墓出土石製品実測図１…… 68
第58図　第21支群第１号横穴墓出土石製品実測図２…… 69
第59図　上塩冶横穴群第20・21支群測量図…… 75

表　目　次

第１表　出雲市周辺の遺跡一覧…… 8
第２表　斐伊川放水路開削部周辺の遺跡一覧…… 11

写　真　図　版

上塩冶横穴群第20・21支群調査前全景…… 図版１
斐伊川放水路第14・15トレンチ…… 図版２
上塩冶横穴群第20支群…… 図版３～16
斐伊川放水路第11トレンチ…… 図版17
斐伊川放水路第12・13トレンチ…… 図版18
上塩冶横穴群第21支群…… 図版19～38
上塩冶横穴群第20・21支群出土遺物…… 図版39～52
第21支群第10号横穴墓出土金糸…… 図版53・54
上塩冶横穴群第20・21支群付近遠景…… 図版55・56

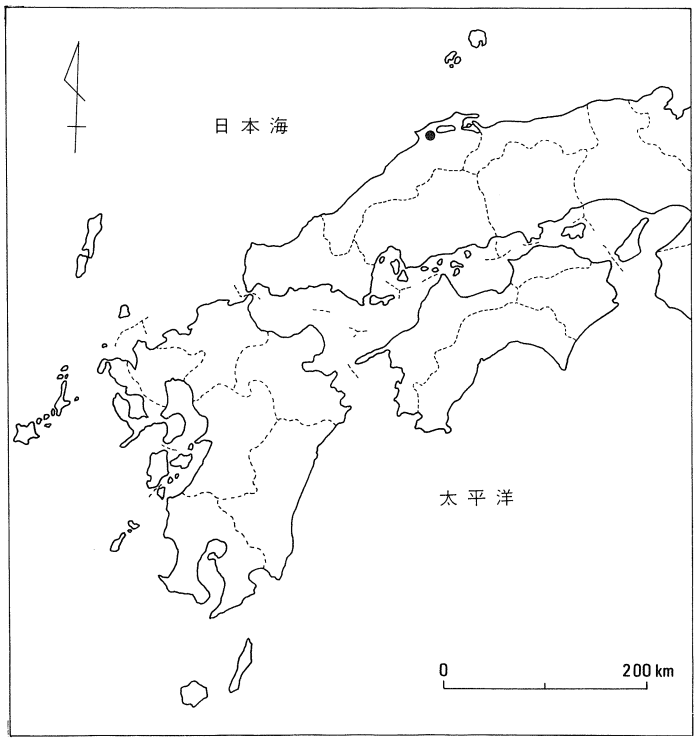
Ⅰ　調査に至る経緯と調査の経過

1．調査に至る経緯

斐伊川放水路事業は、斐伊川の計画高水流量の一部を本川中流左岸の来原付近から新たに放水路を開削して分流し、出雲市上塩冶町半分付近において神戸川に合流させるものである。また、それにより下流は、神戸川の自己流量と斐伊川本川からの分流量を合わせ、計画高水流量の斐伊川放水路として必要な掘削・築堤工事を行おうとする事業である。その規模は、開削部4.1km、拡幅部9.0kmで、全長13.1kmにも及ぶ（第３図）。この計画は、斐伊川の流水の一部を早く、しかも安全に日本海に流すことを目的としたもので、島根県が昭和44年に基本構想を発表、同50年に基本計画を策定し、これに添い、建設省が同51年に確定したものである。ルートの最終決定は同54年のことであった。

こうした事業計画の推移・決定のなか、島根県教育委員会は、昭和50年度に島根県企画部の依頼を受けて、分流地域の分布調査を実施し、その結果を昭和51年３月に「斐伊川放水路建設予定地域埋蔵文化財分布調査報告」としてまとめ提出した。また、昭和53・54年度には、建設省出雲工事事務所から委託を受けて上塩冶を中心とする出雲市全域と簸川郡大社町に所在する遺跡を対象としながら、一部発掘調査を含んで分布調査を行い、この結果をもとに、昭和55年３月に『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』(註1)を刊行した。

その後、事業地の用地買収が進む一方で、平成元年度より建設省出雲工事事務所、島根県斐伊川神戸川治水対策課及び島根県教育庁文化課の三者で協議が進められ、平成３年１月には文化課が再度分布調査を実施した。そして、同年度末には同事務所と文化課との間で協議文書が交わされ、事前に予定地内にある埋蔵文化財を発掘調査することが決定し、平成３年４月より発掘調査事業がスタートした。

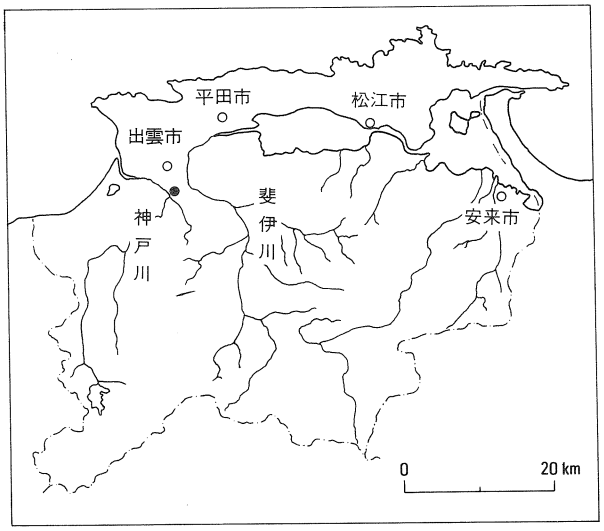


第１図　調査対象地位置図（●印）

平成４年度には２班体制で調査に着手し、当初、１班が前年度に調査未了となった三田谷Ⅱ遺跡１区（約300m²）の調査を行い、他の１班が開削部半分地区よりトレンチ調査を手掛けることとなった。その後、工事用仮設道の建設を急ぐという事情から、トレンチ調査の結果をふまえ、同年７月より上塩冶横穴群第20・21支群の全面調査にかかり、同年12月までに約7,000m²を発掘調査した。

2．調査の経過

平成３年度、県教委と建設省中国地方建設局とは４月11日付けで委託契約を締結し、同年５月７日より現地調査に着手した。出雲市馬木地区区画整理事業との関連から採土予定地とされた三田谷Ⅱ遺跡のトレンチ調査を行い、続いて本調査2,600㎡を予定していた。ところが、仮設道路設置工事のための誤掘削の事後処理や、台風19号による被害のため約300㎡を残し、12月25日に終了した。なお、12月９日には、池田満雄・渡辺貞幸両先生を招いて調査指導会を催した。



第２図　斐伊川・神戸川及び調査地位置図（●印）

平成４年度は、４月９日付けで委託契約書を交わし、２班体制で５月７日から調査に着手した。調査は、はじめ１班が前年度調査未了となった三田谷Ⅱ遺跡１区の約300㎡の調査を行い、他の１班が開削部のトレンチ調査を手掛けることとなった。三田谷Ⅱ遺跡１区の調査では、途中新たに横穴式石室墳が確認され、さらに500㎡調査区を広げ、７月31日に調査を終了した。この間、７月21日に三浦清・渡辺貞幸両先生を現地に招いて、調査指導を仰いだ。その後、三田谷より大井谷に抜ける工事用仮設道の建設が急がれるとの事情により、大井谷進入口部分のトレンチ調査にかかった。その結果、広範囲にわたって、遺構・遺物を確認（上塩冶横穴群14・15支群、大井谷石切り場跡）したため、直ちに全面発掘に切り替え、約7,000㎡にわたって調査を行った。

トレンチ調査を行っていた１班も、工事用仮設道の関係から、７月１日より上塩冶横穴群第20・21支群の約7,000㎡を対象に全面調査を行った。７月31日には21支群10号横穴墓より金糸が出土し、これについて、11月９日には村上隆先生の調査指導を受けた。12月20日には、両調査現場で現地説明会を開催し、約30名の見学者を集めた。両調査現場とも12月25日に調査を終了した。

平成５年度は、４月１日付けで委託契約を結び、４月20日から２班体制で調査に取りかかった。この内１班は、上塩冶横穴群第16支群・三田谷Ⅱ遺跡２区の発掘調査を10月20日まで行った後、報告書Ⅰの作成にかかった[(註2)]。一方、他の１班は、開削部の約７割の地域を対象にトレンチ調査を行い、12月17日に調査を終了した。また、この年に島根大学汽水域研究センターの協力を得て、神戸川下流の拡幅部（古志・長浜地区）の遺跡確認調査を実施している。

平成６年度も、４月１日付けで委託契約を結び、４月20日から２班体制で調査に取りかかった。本調査は、開削部を中心に１班が沈砂池の必要から三田谷Ⅰ遺跡の谷部を、他の１班が工事用道路の関係から大井谷城跡・上塩冶横穴群第７支群の一部・上沢Ⅱ遺跡の調査を実施した。

三田谷Ⅰ遺跡は、調査範囲をＡ～Ｅ区に分け、Ｂ区より作業を開始した。三田谷Ⅰ遺跡では、旧河道・井戸跡６・土壙４を確認したほか、墨書土器・木簡等を含む、縄文時代から近世までの多量の遺物を採集した。調査期間中の11月29日には木製品について松木哲先生の指導を受けた。他の１班は大井谷城跡から調査を開始したが、第Ⅲ調査区より思いもかけず横穴墓が確認された。このため、上塩

冶横穴群第35支群の１穴、第36支群の３穴を合わせ、同時に調査を行った。この間、花田勝広先生の指導を仰いだ。上塩冶横穴群第７支群は、大井谷城跡の調査と一部平行しながら６月16日から８月26日にかけて調査を行い大井谷城跡の調査が終了した９月26からは上沢Ⅱ遺跡の調査を開始し、11月15日に終了した。その後、残土処理場（Ｂ谷）のアクセス道路建設工事と、古志橋の付替工事に伴う古志本郷遺跡のトレンチ調査を行った。12月６日には三田谷Ⅰ遺跡と上塩冶横穴墓群について、池田満雄・渡辺貞幸両先生を招き、調査指導会を開催した。両班とも、12月22日に現地調査を終了した。

本報告書は、平成４・５年度の冬期間に、遺物の実測等を中心とした作業をすすめ、平成６年度に作成した。

３．調査の組織

上塩冶横穴群第20・21支群の現地調査は平成４年度に行い、平成５・６年度に整理・報告書作成を行った。これに関わった各年度の関係者は下記のとおりである。

○平成４年度（1992）

調査指導者　池田満雄（島根県文化財保護審議会委員）、村上　隆（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研究指導部主任研究官）、渡辺貞幸（島根大学法文学部教授）、三浦　清（島根大学教育学部教授）、山本　清（島根県文化財保護審議会委員）

事　務　局　目次理雄（文化課長）、勝部　昭（埋蔵文化財調査センター長）、山根成二（課長補佐）、久家儀夫（課長補佐）、工藤直樹（企画調整係主事）、有田　賓（島根県教育文化財団嘱託）

調　査　員　林　健亮（埋蔵文化財調査センター調査第１係主事）、定方克之（同教諭兼主事）

遺物整理　石川とみ子、太田和子、小村睦子、永田節子、金津まり子、釘宮和子、来海順子、永島いずみ

発掘調査作業員

吉田甫、原博信、伊藤猪造、森脇力、板倉博、安食武雄、北脇光雄、岡文三、飯島鑑、樋野国男、棟石庫七、三原登、石橋真、足立省吉、今岡実、吉田茂、飯国協二、石川恒夫、田中重吉、高橋辰夫、須山林吉、＊原幸成、福代寛逸、秋田忠三、和田虎雄、内田勝之、高橋加代子、漆谷澄子、吉田京子、石田好子、矢田絹子、飯国美代子、永田利恵、中島和恵、奥井久子、錦織恵美子、斉藤さち子、村上智子、佐藤益子、佐藤宣美、福代真寿子、東原敬子、柳楽孝子

○平成５年度（1993）

事　務　局　広沢卓嗣（文化課長）、勝部　昭（埋蔵文化財調査センター長）、山根成二（課長補佐）、久家儀夫（課長補佐）、工藤直樹（企画調整係主事）、有田　賓（島根県教育文化財団嘱託）

調　査　員　林　健亮（埋蔵文化財調査センター調査第１係主事）、定方克之（同教諭兼文化財保護主事）、黒崎康明（同臨時職員）

遺物整理　金坂恵美子、釘宮和子、永島いずみ

○平成6年度（1994）

事　務　局　広沢卓嗣（文化課長）、勝部　昭（埋蔵文化財調査センター長）、野村純一（課長補佐）、佐伯善治（課長補佐）、工藤直樹（企画調整係主事）、山本悦子（島根県教育文化財団嘱託）

調　査　員　林　健亮（埋蔵文化財調査センター調査第5係主事）、定方克之（同調査第3係教諭兼文化財保護主事）

遺物整理　内海紀子、石川真由美

なお、調査・整理にあたっては、以下の方々から助言・指導・協力を得た。

菅野章宏（木更津市教育委員会金鈴塚遺物保存館）、種定淳介（兵庫県教育委員会）、望月幹夫（東京国立博物館考古課原史室室長）、山中　理（財団法人白鶴美術館研究員）、千葉県立房総風土記の丘

註1　島根県教育委員会　『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』　1980年

註2　島根県教育委員会　『三田谷Ⅱ遺跡・上沢1遺跡』　1994年

Ⅱ　上塩冶横穴群第20・21支群の位置と歴史的環境

島根県出雲市を中心とする現在の出雲平野は、東西を宍道湖と大社湾に、南北を緩やかな山塊に挟まれた沖積平野として形成されているが、現在の地形に定着したのはおよそ江戸時代頃と言われており、それまで西進していた斐伊川が東に流路を替え、宍道湖に注ぐようになってからのことである。

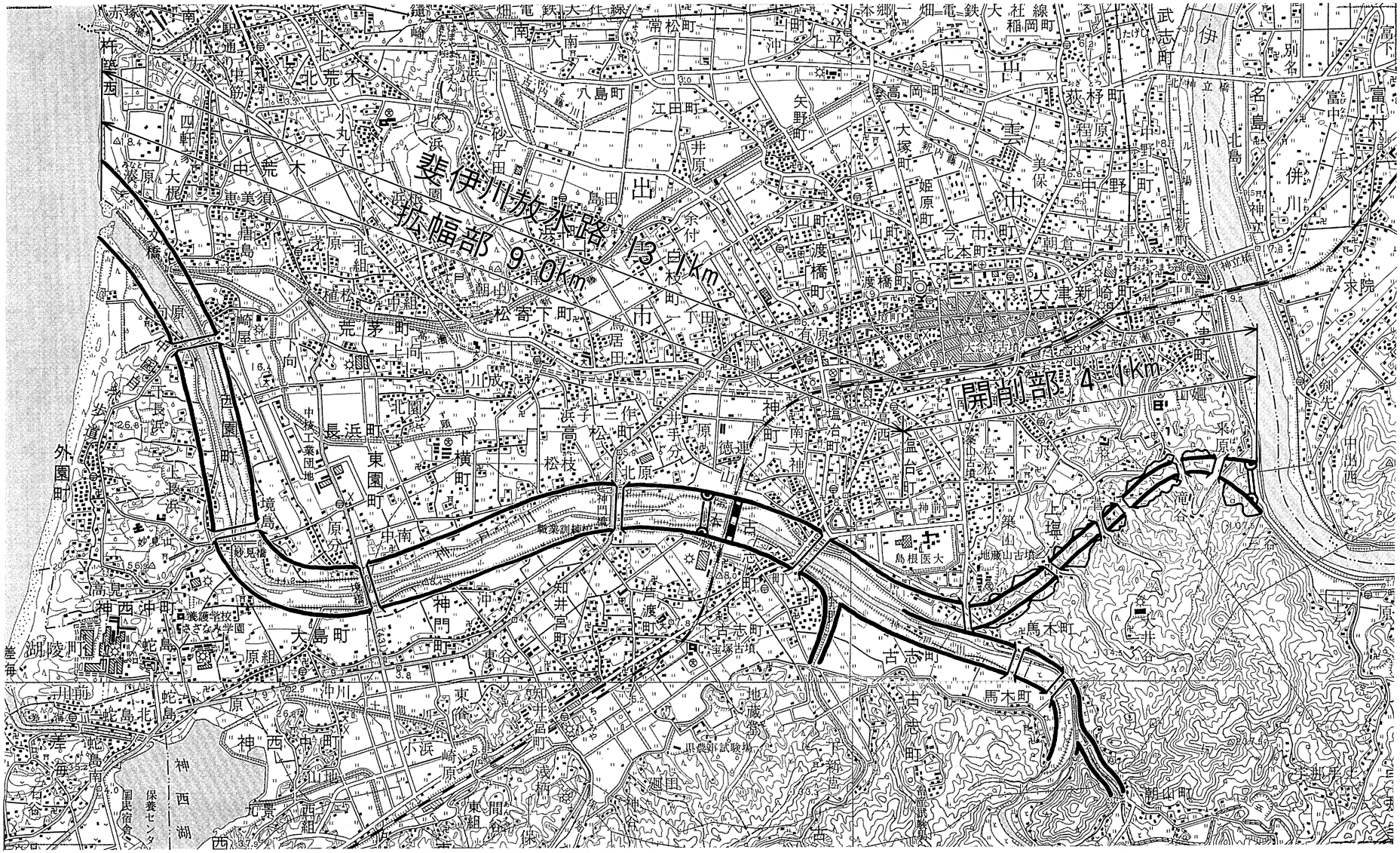
縄文時代の出雲平野は、そのほとんどの部分が海面下であったと考えられ、大社町の菱根遺跡、斐伊川放水路開削部にも掛かる三田谷Ⅰ遺跡など平野の縁辺にわずかに知られるのみである。

弥生時代になると、大社町周辺で、大社境内遺跡や、原山遺跡が知られている。これらの遺跡は、平野の低湿地部分にまで広がりを持つことから、出雲平野西部が、日本海の一部ではなく、湾入した入り海の様相を呈してきた事がうかがわれる。また、矢野遺跡・多聞院遺跡・天神遺跡など大規模な集落遺跡が出現するのもこの時期で、居住地域が出雲平野中央の微高地まで拡大してきた事が解る。近年、線刻により鮫を描いた土器が出土した白枝荒神遺跡も天神遺跡から続く微高地上に位置したものである。弥生時代後期になると、斐伊川沿いの西谷丘陵には、突如、西谷墳墓群が出現する。一辺40mを超える四隅突出型墳丘墓を始めとする大墳墓群では、島根大学による西谷墳墓群第３号墓の調査で、吉備型の壺・特殊器台の他、北陸系統とも考えられる土器が出土しており[註1]、吉備地域等との関連性も興味深い。他に、弥生時代の墳墓を知る資料としては、天神遺跡での壺棺、矢野遺跡での土坑墓群等が知られるのみで、きわめて少ない。

弥生時代から古代までの約1000年間は、沖積地が拡大しなかったと考えられ、古墳時代になっても、居住地域に大きな変化は見られない。古墳そのものの分布を見ても、古墳時代前期までさかのぼると考えられるものはほとんど見られない。わずかに平野の北偏に位置する大寺古墳と、西偏に位置する山地古墳が知られている。出雲地方での古墳は、一般的に方墳形が多いと思われがちだが、出雲市域に関しては、その初現と思われるものから前方後円墳・円墳であったことが注目される。古墳時代後期に入ると、古墳の数は、激増することになり、出雲市域での生活圏の広がりがうかがわれる。県下最大級の規模を誇る、大念寺古墳を始め、市街地北東部の丘陵縁辺部には多数の古墳が造られるようになる。現在知られている後期古墳の内部主体は、横穴式石室が圧倒的大多数を占め、わずかに箱式石棺が見られる。大念寺古墳は、自然石割石による壮大な横穴式石室を有し、巨大な家形石棺を置いている。また、上塩冶築山古墳では、切り石による精美な横穴式石室に巨大な家形石棺を２基も備えている。いずれも豊富な副葬品を持ち、出雲平野全域を支配していた首長であったと思われる。

６世紀後半から７世紀に入ると、横穴式石室を主体部とする古墳の消滅にとって代わるように横穴墓が増加する。平野の南側に続く丘陵地帯は、随所で凝灰岩が露出しており、多数の横穴墓が掘られている。多くの場合複数の横穴墓が集まり、横穴墓群を形成しており、単独で存在することは珍しい。横穴墓そのものの築造は６世紀後半より、７世紀前半が中心だが、追葬と言う形で８世紀代まで使用されることも珍しくなく、また、その多くが盗掘され開口している。

古代における資料はけっして多くはないが、仏教の受容にともない仏教寺院や火葬骨を納めた古墓等も出現する。平野の南側丘陵地帯には、県内では数少ない石製蔵骨器を備える菅沢古墓・朝山古墓

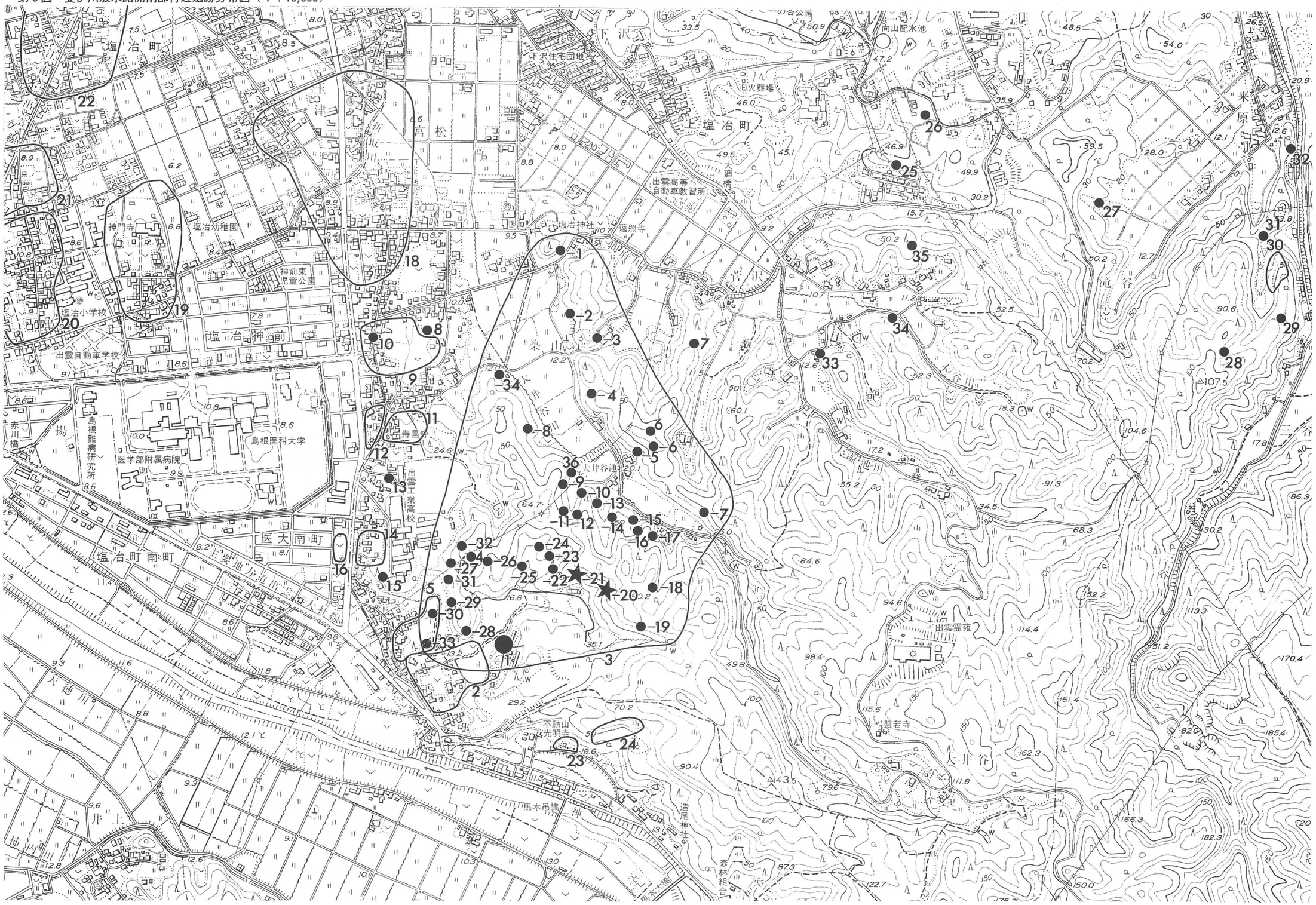


第３図　斐伊川放水路事業計画図（１:５,000）

第４図　出雲市周辺遺跡分布図

No.	遺　跡　名	種　別	No.	遺　跡　名	種　別	No.	遺　跡　名	種　別
1	上塩冶横穴墓群	横穴墓	49	高西遺跡	散布地	88	間谷東古墳	古墳
2	三田谷Ⅰ遺跡	散布地		伝塩冶氏館跡	館跡	89	古垣内遺跡	土坑墓
3	三田谷Ⅱ遺跡	古墳他	50	古志本郷遺跡	集落遺跡	90	湖東屋山横穴	横穴墓
4	半分城跡	山城	51	大梶古墳	古墳		墓群	
5	半分瓦窯跡	窯跡	52	思案橋北遺跡	散布地	91	山地古墳	古墳
6	大井谷城跡	山城	53	古志遺跡	散布地	92	山地遺跡	散布地
7	菅沢古墳	古墳	54	田畑遺跡	集落遺跡	93	佐伯神社古墳	古墳
8	角田遺跡	散布地	55	上組遺跡	散布地	94	上長浜貝塚	貝塚
9	宮松遺跡	集落跡	56	正連寺北遺跡	散布地	95	馬見烽跡	烽跡
10	上塩冶築山古墳	古墳	57	引法寺参道付近	散布地	96	白枝荒神遺跡	散布地
	築山遺跡	集落跡		遺跡		97	渡橋遺跡	散布地
	塩冶判官館跡	館跡	58	下古志天満宮	散布地	98	小山遺跡	集落遺跡
11	寿昌寺遺跡	散布地		付近遺跡		99	小山遺跡	集落遺跡
	寿昌寺西遺跡	散布地	59	阿弥陀寺西遺跡	散布地	100	矢野遺跡	集落遺跡
12	地蔵山古墳	古墳	60	極楽寺付近遺跡	散布地	101	大塚遺跡	散布地
	池田遺跡	散布地	61	東原遺跡	散布地		大塚古墳	古墳
13	半分古墳	古墳	62	多聞院北遺跡	散布地	102	荻杼Ⅰ遺跡	古墓
	半分遺跡	散布地	63	知井宮多聞院	集落遺跡		荻杼Ⅱ遺跡	古墓
14	出雲工業西遺跡	散布地		遺跡		103	荻杼古墓	古墓
15	光明寺南古墳	古墳	64	芦渡遺跡	散布地	104	稲岡遺跡	散布地
16	光明寺古墳群	古墳群	65	嘉儀遺跡	散布地	105	高岡遺跡	散布地
17	小坂古墳	古墳	66	比布智館跡	館跡	106	高浜Ⅰ遺跡	散布地
	刈山古墳群	古墳群	67	智伊館跡	館跡	107	山持川川岸遺跡	散布地
18	馬木岩樋跡	水路跡	68	観知寺付近遺跡	散布地	108	里方別所遺跡	散布地
	大井関遺跡	堰跡	69	福知寺横穴墓群	横穴墓	109	前口遺跡	散布地
19	大坊古墓	古墓		福知寺裏土坑墓	土坑墓	110	里方八石原遺跡	散布地
20	大坊経塚	経塚		山本陽一朗宅裏	横穴墓	111	高浜Ⅱ遺跡	散布地
21	唐墨城跡	城跡		横穴墓群		112	石臼古墳	古墳
22	権現山横穴墓群	横穴墓		三成範夫宅裏山	横穴墓	113	熊見谷遺跡	散布地
23	権現山古墳	古墳		横穴墓群		114	大前山古墳	古墳
24	長迫遺跡	散布地	70	東谷北横穴墓群	横穴墓	115	蛇山砦跡	城跡
25	長迫横穴墓	横穴墓		真幸ケ丘西	横穴墓	116	亀谷遺跡	散布地
26	来原岩樋跡	水路跡		横穴墓群			鎌代古墳	古墳
27	西谷墳墓群	墳墓群		マキチン坂	横穴墓	117	西組古墳群	古墳
28	間府岩樋跡	水路跡		横穴墓群			菱根関屋跡	関屋跡
29	菅沢古墓	古墓	71	梶谷徳次宅裏	横穴墓	118	菱根遺跡	散布地
30	長者原廃寺	寺院跡		横穴墓群		119	修理免本郷遺跡	散布地
31	下沢古墳	古墳	72	小浜山横穴墓群	横穴墓	120	乙見焼窯跡	窯跡
32	西谷横穴墓	横穴墓		小浜寺横穴墓群	横穴墓	121	原山遺跡	散布地
33	中山丘陵遺跡	散布地	73	東谷Ⅱ遺跡	散布地	122	南原遺跡	散布地
34	神田遺跡	散布地	74	東谷Ⅰ遺跡	散布地	123	中分貝塚	貝塚
35	石土手遺跡	散布地	75	間谷西遺跡	土坑墓	124	鹿蔵山遺跡	貝塚他
36	斐伊川鉄橋遺跡	散布地	76	井上古墳	古墳	125	鹿蔵山遺跡	貝塚他
37	下沢会館周辺	散布地		井上横穴墓群	横穴墓	126	鹿蔵山砦跡	城跡
	遺跡		77	放れ山古墳	古墳	127	鹿蔵山経塚	経塚
38	向山城跡	城跡		放れ山横穴墓群	横穴墓	128	乗光寺跡	寺院跡
39	下沢遺跡	散布地		放れ山遺跡	散布地	129	越峠焼窯跡	窯跡
40	久微園横穴墓	横穴墓	78	宇賀池堤跡	池堤跡	130	誓願寺古墓	古墓
41	平家丸城跡	城跡	79	妙連寺山古墳	古墳	131	仮ノ宮台場跡	台場跡
42	樋野祐平窯跡	窯跡	80	浄土寺山城跡	城跡	132	赤塚台場跡	台場跡
43	大念寺古墳	古墳	81	地蔵堂北	横穴墓	133	湊原台場跡	台場跡
44	塚山古墳	古墳		横穴墓群				
45	神戸寺境内廃寺	寺院跡	82	地蔵堂横穴墓群	横穴墓			
	神戸寺付近遺跡	散布地	83	栗栖城跡	城跡			
46	塩冶小学校付近	散布地	84	廻田谷遺跡	散布地			
	遺跡		85	深田谷横穴墓群	横穴墓			
47	弓原遺跡	散布地	86	浅柄古墳	古墳			
48	天神遺跡	集落遺跡		浅柄南古墳	古墳			
			87	間谷古墳	古墳			

第５図　斐伊川放水路開削部付近遺跡分布図（１：10,000）



No.	遺　跡　名	種　別	No.	遺　跡　名	種　別	No.	遺　跡　名	種　別	No.	遺　跡　名	種　別
1	三田谷Ⅱ遺跡	古墳他	－18	第18支群	横穴墓	7	菅沢古墳	古　墳	27	間府岩樋跡	水路跡
2	三田谷Ⅰ遺跡	散布地	－19	第19支群	横穴墓	8	上塩冶築山古墳	古　墳	28	権現山横穴墓群	横穴墓
3	上塩冶横穴墓群	横穴墓	☆20	第20支群	横穴墓	9	築山遺跡	集落遺跡	29	権現山古墳	古　墳
－1	第1支群	横穴墓	☆21	第21支群	横穴墓	10	塩冶判官館跡	館　跡	30	長廻遺跡	散布地
－2	第2支群	横穴墓	－22	第22支群	横穴墓	11	寿昌寺遺跡	散布地	31	長廻横穴墓	横穴墓
－3	第3支群	横穴墓	－23	第23支群	横穴墓	12	寿昌寺西遺跡	散布地	32	来原岩樋跡	水路跡
－4	第4支群	横穴墓	－24	第24支群	横穴墓	13	地蔵山古墳	古　墳	33	上沢Ⅱ遺跡	石切場跡
－5	第5支群	横穴墓	－25	第25支群	横穴墓	14	半分遺跡	散布地	34	上沢Ⅲ遺跡	散布地
－6	第6支群	横穴墓	－26	第26支群	横穴墓	15	半分古墳	古　墳	35	上沢Ⅰ遺跡	土　壙
－7	第7支群	横穴墓	－27	第27支群	横穴墓	16	出雲工業西遺跡	散布地	36	白石谷遺跡	石切場跡
－8	第8支群	横穴墓	－28	第28支群	横穴墓	17	池田遺跡	散布地			
－9	第9支群	横穴墓	－29	第29支群	横穴墓	18	宮松遺跡	集落遺跡			
－10	第10支群	横穴墓	－30	第30支群	横穴墓	19	神門寺付近遺跡	散布地			
－11	第11支群	横穴墓	－31	第31支群	横穴墓	20	塩冶小学校付近遺跡	散布地			
－12	第12支群	横穴墓	－32	第32支群	横穴墓	21	弓原遺跡	散布地			
－13	第13支群	横穴墓	－33	第33支群	横穴墓	22	高西遺跡	散布地			
－14	第14支群	横穴墓	－34	第34支群	横穴墓	23	光明寺南遺跡	散布地			
－15	第15支群	横穴墓	4	半分城跡	城　跡	24	光明寺古墳群	古　墳			
－16	第16支群	横穴墓	5	半分瓦窯跡	窯　跡	25	菅沢古墓	古　墓			
－17	第17支群	横穴墓	6	大井谷城跡	城　跡	26	長者原廃寺	寺院跡			

が存在する。7世紀前半代に横穴式石室を主体部に築造されたと考えられる小坂古墳では、追葬時に石櫃が埋置されている。この石櫃には緑青の付着が認められ、銅製骨蔵器が納められていたと推定される。また、菅沢古墓にほど近い西谷丘陵では、須恵器製骨蔵器の採集があり、火葬の広まりを示している。

その創建が県内最古級にさかのぼると考えられる神門寺境内廃寺では、軒丸瓦下端に突起を備える、いわゆる水切り瓦が多く出土する。この瓦は、広島県三次市の寺町廃寺を中心に吉備地域に広く分布することが知られており、吉備地域との交流がうかがわれる。平野の北辺に位置する大寺廃寺では、単弁四弁蓮華文軒丸瓦が採集されているが、この瓦は、瓦当面の傷から松江市の四王寺跡の瓦と同笵であることが確認されている。斐伊川放水路予定地のすぐ近くに位置した長者原廃寺では、単複弁蓮華文を持つ特徴的な軒丸瓦が採集されている。

中世に入るとこの地域に於いては、塩冶氏の存在が著名となる。このためか、平野の南北を走る丘陵地帯には、多くの山城が存在し、平野内にも居館跡推定地が多く存在している。このうち、半分城跡・大井谷城跡の一部が発掘調査を行われている。

中世の集落跡の調査は少ないが、矢野遺跡では、中世の遺物が数多く出土しているほか、長浜貝塚では、しじみ貝を中心とした中世の貝塚が発見された。中世の墳墓としては、龍泉窯系青磁が出土した荻杼古墓が知られている。

上塩冶横穴群は、現在140基余りが知られる県内最大級の横穴墓群である。この横穴墓群の存在は、1956年に門脇俊彦氏、池田満雄氏により8支群21基が紹介されたことに始まる。この横穴墓群の位置は出雲市上塩冶町大井谷であったことから、当時「大井谷横穴群」と呼称された。その後、島根県教育委員会等による数度の分布調査・試掘調査により、さらに多数の支群が発見されるに至った。それら横穴墓の分布は、大井谷のみにとどまらず、神戸川を眼下に望む県立出雲工業高校付近にまで拡大し、もはや「大井谷横穴群」と呼べるものではなくなってしまった。建設省・島根県により斐伊川・神戸川治水計画が進められるのに伴い、1980年に島根県教育委員会が刊行した「出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告」ではこの事実をふまえ、「上塩冶横穴群」の名称を使用し、この時点で32支群107基が確認されるに至った。(註2)

本格的にスタートした斐伊川放水路開削事業では、この大横穴墓群の中央を横切ることになり、現在に至るまで調査が繰り返されているが、1994年末現在では、36支群145基を数えるまでに至っている。

註1　出雲市教育委員会　『西谷墳墓群』　1992年

註2　門脇俊彦「上塩冶横穴群」『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』
島根県教育委員会　1980年

Ⅲ　上塩冶横穴群第20支群の調査

1．トレンチ調査と調査区の設定

上塩冶横穴群は、上塩冶町半分から大井谷にかけて、36支群145基が知られているが、その数は、調査の度に増えており、総数150基以上はあるものと思われる。この内、上塩冶横穴群第20支群は、出雲市南郊、上塩冶町半分に所在し、上塩冶横穴群の中では、南よりに位置している。昭和54年に一部発掘調査の行われた第22支群同様(註1)　西側の三田谷に面した狭い谷の最も奥にあたる。当初２基の存在が知られていたが、1975年に島根県教育委員会が行った試掘調査の結果、さらに３基の存在が確認され、５基以上の支群として理解されていた。調査前の状況は、雑木林となっていたが、横穴墓群前面は、やや傾斜の緩やかな部分があり、畑地として利用されていた可能性がある。周辺の伐採を行った時点で、３穴の開口が認められ、工事対象区域南端近くまで横穴墓群の広がりが推定された。横穴墓そのものの数は、全面調査時に明らかになるので、この時点では確認していない。開口した横穴墓より上方は、すぐに尾根にあたることから、トレンチ調査は遺構の下方向への広がりを確認することに努めた。このことより、20支群下方の谷中には第14トレンチを、横穴墓前面に第15トレンチを設定し、掘削を開始した。

第14トレンチは標高39ｍから33ｍの位置で、重機を使用しながら幅２ｍ長さ12ｍにわたって掘削し

第６図　上塩冶横穴群第20支群の調査範囲及びトレンチ配置図（１：800）

た。この位置は、第20支群のある谷の最も深い部分にあたり、崩落土中での多量の遺物の存在が予想された。約１ｍある埋土の大半は、斜面上方からの崩落土と考えられる。東側は、斜面上方より岩盤が続いていたが、西側では、青色のしまった粘質土が見られ、これらを地山面と判断した。中程では地山面直上で黒色土が見られたが遺構は検出できなかった。黒色土中から小量の須恵器片が出土している。

第15トレンチは横穴墓直前の標高50ｍから45ｍの位置に、幅２ｍ長さ５ｍについて人力で掘削した。埋土は約40㎝と薄く、埋土中より太型蛤刃石斧の破片が出土した。東側にあたる斜面上方では、横穴墓から続く岩盤が見られ、地山面より下方に向けて大きく下っている。砂岩質と見られる地山面直上からは須恵器・土師器の小片が出土した。第15トレンチ付近は、比較的傾斜が緩く、横穴墓以外の遺構が存在する可能性も考えられたが、出土遺物は石斧を除き、いずれも横穴墓の時期に近いものであった。第15トレンチの西側は斜面が急激に落ち、第14トレンチ付近の凝灰岩岩盤に続いているが、北側では、一部で砂岩質の地山が露出しており、地山面の複雑な堆積が予想された。

トレンチを設定していない北側尾根部は、横穴墓が横に向かって連続しているため当初より、調査区に含めることを考えていたが、北隣の第21支群側でのトレンチ調査により砂岩質であり、横穴墓は存在しないことが予想されていた。しかし、前年度の分布調査時に尾根上で須恵器小片が採集されており、尾根上での祭司が行われた可能性が指摘されたため、調査区に含めることにした。

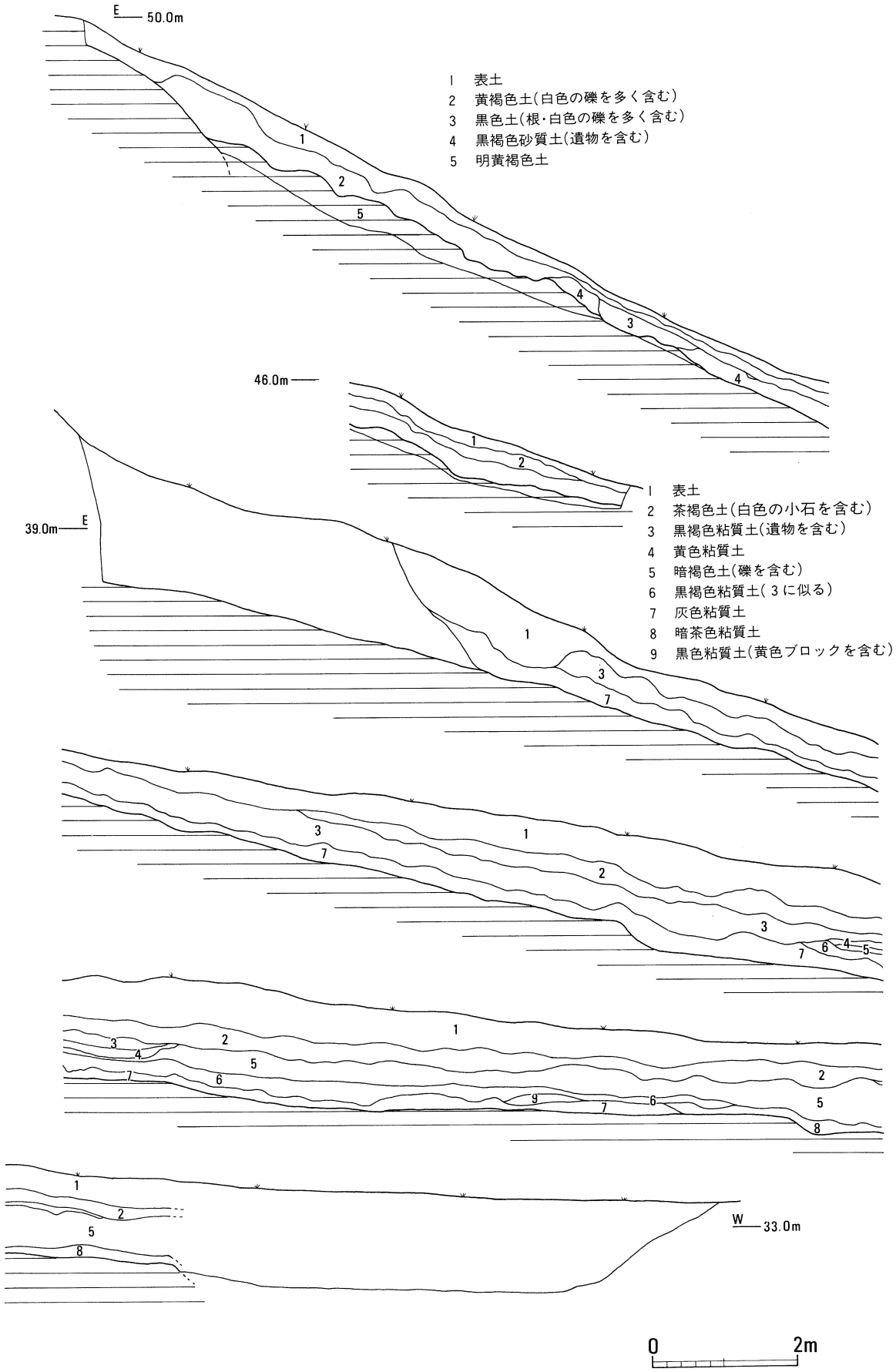
同様の理由により、横穴墓直上の、東側尾根上にも、調査終了後にトレンチを設定し、掘削したが、尾根上では赤褐色を呈す砂質土が非常に厚く見られ、この土が地山と考えられる。表土も非常に薄く、遺構・遺物はまったく見られなかった。

第14・15トレンチの状況より、横穴墓下方部分には、遺構の広がりは見られないものの、遺物は、横穴墓下方の広い範囲に散在していることが確認できた。このため、丘陵西斜面のほぼ前面に渡り調査区を設定することとなった。

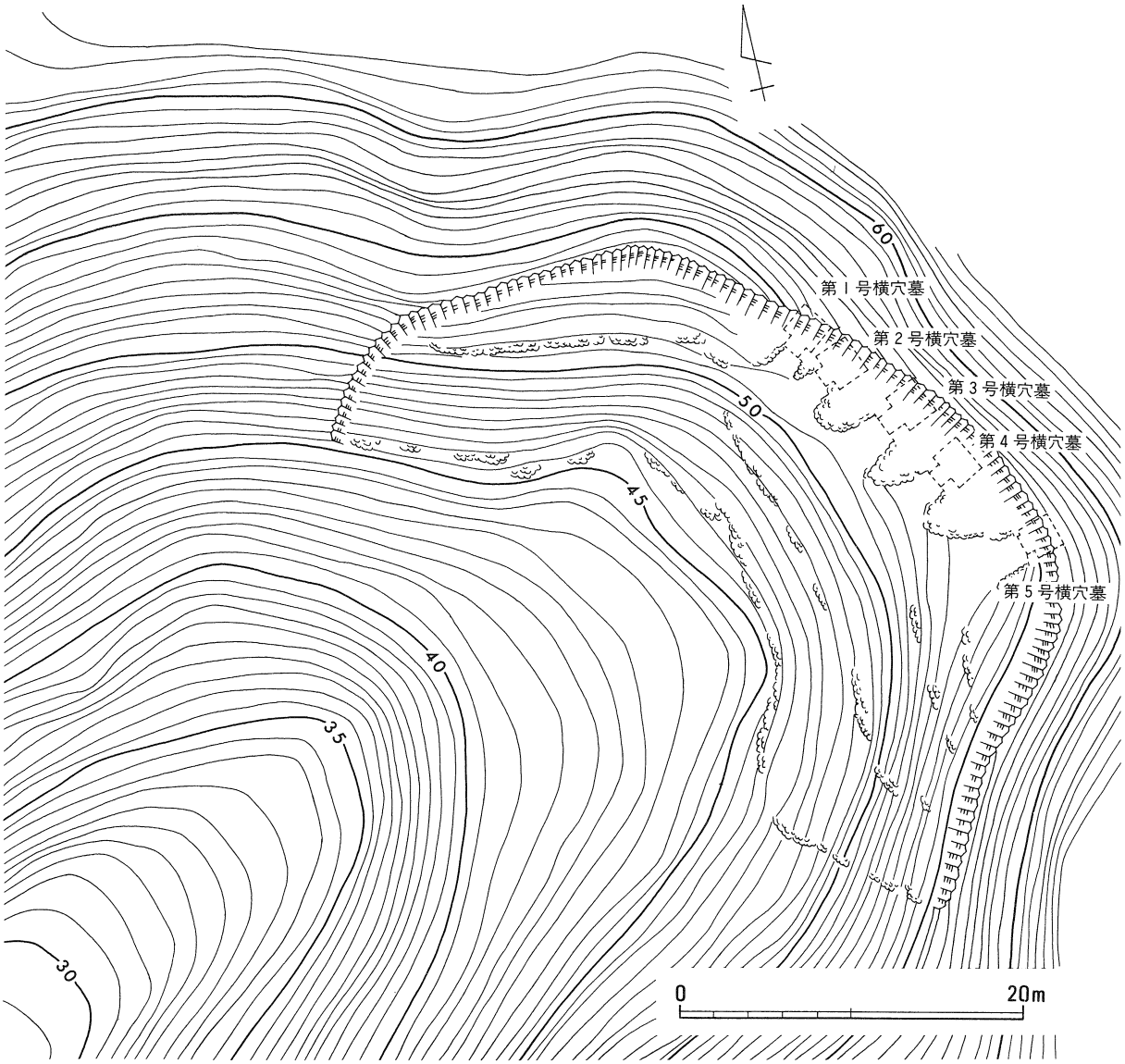
トレンチ調査の結果を受け、表土中にはほとんど遺物を含まないことから、全面調査にあたっては、重機により表土掘削を行った。横穴墓付近は、急斜面で、わずかな表土が凝灰岩の岩盤上に薄く被った状態になっており、重機で木の根等を撤去すると、完全に地山が露出してしまった。この時点で、完全に開口してしまった横穴墓もあり、明確な落ち込みとして確認された部分を含め、横穴墓５基を確認した。

この５基の横穴墓は、1980年までに紹介されていた５基に一致するものである。凝灰岩岩盤が露出する部分のほぼ中央に横並びに、５基が並んで見られ、２段になった部分は見られない。第８図に示すように凝灰岩の岩盤が露出する範囲はきわめて広いが、横穴墓そのものは、その中心の狭い範囲にある。同年度に現地調査を行った大井谷側の第14・15支群では、あたかも岩質の良いところを探して掘削したかのようにまばらに分布していたが、三田谷側の20～23支群では、ほぼ一列に並んで分布しており対象的である。

第14トレンチ付近の凝灰岩は南側の斐伊川放水路開削部外側に向かって続いていた。東側は、凝灰岩の岩盤が露出していたが、急斜面で、亀裂が多く、横穴墓の分布は認められない。また北側には、凝灰岩は続いておらず、砂岩質の脆い地山が露出していて、横穴墓は見られなかった。尾根の先端に



第7図　斐伊川放水路第14・15トレンチ土層断面図（1：80）



第８図　上塩冶横穴群第20支群遺構配置図（１：800）

は、近代の墓地があり、既に移転されている。

２．横穴墓の調査

トレンチ調査等の結果により、この支群の横穴墓は５基存在すると断定し、５基の横穴墓について北側より、第１号横穴墓・第２号～第５号横穴墓と呼び掘削を開始した。表土をはがすと広い範囲で凝灰岩の岩盤が露出し、５基とも開口した。閉塞石は見えず、羨門が開いたことから全て盗掘を受けたものと推定された。横穴墓は標高50～55ｍの間に一列に分布し、他の場所には見られない。また、この付近は傾斜がきつく、各横穴墓とも前庭部を広く採ることはできない。横穴墓の掘られている部分は、凝灰岩のほぼ一枚岩であるが、横穴墓前面より下方は脈が多く入っている。また、凝灰岩そのものも小石のような不純物を非常に多く含んでおり、北隣に位置する第21支群の岩質に比べても非常に悪い。

第１号横穴墓

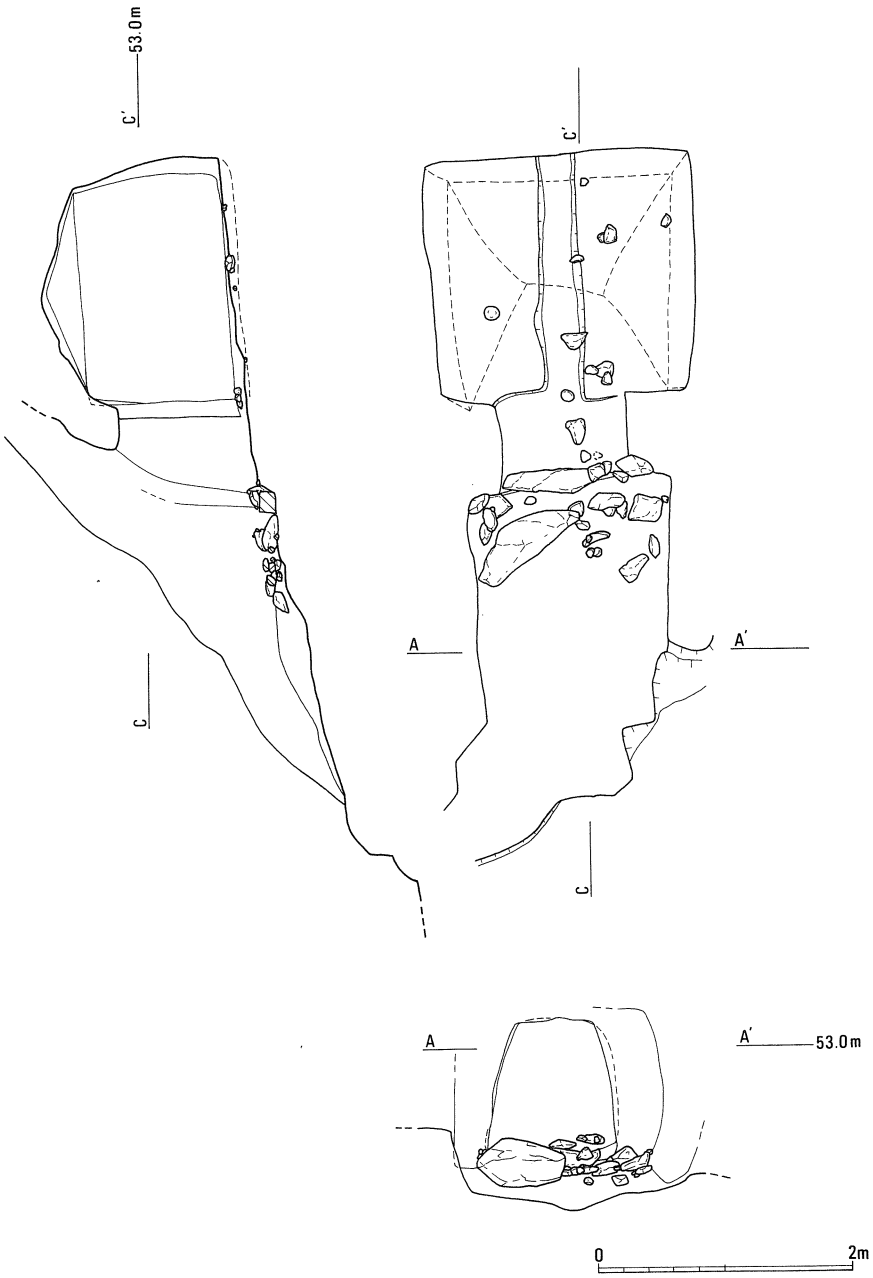
第１号横穴墓は、第20支群中のもっとも北側に位置する横穴墓で、玄室床面の標高は、約52.5ｍを測る。

第１号横穴墓は、すでに埋土の大半が失われており、羨門の上部約⅔が開口していた。前庭部床面直上から完形を呈する太刀（Ｍ－１）が出土しており、かなり徹底した盗掘が行われていることが予想された。土層断面では、表土が途切れる事なく玄室奥まで続いており、残存する閉塞石を覆った土は、玄室内の埋土を切っている事から、開口した後の堆積と考えられる。

閉塞石は、一部が残存していたが、それによると、一抱えもある大きな自然石を積み上げたようで、玄門付近に加工痕のある石材は存在しない。閉塞石の一部と見られる石は、玄室内にも見られたが、盗掘時に破砕し、混入したものであろう。前庭部の幅は約1.5ｍ、長さ約2.8ｍの比較的狭長な形状で、排水溝は見られない。前庭部奥には、前述した閉塞石の一部が見られる。

羨道部は、全長約0.5ｍ、幅約１ｍ、高さ約１ｍで、羨門部の掘り込みが僅かに残る。

玄室の立面形は、四注式平入り形状である。天井までの高さは約1.6ｍで、大人が立つと頭が支える。玄室平面は、奥行き約2.2ｍ、羨道近くで幅2.0ｍ、奥壁付近で約2.2ｍを測る台形を呈している。棟との鉛直方向に２面のベッドが作り出されており、それぞれ、幅約１ｍ、高さ約15cmを測る。棺の痕跡は見られない。玄門より向かって左側のベ

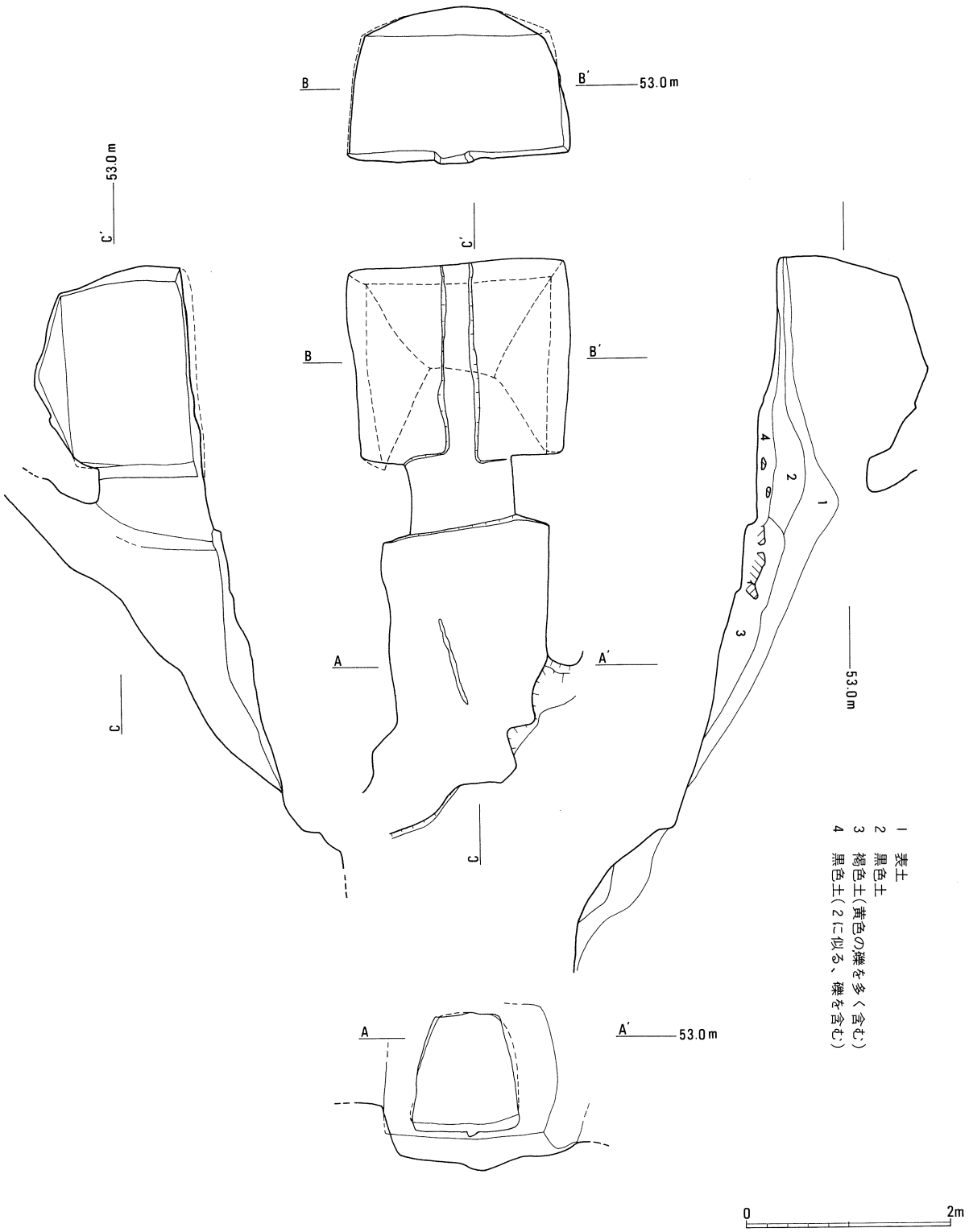


第９図　第20支群第１号横穴墓閉塞状況（１：60）

ッド上で須恵器蓋（SU－１）が出土している。

第２号横穴墓

第２号横穴墓は、第１号横穴墓の南側に隣接した僅かに下方、標高約51.5m付近に位置している。この辺りは、非常に斜面のきつい位置で、このために前庭部はほとんど長さをもっていない。確実に前庭部と判断される平坦面は、僅か1.5mしかなく、その先は、ごつごつした岩の亀裂が続いている。



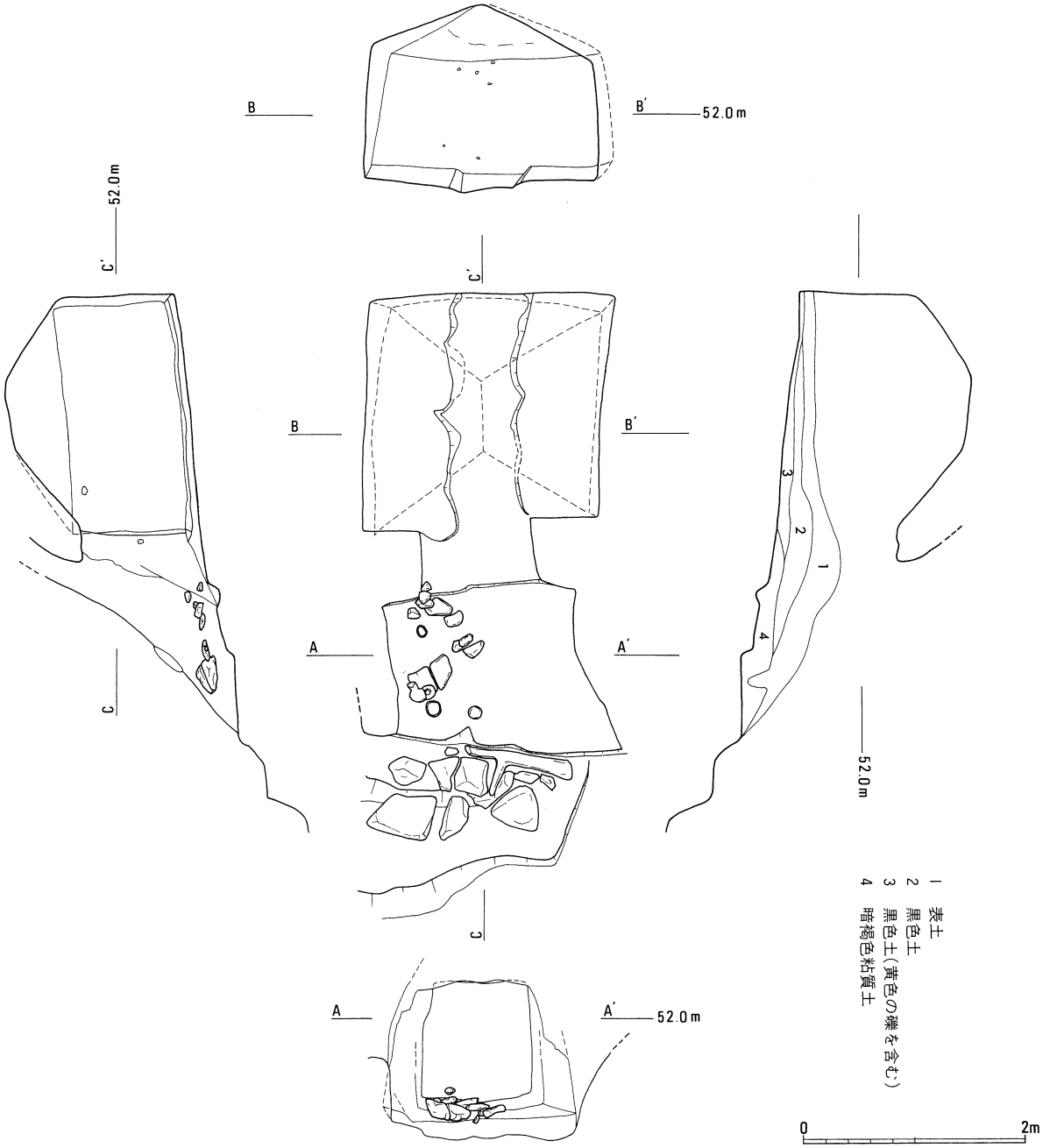
第10図　第20支群第１号横穴墓実測図（１：60）

埋土は、ほとんど流失しており、伐採を行った時点でほぼ完全に開口した。

前庭部は、幅約1.7mを測り、前述の通り、全長に対して幅の方が広い。玄門近くに拳大から人頭大の石が見られ、閉塞石の一部と推定される。羨道部は幅約１m、長さ約0.5m、高さ約１m、を測るが、玄室主軸に対し、僅かに南に振っており、いびつな印象を受ける。玄室は、一辺約2.2mを測る、ほぼ正方形だが、床面・壁面とも造作が雑で、荒れた印象である。第１号横穴墓と同様に２面のベッドが作り出されている。玄室内は、高さ約1.8mあり大人が立つ事ができる。立面形は四注式で、妻入り構造である。

第３号横穴墓

第３号横穴墓は、１・２号横穴墓から僅かに離れた、標高約51.5m付近に位置している。伐採時点



第11図　第20支群第２号横穴墓実測図（１：60）

では、窪みとして確認されていたもので、この支群では、唯一埋没していた横穴である。閉塞石も、玄門の約½を塞いであり、第20支群中もっとも残りが良いと判断されるものであった。

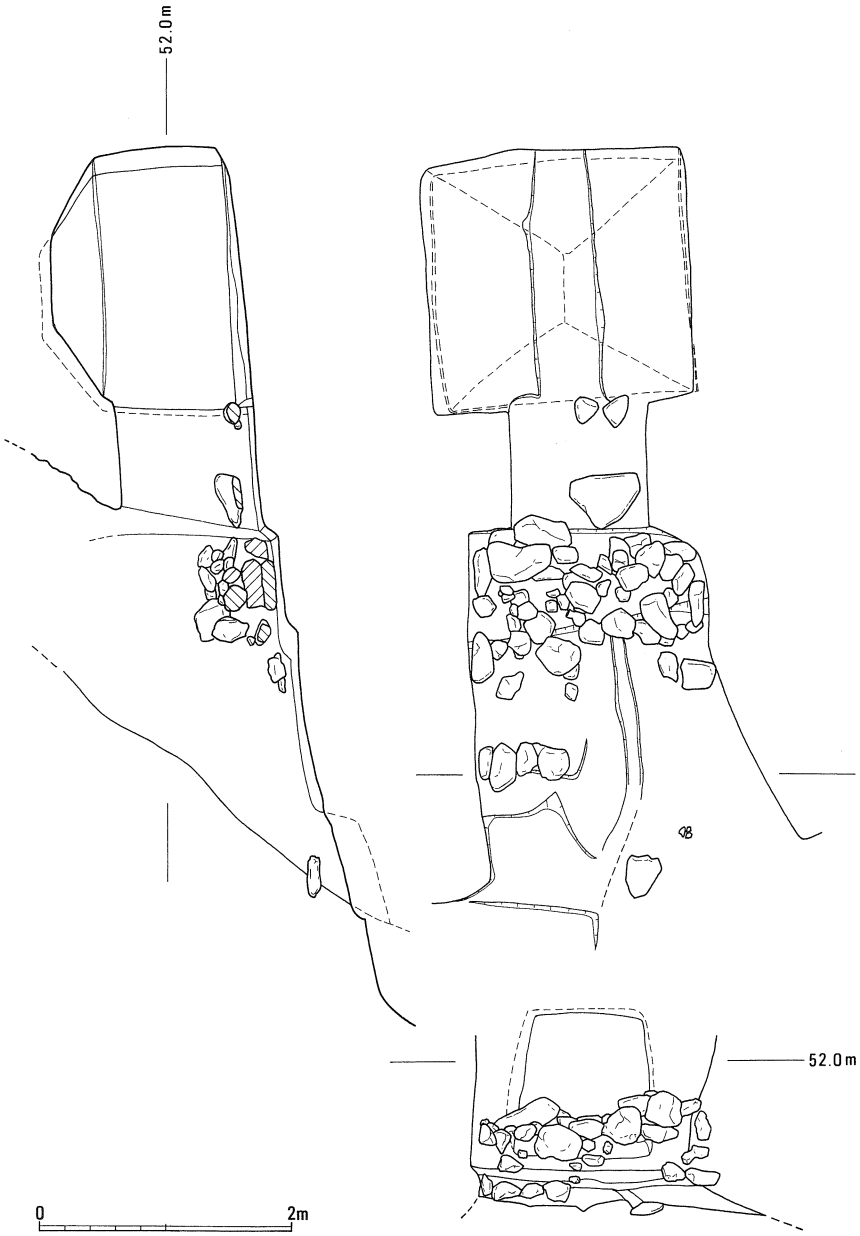
前庭部は、幅約２ｍ、長さ約３ｍでやや狭長な印象を受ける。前庭部玄門側に高さ10cm程の段があり、幅約50cmから１ｍのテラスを造り出している。このテラスの手前、玄門から約70cm離れた位置から排水溝が延びている。排水溝は、幅約10cm程の断面箱形を呈す構造で、わずかに西に蛇行している。閉塞石と思われる礫は、テラス上に集中しており、この排水溝はあたかも、閉塞後に掘削したかのような印象を与える。

羨道部は幅約１ｍだが、玄門直前の前庭部幅が約1.8ｍしかないため、広く感じる。長さ約１ｍ、高さも約１ｍを測る。

玄室は長さ約2.1ｍ、幅約２ｍを測るほぼ正方形を呈する。四注式妻入り形状を呈し、高さは約1.6ｍである。天井と壁面の境には、浅い溝を備え、天井部と側壁が面違いになっている。第１・２号横穴と同様に幅約80cmのベッドを主軸と併行に２面備える。

第４号横穴墓

第４号横穴墓は、標高約52.5ｍに位置する。前庭部・玄門は比較的小規模であった。全長約1.7ｍ、幅約1.5ｍを測る。前庭部には、幅約20cmの溝がＴ字形に延びている。玄門直前では、あたかも閉塞石を据えたかのように彫り込まれているが、閉塞石には自然石が使われたようである。閉塞石は、盗掘時に破壊されたようで、玄室内にも多くが散乱していた。羨道は、全長約70cm、高さ約１ｍで、幅は、約１ｍを測るが、玄室に向けてやや広

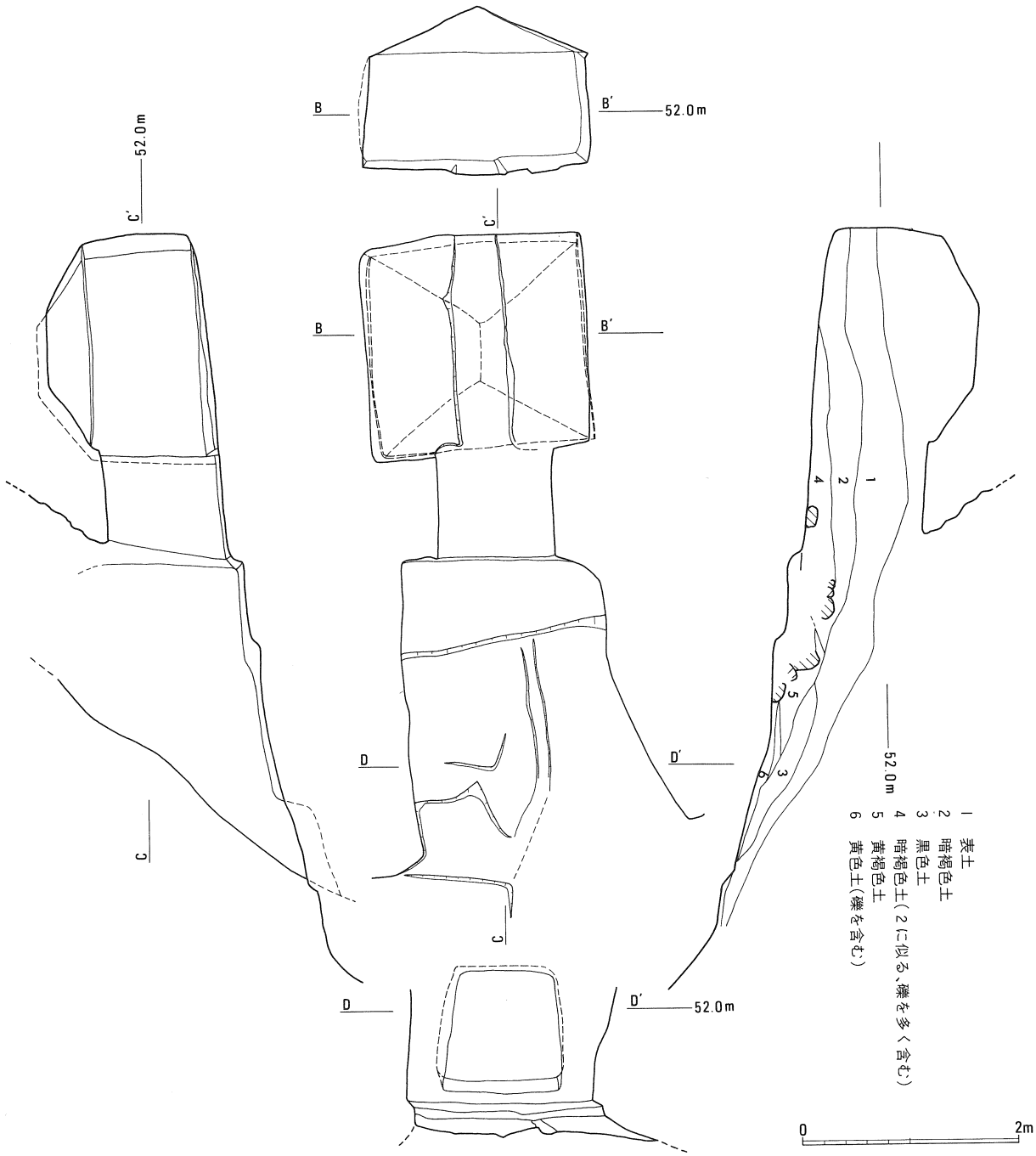


第12図　第20支群第３号横穴墓閉塞状況（１：60）

がっている。玄室の平面形は、扇形とも言えるような形状で、羨道側で幅約1.7m、奥壁側で約2.5mを測り、奥壁右側から側壁の間は、明確なコーナーを持たない。各界線は、一応彫られてはいるものの、途切れがちで、いびつである。四注式を意識した形状を呈し、平入りである。天井までの高さは、約1.5mを測る。ベッドは持たない。

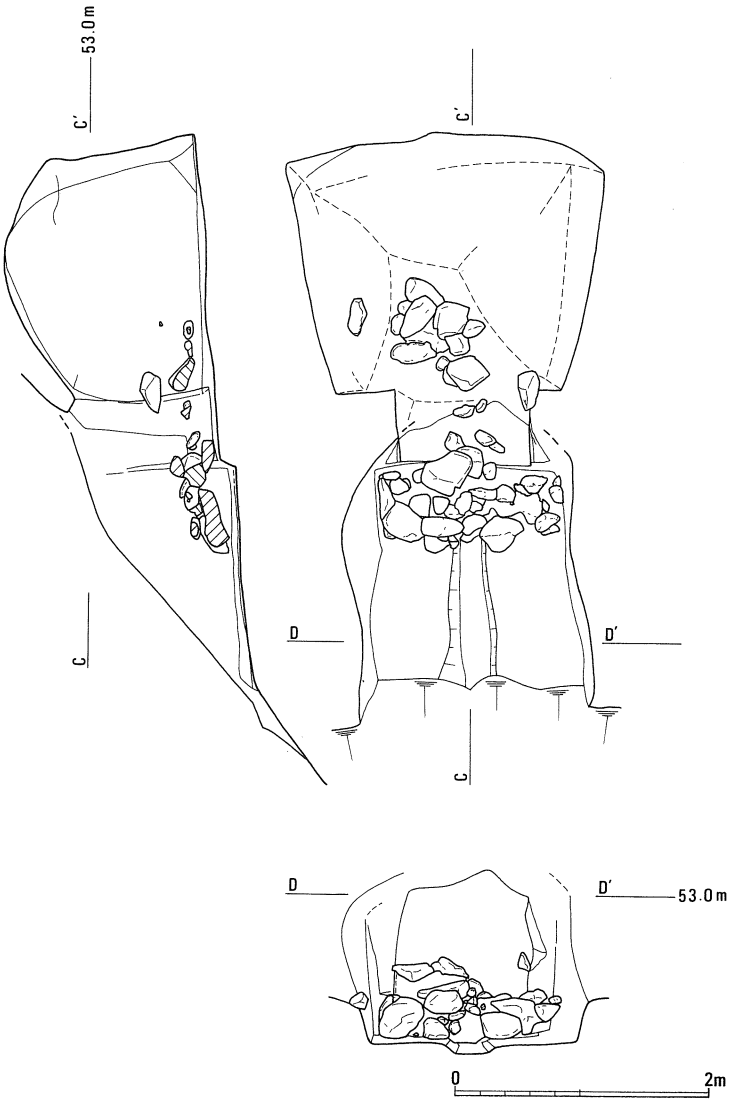
第5号横穴墓

第20支群中最も南に位置する横穴墓で、玄室の標高は、約53mを測る。幅約1.6m、長さ3mを測る前庭部には、中央と両脇に3本の排水溝が設けられている。中央のものは、幅約30cmの断面箱形を呈すしっかりしたものだが、左右の排水溝は、断面V字形を呈している。前庭部先端では、須恵器甕



第13図　第20支群第3号横穴墓実測図（1：60）

（ＳＵ－17.18）が破片となって集中的に出土した。これには、多少の土が咬んでおり、墓前祭祀によるものと言うよりは、盗掘時のものであろう。羨門から玄室にかけては、拳大から人頭大の自然石が散乱しており、これが閉塞石と思われる。羨道は、幅約１ｍ、長さ約60㎝、高さ約１ｍである。玄室の平面形は、ほぼ正方形だが、南壁が約1.9ｍを測るのに対し、北壁が約2.2ｍあり、北側が広い。四注式妻入り形状だが、天井と壁の界線は一部で互い違いになるなど複雑である。各界線は、溝状に窪んでいる。前庭部中央の排水溝は、そのまま玄室内まで延びており、ベッドを作り出している。



第14図　第20支群第４号横穴墓閉塞状況（１：60）

第５号横穴墓の前庭部北側には、岩盤斜面を「コ」の字形の溝で区画した場所が見られる。溝中にはのみ痕が見られ、横穴墓と同様の工具で掘られているが、現状のままでは機能的には意味をなさない。掘られた形から、方形の板石を切りだそうとしているか、立面方形に横穴を掘ろうとしているように見える。これは、新たな横穴墓の掘削途上で放棄されたものか、切り石による閉塞石を切り出そうとしたことが考えられる。

安来市の臼コクリ遺跡では、掘削途上で放棄された横穴墓が検出されている。(註2) 臼コクリ遺跡は、花崗岩台地に掘られた16基からなる横穴墓群で、石棺を内包する横穴墓があるなど優れた遺物を出土している。このうち、Ｎ―10号横穴墓が掘削途上の横穴墓で、花崗岩中に前庭部を造り、玄室を掘ろうとした段階で、硬い流紋岩の岩盤にあたったため、放棄したものと考えられている。

また、出雲東部から鳥取県西部にかけての横穴墓群には、小横穴と呼ばれる施設が付属することがある。鳥取県西伯郡西伯町のマケン掘横穴墓群(註3)では、４基の小横穴が検出されている。それらは、主たる横穴墓の前庭部左側側面に掘られており、奥行き１ｍ未満の小さなものである。マケン掘横穴墓群では、横穴墓を小型化した施設と考え、小児埋葬施設として考えている。

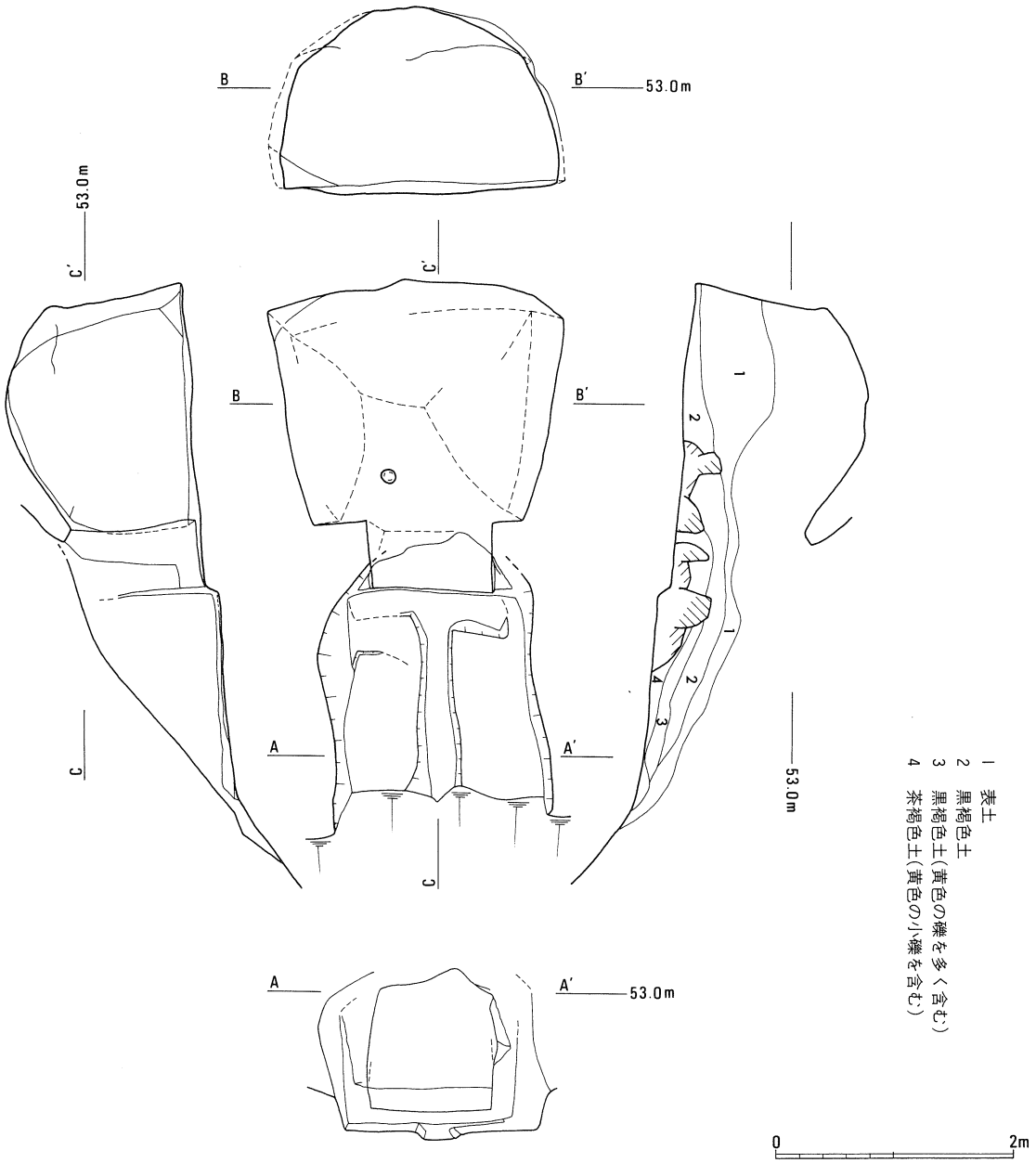
上塩冶横穴群では、第21支群で、第１号横穴墓の隣に、断面楔形の小横穴（ＳＸ－１）が掘られている。この施設が、マケン掘横穴墓群で小横穴と呼ばれている施設なのか、掘削途上で放棄されたも

のかは分からない。

後述する第21支群では、第８号横穴墓と第９号横穴墓の前庭部に切り合い関係が見られた。しかしながら、これはかなり特殊な状況であり、他の横穴墓に切り合い関係の見られる箇所はない。第20支群では、全ての横穴墓が盗掘を受けており、封土が非常に薄く、堆積状況によっても先後関係をうかがうことはできない。須恵器をはじめとする出土遺物もきわめて少なく、時期差に付いて言及することは不可能である。

横穴墓間で、何らかの差を示すものが存在するとしたら、玄室形態しかない。上塩冶横穴群での玄室形態は、従来四注式妻入りが多く、一部にドーム形が見られると説明されてきた。しかし、第20支群では、四注式平入りの横穴墓（第１・４号横穴墓）が２基確認された。

第１号横穴墓は、玄室平面形が、ほぼ正方形を呈しており、他の横穴墓と大きな変化は見られない。

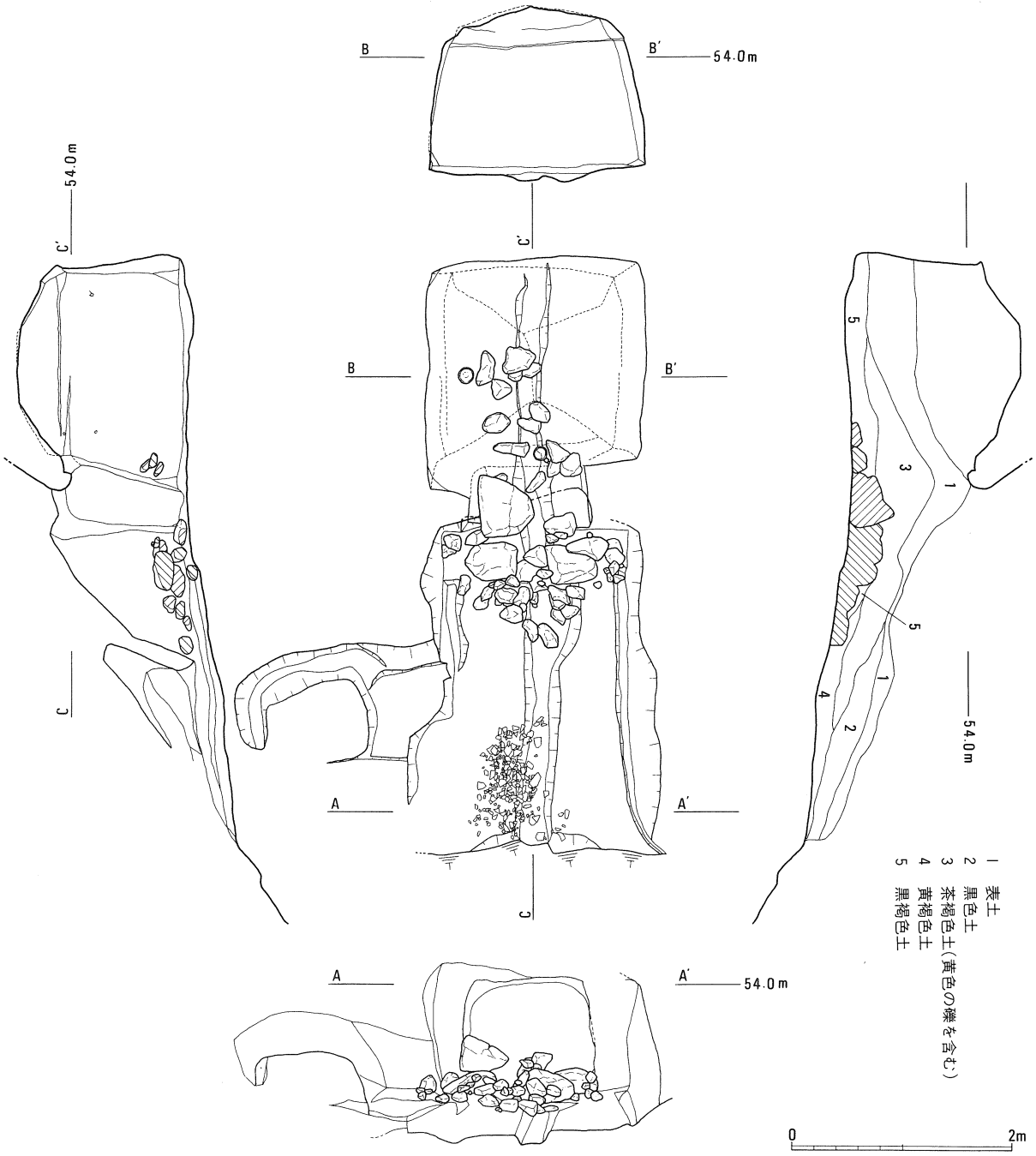


第15図　第20支群第４号横穴墓実測図（１：60）

前庭部から、玄室の平面形まで全て同一の規格で造られているのに、軒線方向だけが異なっている。また、第４号横穴墓は、あたかも途中で設計変更したかのように、平面形・天井形態ともいびつである。後述する墓道と思われる施設が、この第４号横穴墓付近までしか続いていないことも合わせ、この支群の中で、特異な存在となっている。こうした変化が、時期差を示すものとは、即断できないが、一連の同一支群中にあっても、こうした差が存在することは注目に値する。

３．その他の遺構について

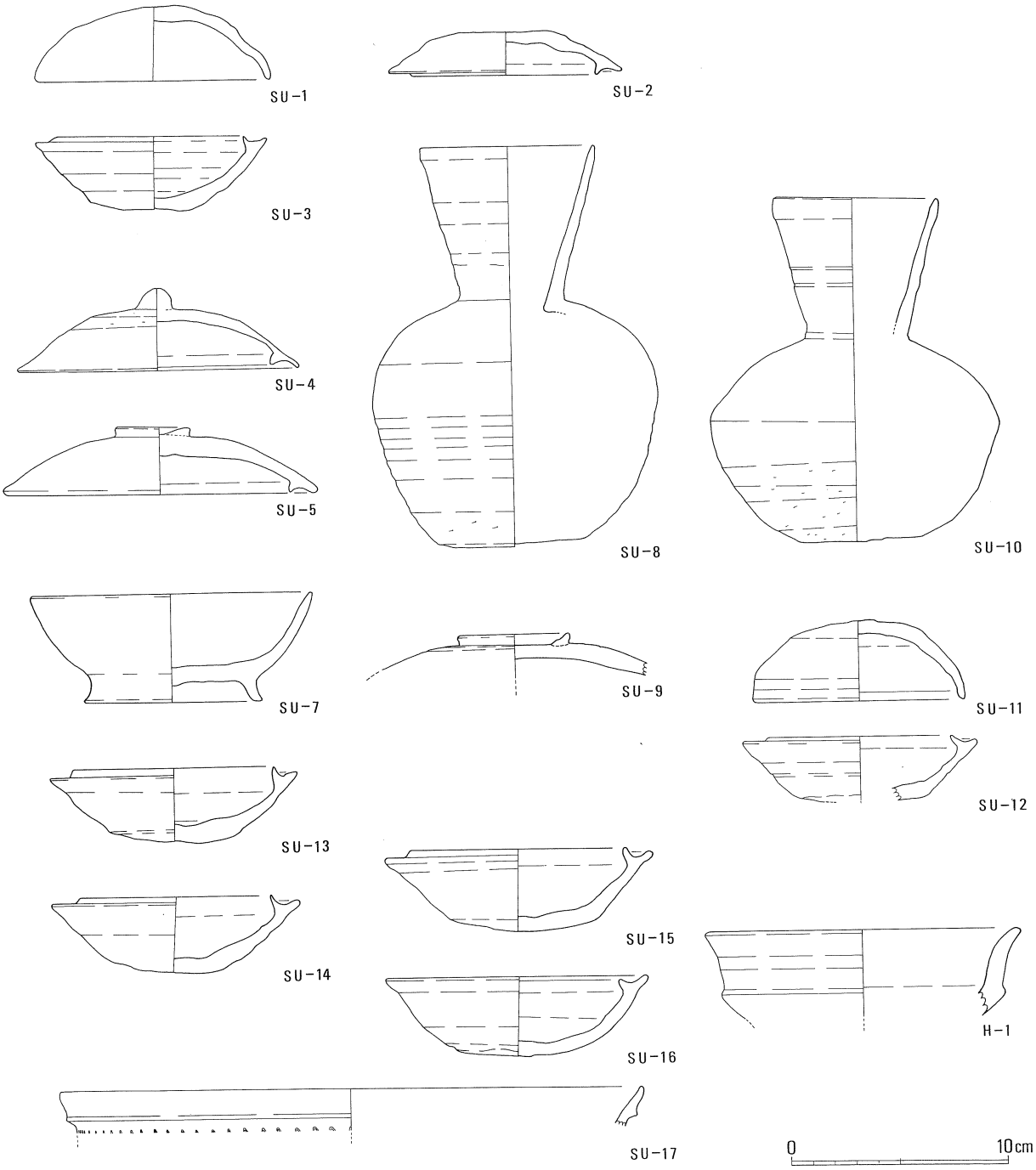
第５号横穴墓の南側の岩盤には、円形の彫刻が施されている。直径約10cmの円内を彫りくぼめたものと、直径約12cmの輪の形に彫ったものの２例がある。輪の部分の幅は約２cmである。この彫刻が施



第16図　第20支群第５号横穴墓実測図（１：60）

されている部分の下方には、岩盤の斜面にわずかに平らな部分が見られ、墓道が存在した可能性がある。この彫刻付近には、遺物は見られず、この彫刻が施された時期はもちろん、人工のものであるかどうかも不明である。

この部分のすぐ近く、第５号横穴墓から南側の標高55ｍ付近は、他の部分に比べ、等高線の間隔が広くなっている。南側の岩盤上では、人が歩けるほどの平坦面が確かに存在し、墓道が存在した可能性が考えられる。調査区南端では急斜面となって、平坦面は消滅しているが、岩盤が露出している部分には一応続いており、それによると、調査区南端付近から始まり、第５号横穴墓前庭部の下を通り、

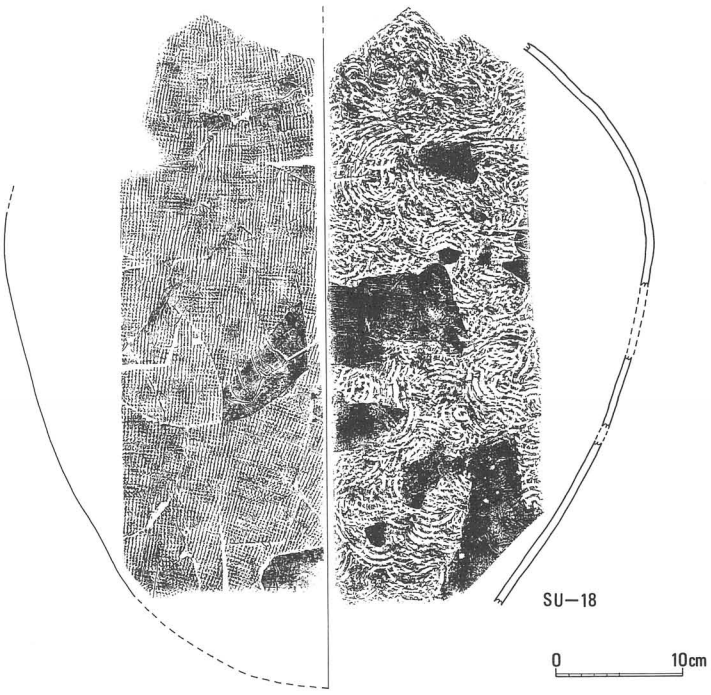


第17図　第20支群第１～５号横穴墓出土土器実測図（１：３）

第３・４号横穴墓の前庭部直前まで続いている。現状では凝灰岩の風化が著しく、道とは言いがたいが、偶然とは考えにくい。

横穴墓群下方の掘削

横穴墓下方の斜面は、比較的埋土が厚く、須恵器を中心に大量の遺物が出土した。前述の通り、横穴墓群前面の標高40～45ｍ付近は、他の部分に比べると極端に傾斜が緩くなっており、何らかの遺構の存在が予想されたが、確認できなかった。この部分から出土した遺物は、大半が古墳時代の遺物であったが、石斧（ＳＴ－1～3）、等の古墳時代以前の遺物の他、縄文土器片（Ｊ－1）１点を採集している。



第18図　第20支群第５号横穴墓出土土器実測図（１：６）

４．第20支群出土遺物について

土　器　類

第１号横穴墓からは、須恵器２点が出土している。ＳＵ－１は口径107㎜、器高35㎜を測る蓋で、内面に×印のヘラ記号を持つ。

ＳＵ－２は、口径85㎜、器高20㎜の返りを持つ蓋である。頂部には強い回転ヘラケズリが施されるが、つまみの痕跡はない。当初坏身の可能性も考えていたが、器高がなく、組み合う蓋が想像できないことから蓋とした。

第２号横穴墓からは、５点の須恵器が出土している。ＳＵ－３は、坏で、組み合う蓋は見あたらなかった。全面ナデ調整されている。

ＳＵ－4・5は、返りを持つ蓋である。ＳＵ－４は擬宝珠状の、ＳＵ－５は、輪状のつまみを持つ。ＳＵ－７は、高台のつく坏で、ＳＵ－4・5に組み合うものと思われる。体部は、緩やかに内湾し、しっかりした高さ９㎜の高台を持つ。

ＳＵ－８は高台の無い長頸壺で、体部下端からケズリ痕を強く残している。底部は回転ヘラ切りである。

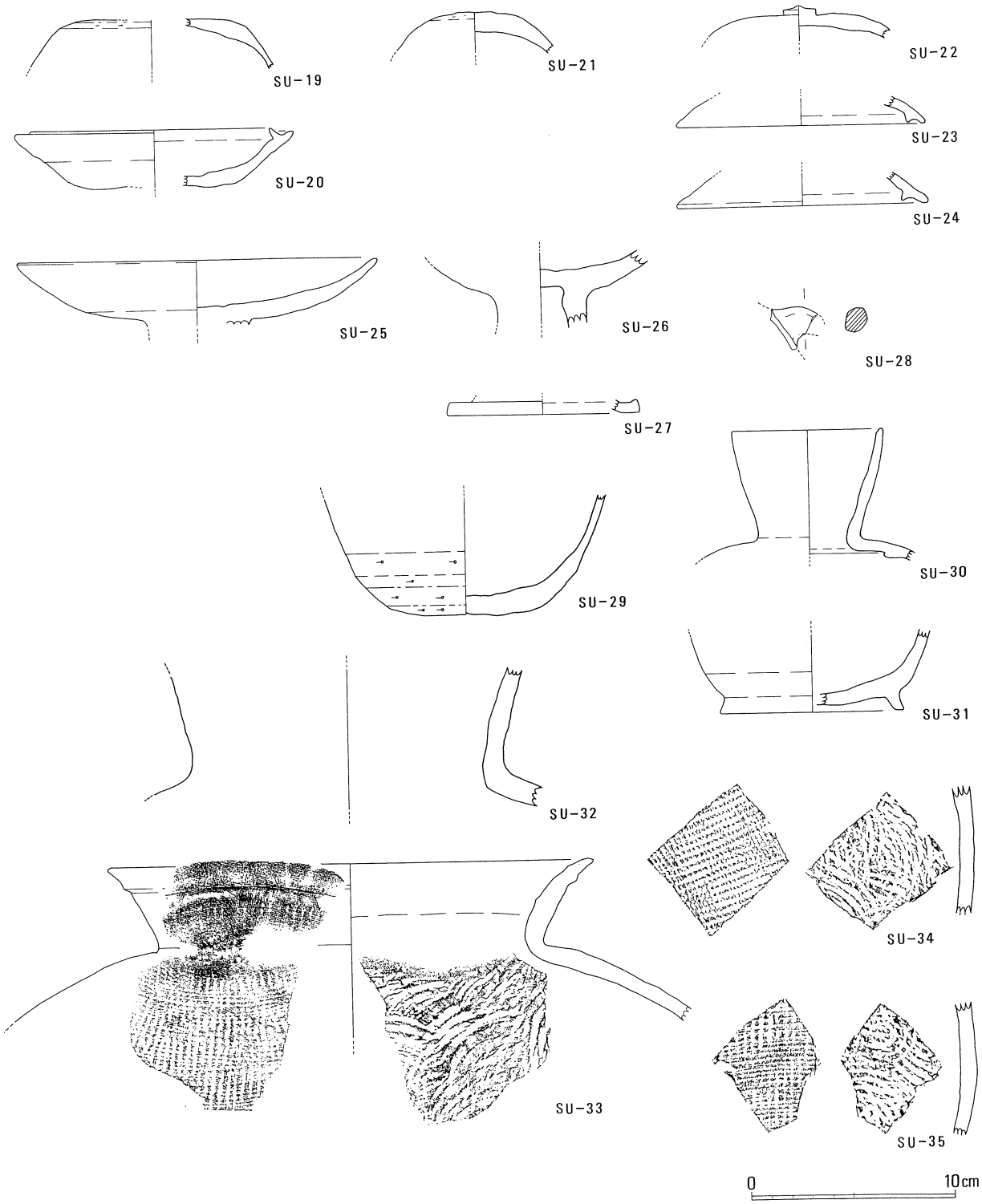
ＳＵ－９は、蓋の小片で、輪状つまみがつく。端部の形態は、おそらく消滅直前の小さな返りを持つものであろう。

第３号横穴墓は、出土遺物が少なく、図示できるものは、ＳＵ－10しか無かった。ＳＵ－10は、長頸壺で、ＳＵ－８に比べ、体部が低く張った形態を呈す。体部下半から強いヘラ削りを残し、底部は、回転ヘラ切りである。

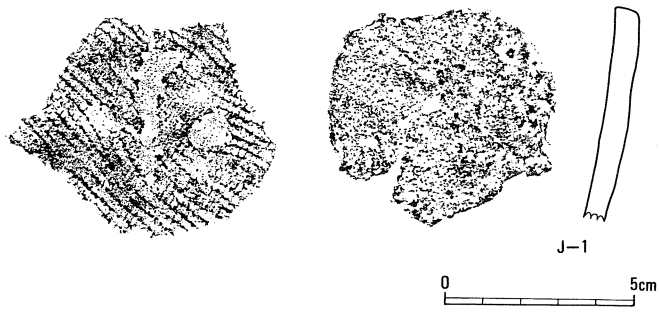
ＳＵ－11～14は、第４号横穴墓から出土した。ＳＵ－11は蓋で、天井部にわずかにケズリ痕を残す。口縁部内面にわずかにアクセントを持つ。ＳＵ－12～14は、返りを持つ坏で、底部には、わずかにケズリの痕跡を残す。ＳＵ―14の底部内面には、ヘラ記号（×）を持つ。

第５号横穴墓は、第20支群中では、遺物量が比較的豊富であった。ＳＵ－15・16は、返りを持つ坏で、ＳＵ－16は、底部にわずかにケズリを残している。

ＳＵ－17・18は、前庭部先端で集中して出土した甕で、同一個体と思われる。口縁部外面に櫛描き



第19図　第20支群出土土器実測図（１：３）



第20図　第20支群出土縄文土器実測図（１：２）

波状文を施し、体部外面は、平行タタキ、内面は同心円文の押さえ具の痕跡が残る。器高60cm以上あるものと思われる。

Ｈ－１は、第５号横穴墓の前庭部から出土したものではあるが、明らかに横穴墓に伴うものではない。口径142mmに復元できる二重口縁を持つ甕で、小片となって３点が出土した。体部の形状は不明だが、突出部はわずかに上を向く。直下で大きく外反する口縁部は、端部に小さな面を持つ。器壁が非常に厚く、淡褐色を呈し、砂粒を多く含んでいる。

遺構に伴わない須恵器類は、第19図に示した。ＳＵ－19・21は、蓋である。いずれも頂部にケズリ痕を残している。いずれも完形ではないが、ＳＵ－21は、小型化したものであろう。

ＳＵ－20は坏で、全面をナデ調整する。ＳＵ－22は、擬宝珠状つまみを持つ蓋で、口縁部の形態は不明である。全面をナデ調整する。

ＳＵ－23・24は、蓋の口縁端部で、退化した小さな返りを持つ。いずれも復元口径100mm前後になる。

ＳＵ－25・26は、高坏で、いずれも緩やかに内湾する体部を持つ。「すかし」等は分からない。ＳＵ－27は、小型の高坏の脚部である。

ＳＵ－28は、提瓶の把手である。提瓶と考えられる確実な個体はこれ以外に出土していないが、ＳＵ—30は、体部と頸部の継ぎ方に特徴があり、提瓶と考えられ、同一個体の可能性がある。

ＳＵ—29は長頸壺の底部であろう。体部下半に強いケズリ痕を残している。

ＳＵ—31は、高台を持つ底部の小片である。体部が厚く、壺であろうか。

ＳＵ—32は、甕の頸部の小片である。破片の最上部には沈線の一部が残っており、頸部の長い、沈線・波状文を施した大型の甕であろう。体部外面は、頸部に近い位置のため、ナデが入り、タタキの痕跡は見えない。体部内面には、同心円文の押さえ具の痕跡を残している。

ＳＵ—33は、甕の口縁部付近の破片である。口縁部外面には、櫛の跡が残る。体部外面には、平行タタキを交互に施した後、横方向にカキメが加えられる。内面は、同心円文の押さえ具の痕跡を残す。

ＳＵ—34・35は、第14トレンチから出土した甕の体部である。いずれも外面には平行タタキを交互に行い、カキメを施す。内面は、同心円文である。以上の遺物はいずれも横穴墓から落ちてきたものと考えられる。

Ｊ－１は、第20支群表土中から出土した。外面には縄文を、内面は荒いナデで仕上げている。体部中央の小片であるため、時期は分からない。第20・21支群では、縄文時代の遺物は他に見られない。また、下方の第11トレンチでも条痕地の深鉢は、見られるものの、縄文を持つものは見られない。第11トレンチの遺物は礫層中からの出土であったため、石器の検出そのものが困難であったこともあるが、古い様相を示す石器は出土していない。

その他の遺物

第20支群では金属器の出土はきわめて少なく、わずかに２点が見られるだけである。横穴墓の調査にあたっては、玄室内の土は全て洗浄もしくはふるいに掛けるなどして微少遺物の採集に努めたが、玉類なども確認できなかった。

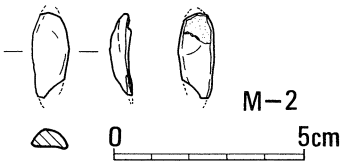
M—１は、第１号横穴墓で出土した太刀である。柄は、残存していない。茎端が欠損しており、全長はうかがい知ることができない。刀身部も随所で膨らんで板状に剝げかかった場所が見られる。残存長841㎜、推定刀身幅33㎜、推定厚12㎜前後と思われる。刀身は、刃部側に向かって大きく反っている。関は、背側に確認できる。茎は残存長105㎜を測り、断面長方形を呈する。関から51㎜の位置に目釘が残っており、目釘穴は１箇所であった。鍔は、鎺と共に正常な位置からわずかにずれている。鎺は、長さ31.5㎜、長径 34.5㎜を測り、断面楕円形を呈する。鍔は楕円形を呈し、装飾は見られない。厚さ６㎜、長径45㎜、短径35㎜を測る。

第21図　第20支群第１号横穴墓出土鉄剣実測図(1:6)

M—２は、第２号横穴墓玄室内から出土した。木葉形をした小さなもので、基部と思われる部分が欠損している。残存している部分には、緑青が浮いており、材質に銅の成分が含まれていることが分かる。残存長22㎜、幅９㎜あり、４㎜の高さに湾曲している。厚さは約１㎜である。欠損した基部の部分に吊るすような造作が在ったものと想像されるが、現状では、用途は不明である。

ＳＴ—1～3は、第15トレンチ及び、第20支群黒色土中から出土した、太型蛤刃石斧である。破片となって３個体が出土したが、それぞれは接合しない。

ＳＴ－１は、残存長86㎜、幅45㎜、厚さ29㎜で、刃部長39㎜を測る。刃部は、下端ではなく片側側縁に延びている。黒灰色を呈す石材を使用している。ＳＴ－２は、太型蛤刃石斧の刃部付近の小片である。残存長39㎜、残存幅35㎜を測る。緑色の石材を使用している。ＳＴ－３は、太型蛤刃石斧基部で、刃部は残っていない。残存長144㎜、幅50㎜、厚さ42㎜を測る。側面を中心に多くの敲打痕が見られ、敲石に転用されているようである。ＳＴ－２と同様の緑色の石材を使用しているが、接合しない。付近では、弥生土器は出土していない。



第22図　第20支群第２号横穴墓出土金属器実測図（1:2）

第20支群で出土した遺物は、上記の通りである。前述の通り、遺物の絶対量が非常に少ない。第３・４号横穴墓では、須恵器すら少量しか出土していないのである。

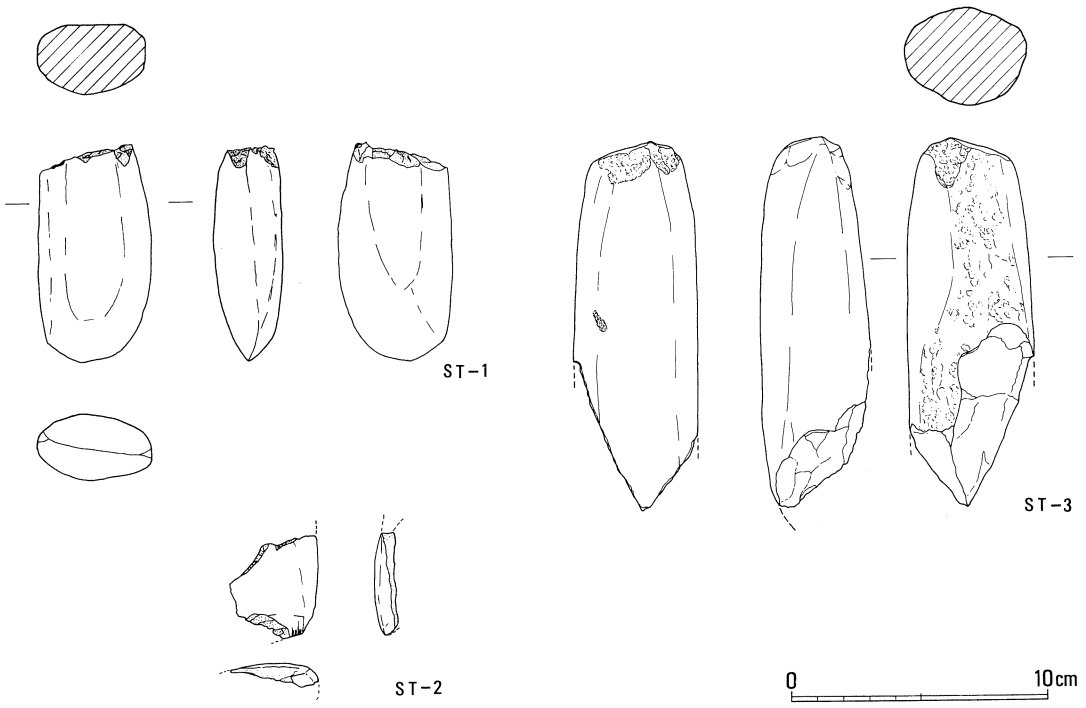
第１号横穴墓では、前庭部ながら大刀（Ｍ－１）が出土している。当然、盗掘によって、この位置に移動したのであろうが、第１号横穴墓の被葬者は、少なくとも大刀を所持していたことになり、他の副葬品を所持しなかったとは考えにくい。また、出土した２点の須恵器には、形式差が見られることから、追葬が行われていたことも予想される。これらのことから、第20支群ではかなり徹底した盗掘が行われたと想像される。

後述する第21支群にも同様のことが言えるが、出土遺物に装飾品が見あたらない。全ての横穴墓について、玄室を中心に掘削土をふるいに掛け、微小遺物の採集に努めたが、耳環・玉類は１点も出土しなかった。

註１　門脇俊彦　「上塩冶横穴群」『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』島根県教育委員会　1980年

註２　島根県教育委員会　『臼コクリ遺跡・大原遺跡』　1994年

註３　西伯町教育委員会　『マケン堀古墳群　北福王寺遺跡』　1990年



第23図　第20支群出土石器実測図（１：３）

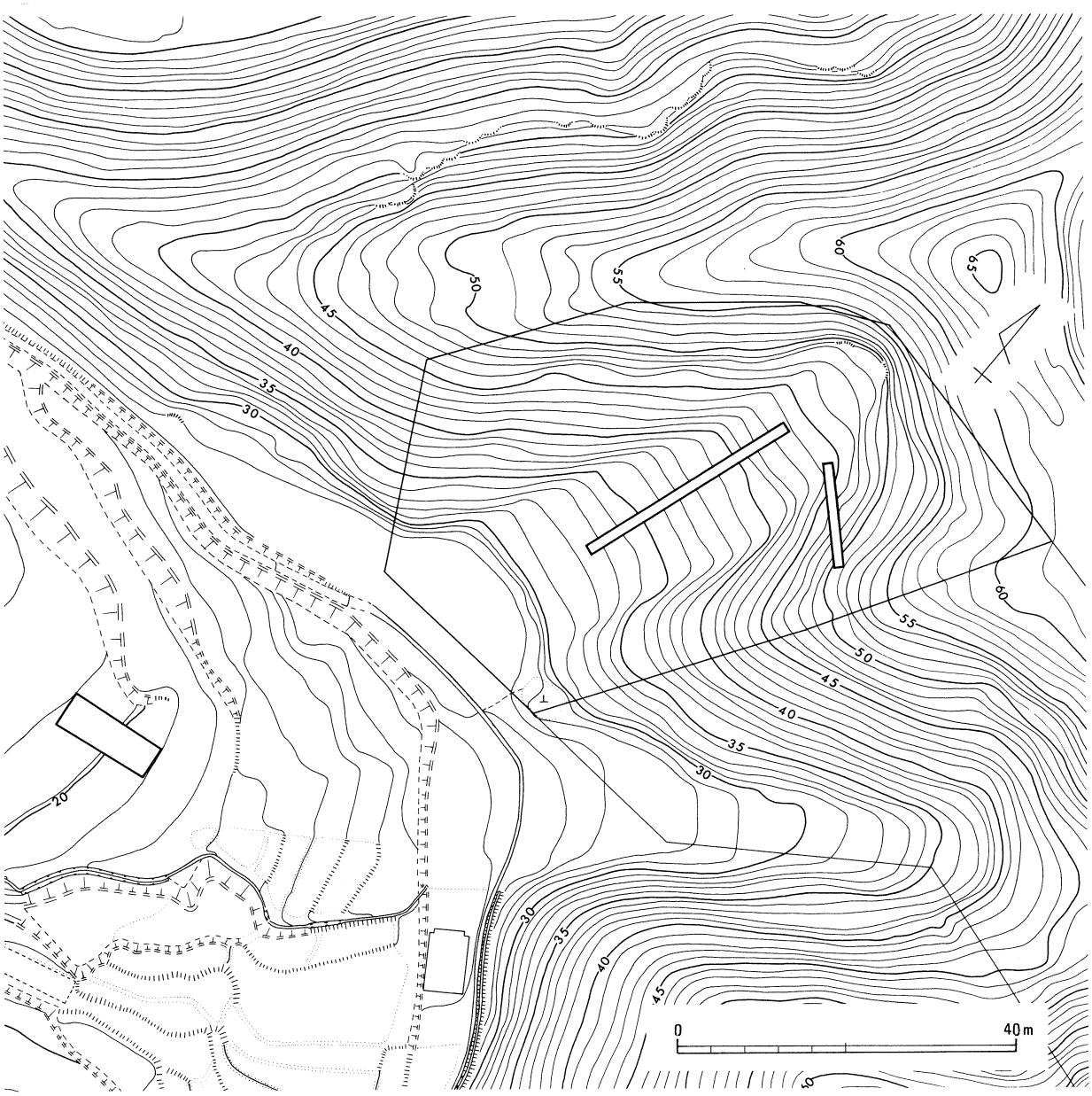
挿図番号 図版番号	出土位置	器種	法　　量	色調・胎土・焼成	備　　考
SU－1	第20支群 1号横穴 (前庭部)	坏蓋	口径107㎜　器高34.5㎜	灰白色1㎜程度の砂粒を含む良好	内面天井部ナデ　その他は回転ナデ 天井部(内側)にヘラ記号×あり(完形)
SU－2	1号横穴 前庭部	坏蓋	口径85㎜　器高20㎜	暗灰色　1㎜程度の白色の砂粒を含む 良好	天井部外面にケズリ痕を残す 天井部内面ナデ　その他は回転ナデ 平坦な天井部（ほぼ完形）
SU－3	20支群 2号横穴 前庭部	坏	口径87㎜　器高35㎜	良好 暗灰色　白い1～5㎜程度の石を含む	立ちあがりは内傾し低い 回転ナデ
SU－4	2号横穴 前庭部	坏蓋	口径106㎜　器高38㎜	明灰色　1㎜以上の砂粒含む 良好	ツマミはナデ　内面回転ナデ 外側面ヘラ削りの後回転ナデ（完形）
SU－5	2号横穴 前庭部	坏蓋	口径121㎜　器高31.5㎜	灰色～淡青灰色 2㎜以下の白色の砂粒を多く含む 良好	天井部に輪状つまみ 口縁端部内面にかえりをもつ 回転ナデ（ケズリの痕をよく残す）
SU－7	2号横穴 玄室内	坏	口径129㎜　器高50.5㎜ 底径82㎜	灰白色1～2㎜程度の白い砂粒含む 良好	深椀形　底部端に比較的高い高台 内面回転ナデ　外面ナデ
SU－8	2号横穴 前庭部	長頸壷	口径80㎜　器高187㎜	灰色～青灰色 良好　白色の微砂粒をわずかに含む	底辺に火だすきあり　体部下部外面 頸部は直接的に外傾する 強いナデによるヨコジマ(その他は回転ナデ)
SU－9	2号横穴	坏蓋	口径　器高	明青灰色(内面重ね焼痕)外側は暗灰色 白色の砂粒をごくわずかに含む　良好	内面を重ね焼の跡が残る 天井部に輪状つまみ 天井部外面　回転ヘラ切り 外面ケズリの後回転ナデ
SU－10	3号横穴	長頸壷	口径74㎜　器高160.5㎜	暗灰白色　白い粒を含む　良好	底部回転ヘラ切り　体部下方にケズリ その他は回転ナデ 頸部と肩部の境がわずかにとび出している (接合痕か？)　底面にわずかに窯着あり 頸部は直線的に外傾する　沈線2条(完形)
SU－11	4号横穴	坏蓋	口径97㎜　器高38㎜	灰色～淡茶灰色　白い粒黒い粒を少し含む　良好	天井部外面にケズリの痕をわずかに残す 内面はナデ　その他は回転ナデ 外面にロクロ目（遺存½以上）
SU－12	4号横穴 前庭部	坏	口径85㎜	淡灰色　1㎜弱の白い粒を含む　良好	立ちあがりは内傾して伸び比較的低い 回転ナデ（遺存½以下）
SU－13	4号横穴 玄室内	坏	口径91㎜　器高34㎜	暗灰色4㎜までの白い砂粒を含む 良好	底部外面にヘラを残す　底部内面はナデ その他は回転ナデ（完形） 立ちあがりは内傾しやや低い
SU－14	4号横穴	坏	口径89㎜　器高35.2㎜	青灰白色1㎜程度の白い砂粒を含む 良好	底部外面切離しのアト　内面はナデ その他は回転ナデ 底部内面にヘラ記号×（完形） 立ちあがりは内傾しやや低い
SU－15	20支群 5号横穴	坏	口径98㎜　器高39㎜	灰色　白い粒黒い粒を多く含む　良好	立ちあがりは内傾しやや低い 底部内面ナデ　その他回転ナデ(完形、接合)
SU－16	20支群 5号横穴 玄室内	坏	口径95㎜　器高37㎜	灰白色　白色の砂粒を含む　良好	底部外面にケズリ痕を残す 底部内面にナデ　その他は回転ナデ 立ちあがりは内傾し受部よりも低い(½以上)
SU－17	5号横穴 №144 前庭部	甕	口径271㎜	外面黒褐色　内面灰白色 細かな白い粒を含む　良好	複合口縁 口頸部にくし描き波状文 回転ナデ（½以下）
H－1	5号横穴 前庭部	甕	口径142㎜	明灰褐色3㎜までのガラス質を含む 良好	複合口縁部は外反気味で突出部の稜は鈍い 突出部の稜の下部ナデ？その他はヨコナデ 前期（小谷以前）(½以下)
SU－18	5号横穴 前庭部	甕		淡青灰色　密2㎜以下の砂粒を少量含む　良好	(遺存½以上)
SU－19	20支群 黒色土中	坏蓋	残高25㎜	暗灰色　1㎜前後の砂粒含む　良好	上部外側　ヘラ削り 外部側面　回転ナデ　内部ナデ
SU－20	20支群 表土中	坏	口径114㎜	灰褐色　0.5㎜程度の白い粒を含む 良好	底部内面ナデ　その他回転ナデ 立ちあがりは内傾し低い
SU－21	20支群 黒色土中	坏蓋		青灰白色　0.5㎜程度の砂粒を含む 良好	天井部外面ケズリ　その他回転ナデ 天井部内面にヘラ記号×
SU－22	20支群 黒色土色	坏蓋	残高17㎜	外白灰色　内白灰色 1㎜以下の砂粒を含む　良好	低めの宝珠状つまみをもつ つまみナデ　外面回転ナデ　内側ナデ
SU－23	20支群	坏蓋	口径105㎜	灰褐色　細かな砂粒を含む 良好	回転ナデ
SU－24	20支群	坏蓋	口径97㎜	灰褐色（表面は灰かぶり） 細かな細粒を含む　良好	回転ナデ
SU－25	20支群	高坏	口径176㎜	灰白色1㎜程度の白い粒を含む 良好	坏底部内面ナデ　その他回転ナデ 坏部はゆるやかに内湾し低い
SU－26	20支群 黒色土色	高坏		内面灰褐色　外面黒褐色 細かな砂粒を含む　良好	

挿図番号 図版番号	出土位置	器種	法　　量	色 調・胎 土・焼 成	備　　考
ＳＵ－27	20支群	高坏	底径94㎜	灰褐色　微砂粒含む 良好	
ＳＵ－28	20支群 黒色土中	提瓶		暗青灰色　白色の微砂粒をわずかに含む 良好でよく焼きしめられている	
ＳＵ－29	20支群 黒色土中	壷	残高58.5㎜	明灰色　１㎜以上の砂粒を含む 良好	外面ヘラ削り　内面底部ナデ その他回転ナデ
ＳＵ－30	20支群 黒色土中	提瓶 ？	口径72㎜	灰褐色　１㎜程度の砂粒を含む 良好	回転ナデ
ＳＵ－31	20支群 黒色土中	壷？	底径90㎜	灰褐色　細かな砂粒を含む 良好	底部回転ヘラ切り 高台をつける
ＳＵ－32	20支群 黒色土中	甕	残高69㎜	外（頚は黒色、胴体灰色）内暗灰色 １㎜程度の砂含む　良好	頚部分がナデ 内面に同心円押当具痕 ½以下
ＳＵ－33	20支群 黒色土中	甕	口径240㎜	外灰白色　内淡青灰色　密 良好	口縁部は外反 口縁部内外面　回転ナデ 外面平行多き　内面円孤押当具痕
ＳＵ－34	14トレンチ	甕		暗灰色　白色砂粒含む　良好	甕胴部の小破片 外面平行多き 内面円孤押当具痕
ＳＵ－35	14トレンチ	甕		暗灰色　白色砂粒含む　良好	甕胴部の小破片 外面平行多き 内面同心円押当具痕
Ｊ－１	20支群 表土中			赤褐色　１㎜前後の白色の砂粒を含む 良好	ヨリ紋土器
Ｍ－１	１号横穴 前庭部	直刀	残存長841㎜　幅33㎜ 厚さ12㎜		鍔・目釘等が残存　鍔は位置がずれている
Ｍ－２	２号横穴 玄室内	不明	残存長22㎜　幅９㎜ 厚さ４㎜		飾り金具か　緑青が浮く
ＳＴ－１	20支群 表土中	石斧	長さ82㎜　幅46㎜ 厚さ27㎜	黒色ガラス状粒含む	
ＳＴ－２	15トレンチ		石斧	緑色ガラス状質粒含む　固い	
ＳＴ－３	20支群 表土中	石斧	長さ147㎜　幅49㎜ 厚さ42㎜		

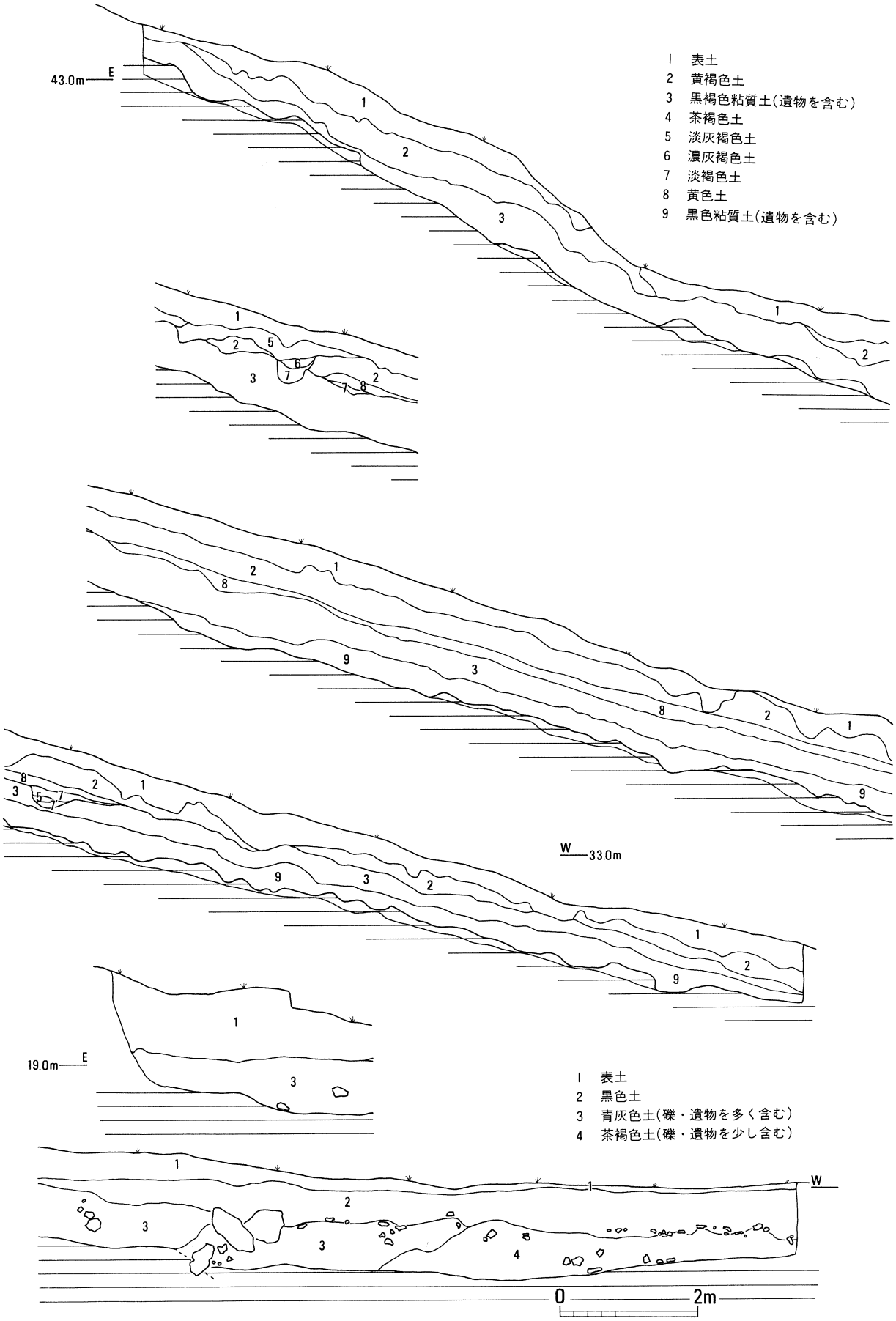
Ⅳ　上塩冶横穴群第21支群の調査

1．トレンチ調査と調査区の設定

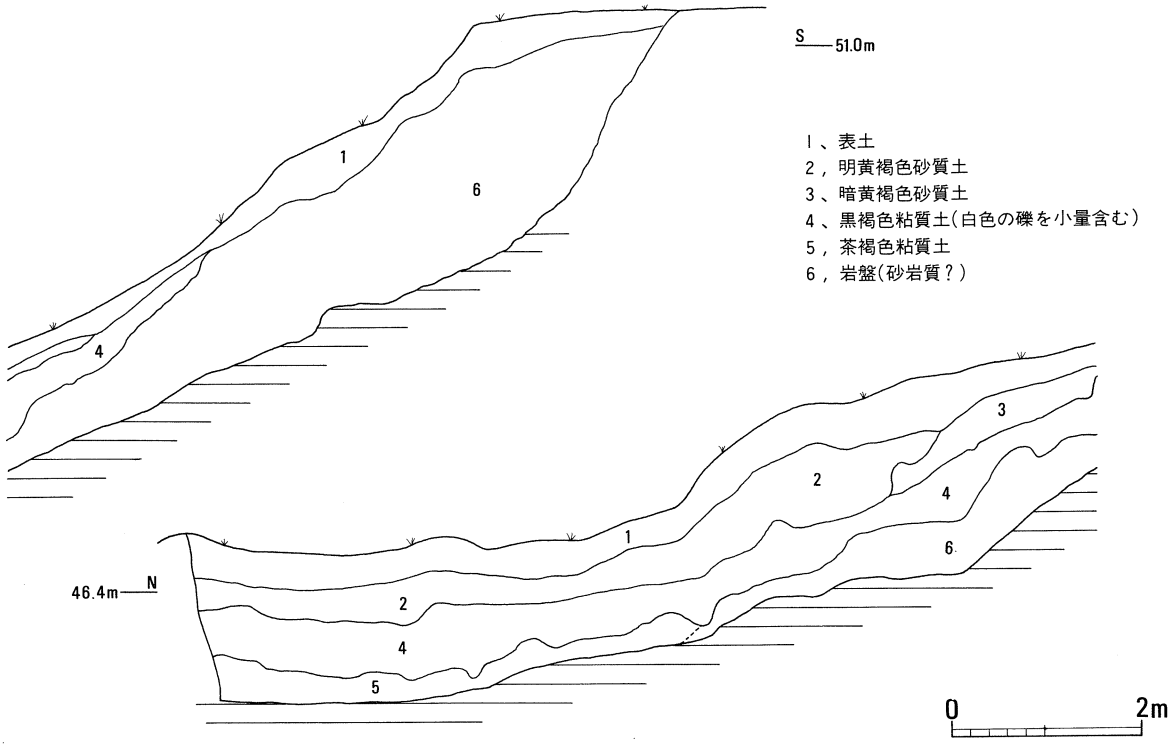
上塩冶横穴群第21支群は、神戸川・三田谷を西に望む小丘陵谷部斜面に位置している。南西に開く谷の中程に開口した横穴墓が見え、谷部中央にはなだらかな斜面が続いている。谷部中央の斜面は畑地として利用されていた時期があるらしく、中央部と両側の斜面の間には明瞭な段が付いていて、造成が行われていたことをうかがわせる。谷部下端には、造成面が露出しており、宅地の跡が残されていた。宅地跡は、付近の斜面の状況から削平されていることが分かる。また、宅地跡のすぐ下方には、工事用の現道が造成さている。



第24図　上塩冶横穴群第21支群の調査範囲及びトレンチ配置図（1：800）



第25図　斐伊川放水路第11・12トレンチ土層断面図（1：80）



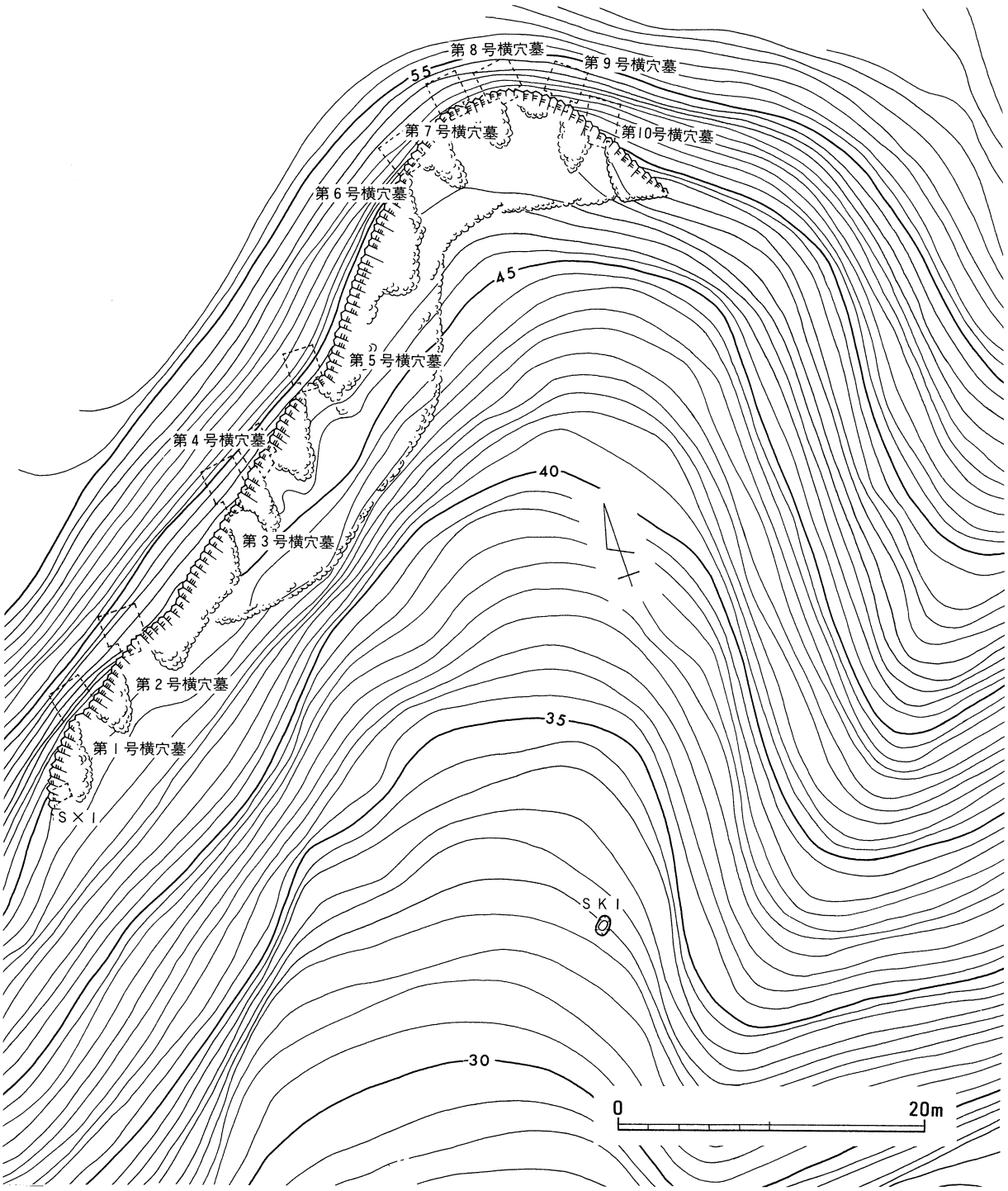
第26図　斐伊川放水路第13トレンチ土層断面図（１：80）

第21支群は、谷奥の５基が、調査前にすでに開口していた他、西側斜面にも数カ所で落ち込みが見られた。このため西側斜面については、当初より調査区に含めることを想定し、この部分にはトレンチを設定しなかった。竹林となっていて状況を確認できない東側斜面に第13トレンチを、開口している横穴墓の直下にあたる谷部中央に第12トレンチを、それぞれ設定し掘削を行った。また、第12トレンチ付近は、調査前より遺物が表採されており、さらに下方まで遺物包含層が広がることが予想されたため、横穴墓群西側の水田部にも第11トレンチを設定した。

第11トレンチでは、礫層中より、縄文から古墳時代の多量の遺物を検出した。その中で最もめだった遺物は土師器類であるが、二重口縁の甕が多くみられ、横穴墓の時期よりはるかに古い。須恵器類も比較的少なく、その様相は、横穴墓群からの流れ込みと言うよりは、西方の三田谷Ⅰ遺跡との関連が強いように感じられた。このため、水田部については、今回の調査区から外し、東側の斜面を中心に現道から東側までを調査区とした。

また、調査区東側に付いては、尾根上となる。尾根上からさらに東側の大井谷方面の支谷に当たる白石谷にかけては、何カ所かでトレンチ調査を行っているが、第21支群直上の尾根では遺構・遺物は確認できなかった。

第12トレンチは開口している横穴墓の正面、谷部中央の33～44ｍの間に設定した。表層は開墾によると考えられる腐食土が堆積しているが、礫を含んだ埋土の下層には旧表土と思われる黒色土が見られ、黒色土中より、須恵器類を中心に多量の遺物が出土した。土層断面では小さな落ち込みが点々と見られるが、いずれも表土直下からの掘り込みで、近代以降の開墾時の掘削と考えられる。地山面はけっして平坦ではなかったが、遺構と呼べるものは検出できなかった。



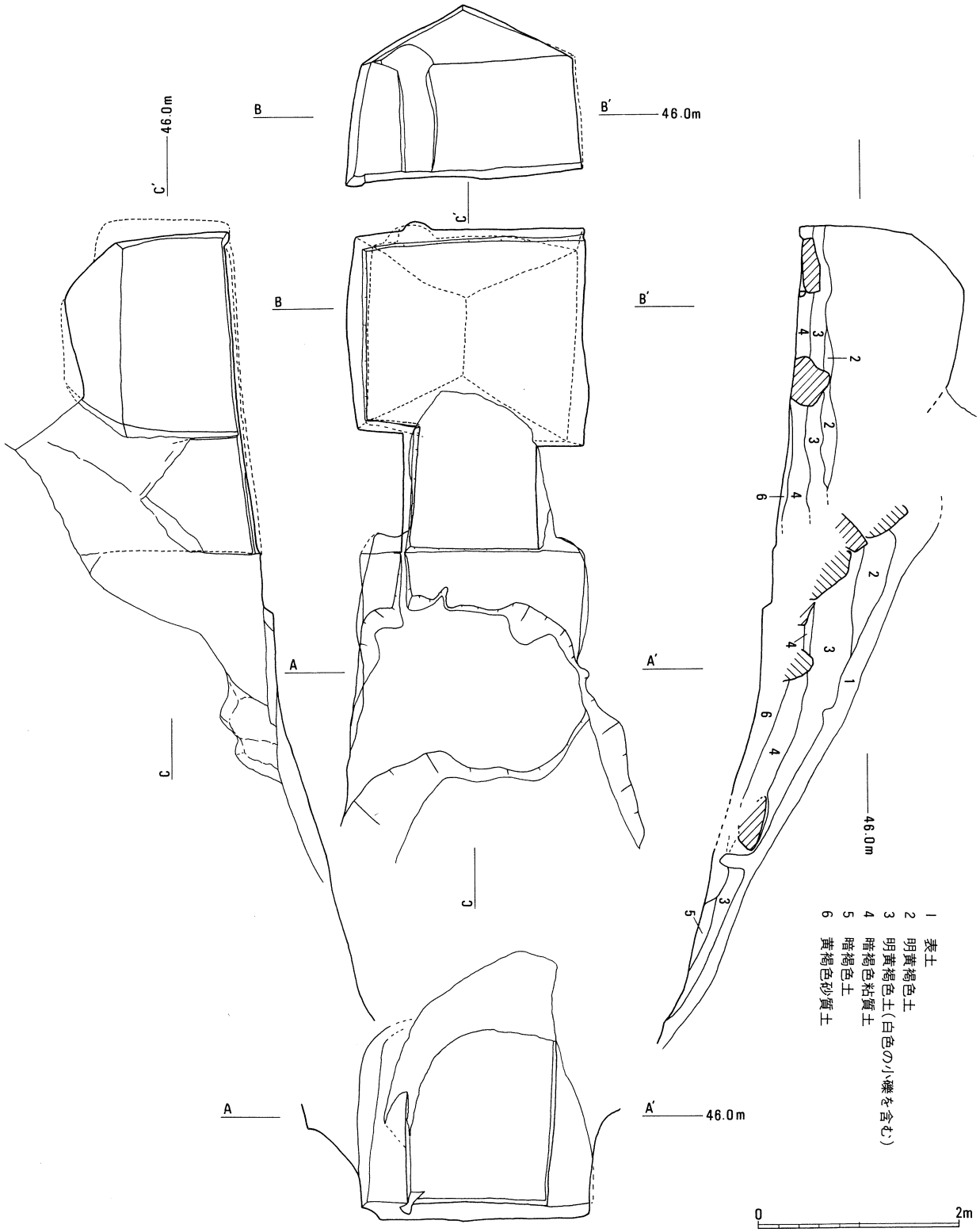
第27図　上塩冶横穴群第21支群遺構配置図（１：800）

第13トレンチは、横穴墓の横方向の広がりを確認するために、第20支群との境にあたる東側の尾根上、標高47～51ｍの位置に設定した。尾根上にしては堆積土が厚く感じられたが、遺物は見られず、横穴墓の広がりは認められない。この部分での地山は砂岩と思われる脆い岩盤で、横穴墓を掘削できるような土質とは思えない。第13トレンチでは遺構・遺物を検出することはできなかったが、横穴墓が掘られる凝灰岩と、掘られていない砂岩がサンドイッチ状に交互に見られることが解った。東側斜面は砂岩質で、横穴墓は存在しないと思われるが、どこに凝灰岩の脈が見られるか解らないため、東

側斜面の全てを調査区に含めることにした。

2．横穴墓の調査

1980年に刊行された報告書によると[註1]、第21支群は、5基の横穴墓が確認されているが、調査区内には既に5基の横穴墓が開口しており、この5基に一致する。更に、設定した調査区の伐採を行うと、

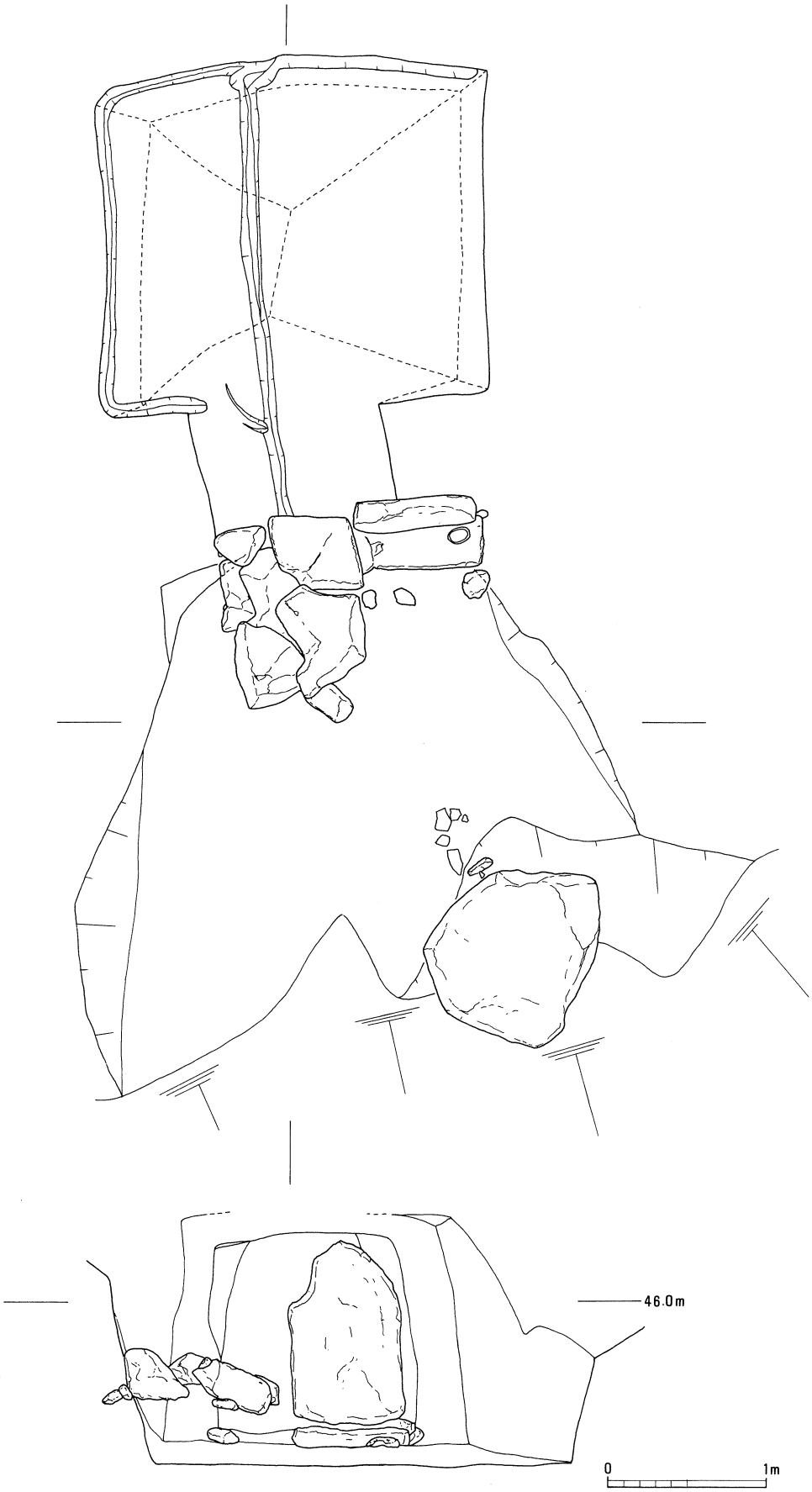


第28図　第21支群第1号横穴墓実測図（1：60）

5箇所で落ち込みが見られた。付近の状況から、これらの落ち込みを全て横穴墓と判断し、横穴墓の名称は、西側より第1号横穴墓、第2号…第10号横穴墓と呼び、掘削を開始した。このために、以前の報告で図面を紹介されている第21支群3号穴は、第21支群第8号横穴墓に該当する。

10基の横穴墓は、第1・2号横穴墓、第3～5号横穴墓、第6～10号横穴墓の3箇所のまとまりがあり小支群を形成している。

第20支群の項で説明したようにこの付近での凝灰岩は、不純物が少ない、非常に均質な岩質で、金鎚で釘が打てるほど柔らかい。横穴墓の分布は、凝灰岩の露出する範囲のほぼいっぱいまで広がっており、堂々とした印象を与える。各横穴墓とも加工痕を残しており、それによると、鶴嘴状の工具で荒彫



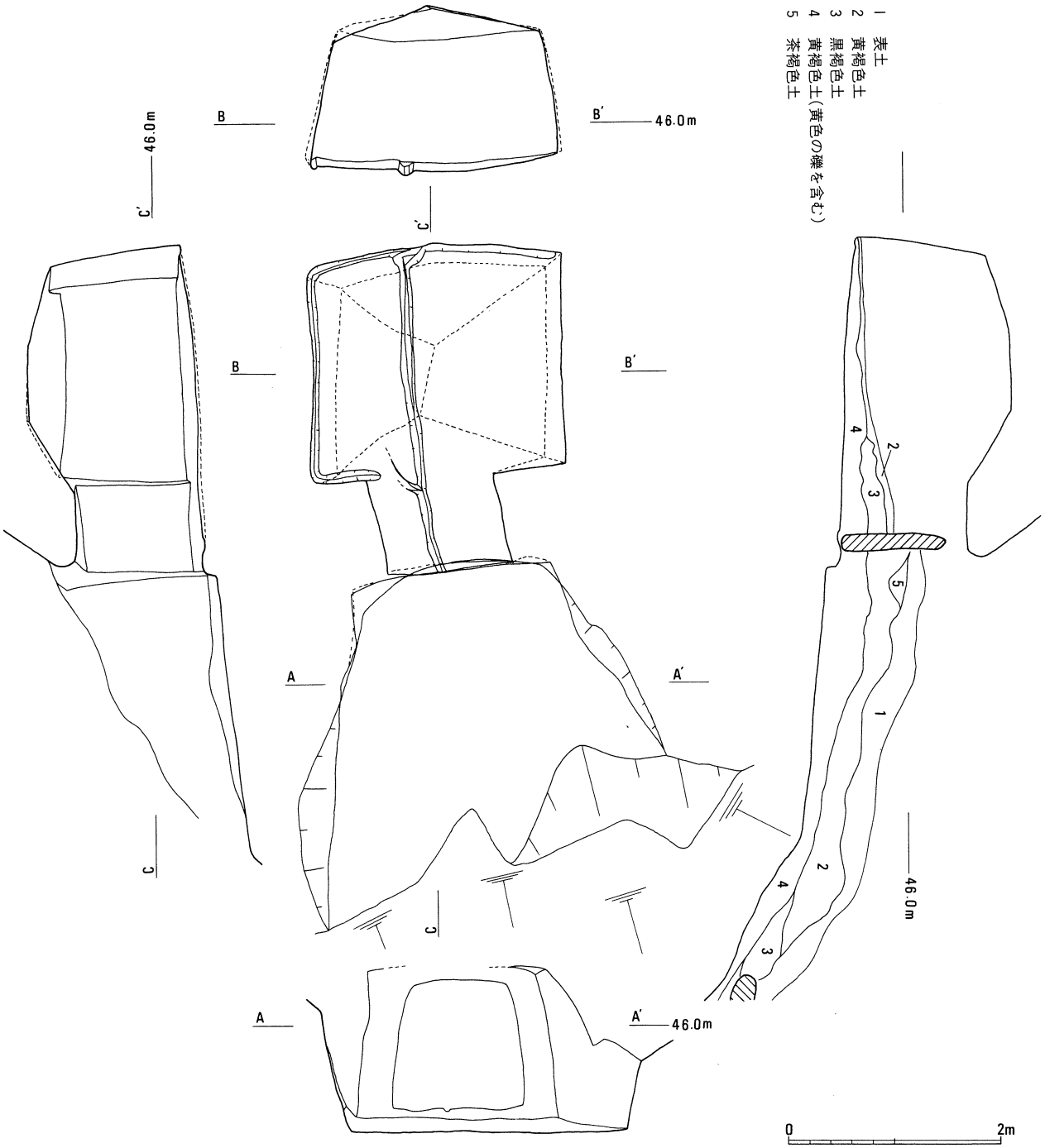
第29図　第21支群第2号横穴墓閉塞状況（1：40）

りを行った後、平のみ状の工具で整形しているようである。

この付近は、三田谷に面した第20～23支群の内、最も傾斜が緩やかな斜面に立地しており、その上一つ一つの横穴墓の前庭部が第20支群に比べ格段に広い。このために、前庭部先端で出土する遺物は、どの横穴墓に伴うか判断しにくいことが多かった。

第１号横穴墓

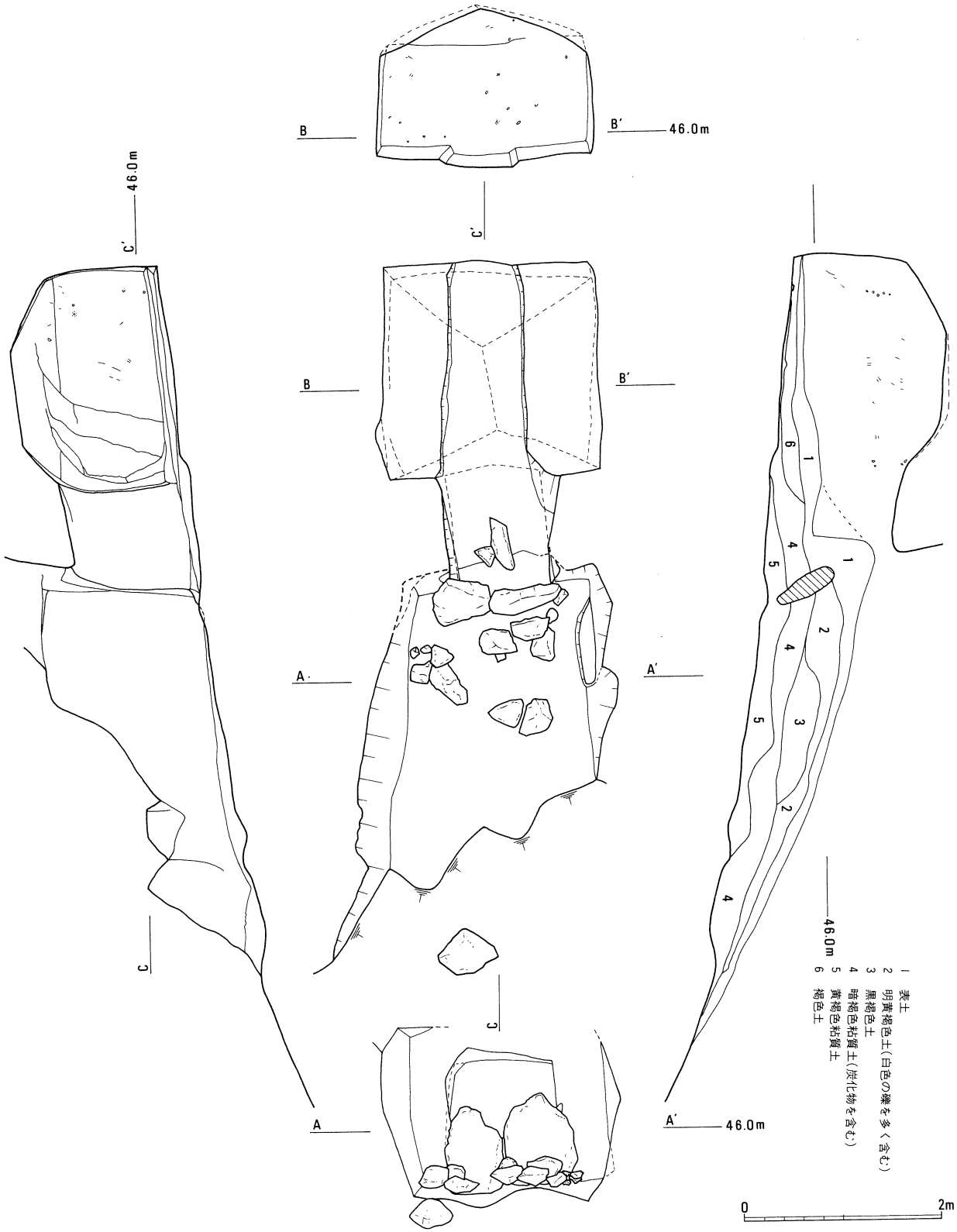
第21支群中最も西側に位置する横穴墓で、玄室床面の標高は、約45.5mを測る。東側には第２号横穴墓が隣接しているため、前庭部先端の遺物については、どちらに伴うか解らない。前庭部は、羨門



第30図　第21支群第２号横穴墓実測図（１：60）

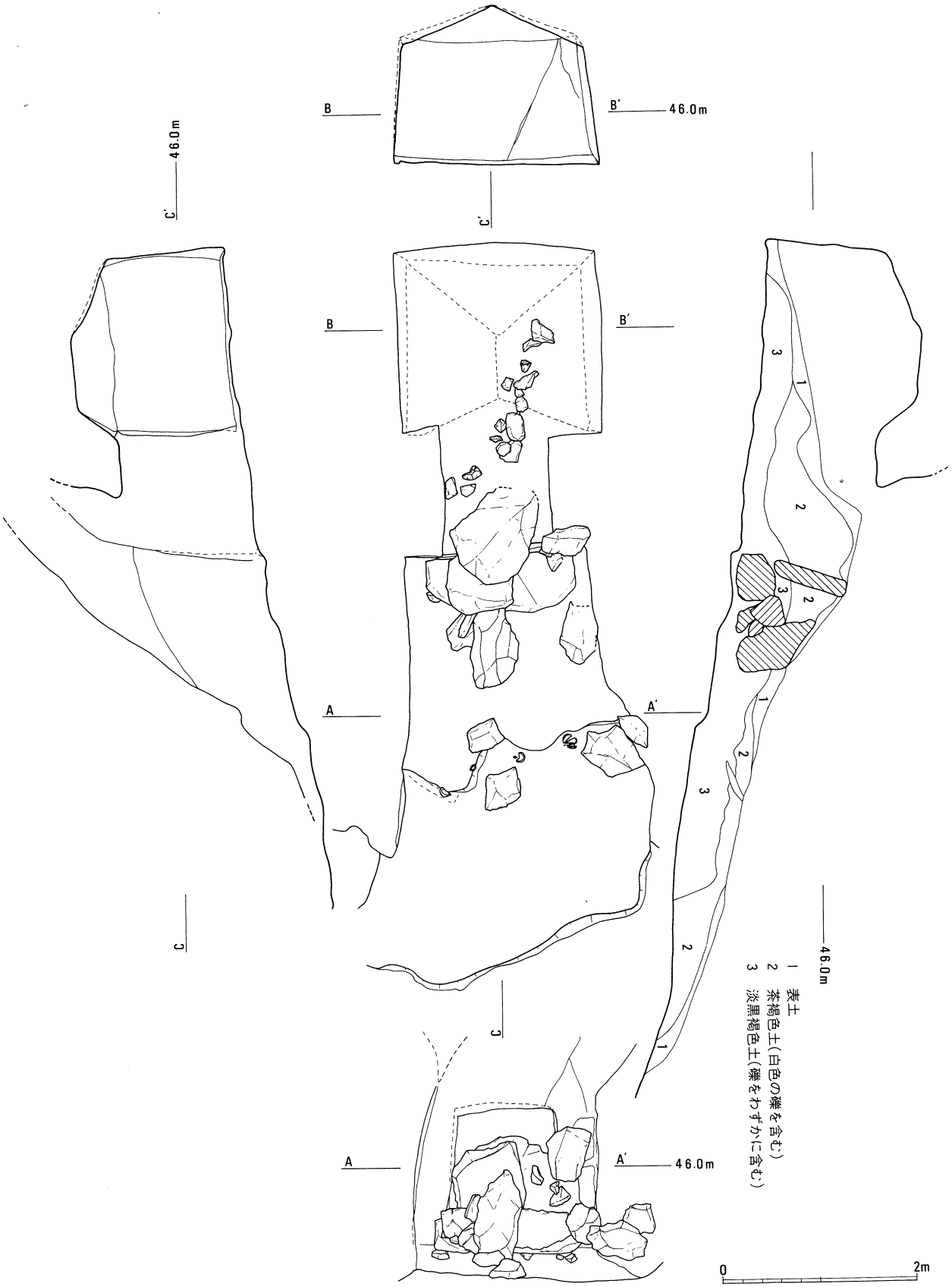
近くで幅約2.2m、前庭部先端では約３ｍの幅があり、大きく広がる形になっている。前庭部の全長は、３ｍ以上で、更に先まで緩やかな斜面が続いており、広々とした空間が与えられている。

羨道付近の天井部は、完全に崩落しており、閉塞石も含めた大小の石が羨門を塞いでいたが、前庭部奥の左隅には長頸壺（ＳＵ―57）が置かれていた。羨道は幅約1.3m、長さ約１ｍで、高さは分らな

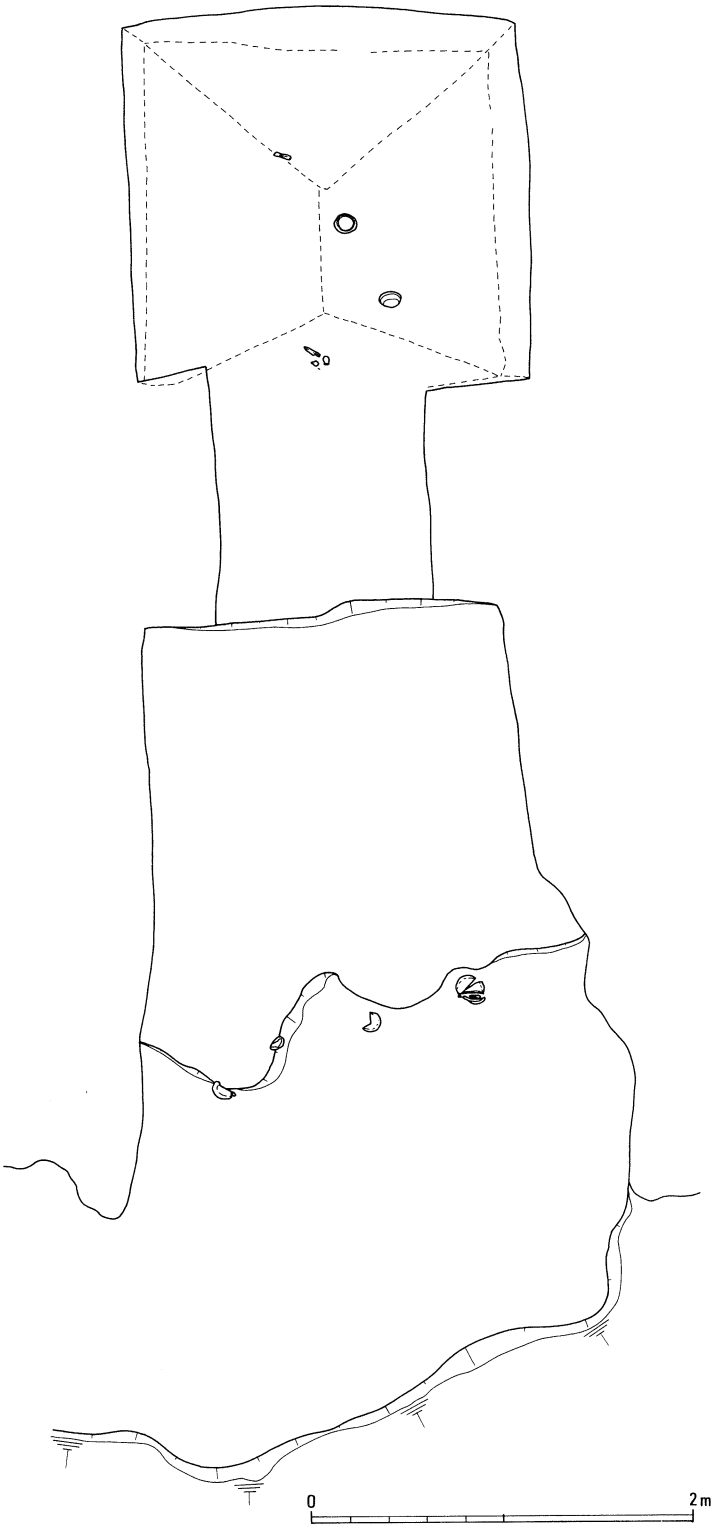


第31図　第21支群第３号横穴墓実測図（１：60）

い。天井部が更に崩落する可能性があったため、閉塞石をくわしく見ることはできなかったが、切り



第32図　第21支群第４号横穴墓実測図（１：60）



第33図　第21支群第５号横穴墓遺物出土状況（１：40）

石を２枚以上使用していたようである。

玄室は、ほぼ正方形で、１辺約2.1mを測る。玄室奥壁から西壁に添って幅15cm程の排水溝が設けられている。

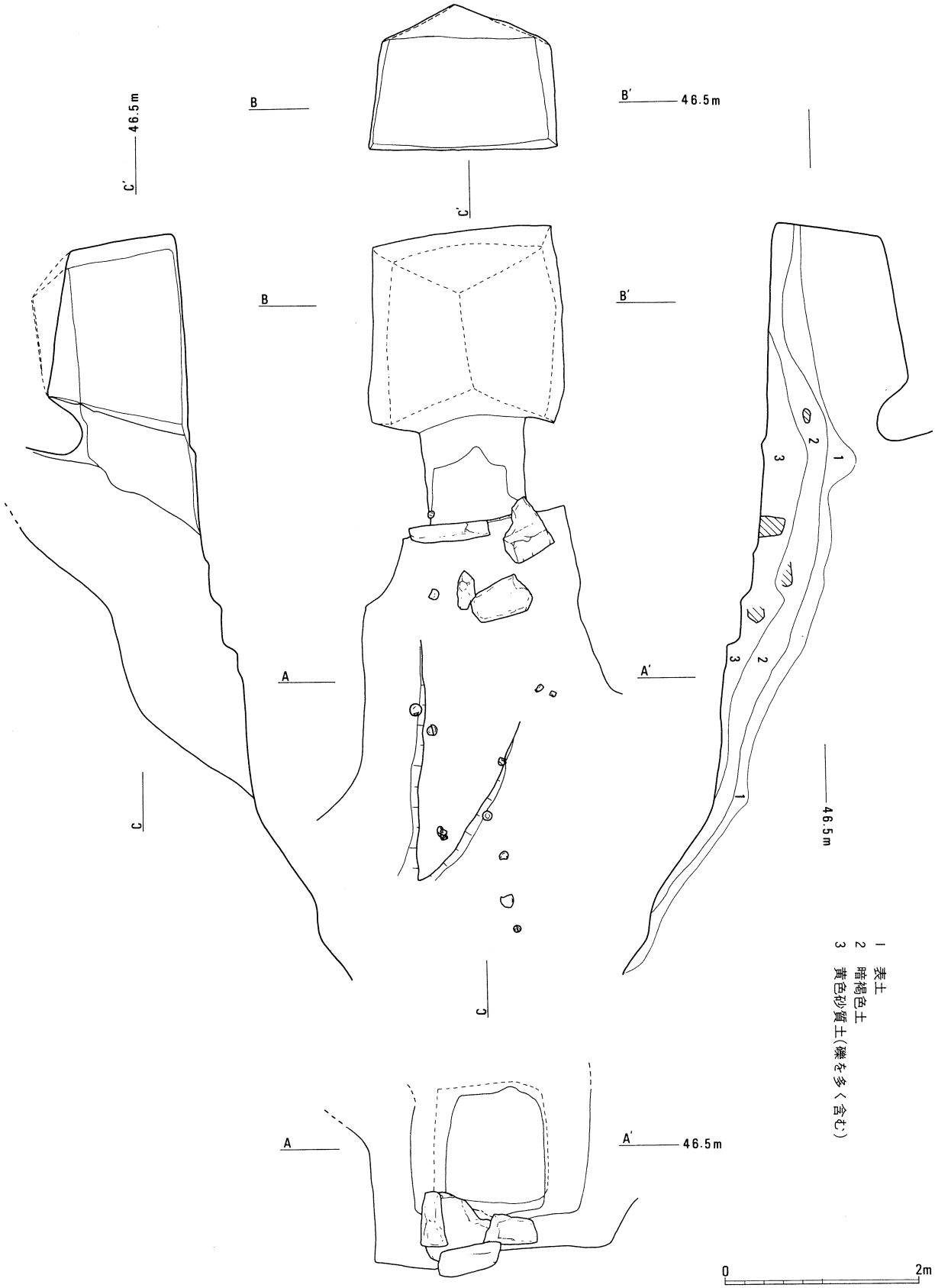
天井までの高さは、残存している部分で約1.6mを測る。四注式妻入り構造となっており、各壁面の造作も非常に丁寧に仕上げられている。玄室奥壁には、不思議なことに、縦方向に溝が掘られている。天井部との界線付近から始まり、床面の排水溝まで、幅35cm、奥行き15cmで続いており、壁面と天井との界線上を流れる水を集めるような構造になっている。この部分ののみ痕は、非常に荒いものではあるが、他の部分と大差があるとは思えない。

玄室のほぼ中央付近床面直上より、用途不明の石製品２点（第57・58図）が出土している。この石製品は、閉塞石に使用できるような大きさではなく、各面とも損傷していないことから、石棺でもない。床面との間にほとんど土砂の流入が見られないことから、古くからこの位置に置かれていたもののようである。床面直上の埋土は、玄室奥で暗褐色粘質土であるが、この土は、前庭部まで続いており、また、前庭部での最下層である、黄褐色砂質土は、横穴墓上方からの崩落土であることは、ほぼ間違いないと思われることから、玄室中の堆積土は全て、開口後のものと考えられる。

第２号横穴墓

第２号横穴墓は玄室床面で標高約45.8mを測る。第１号横穴墓に隣接して築かれており、前庭部直

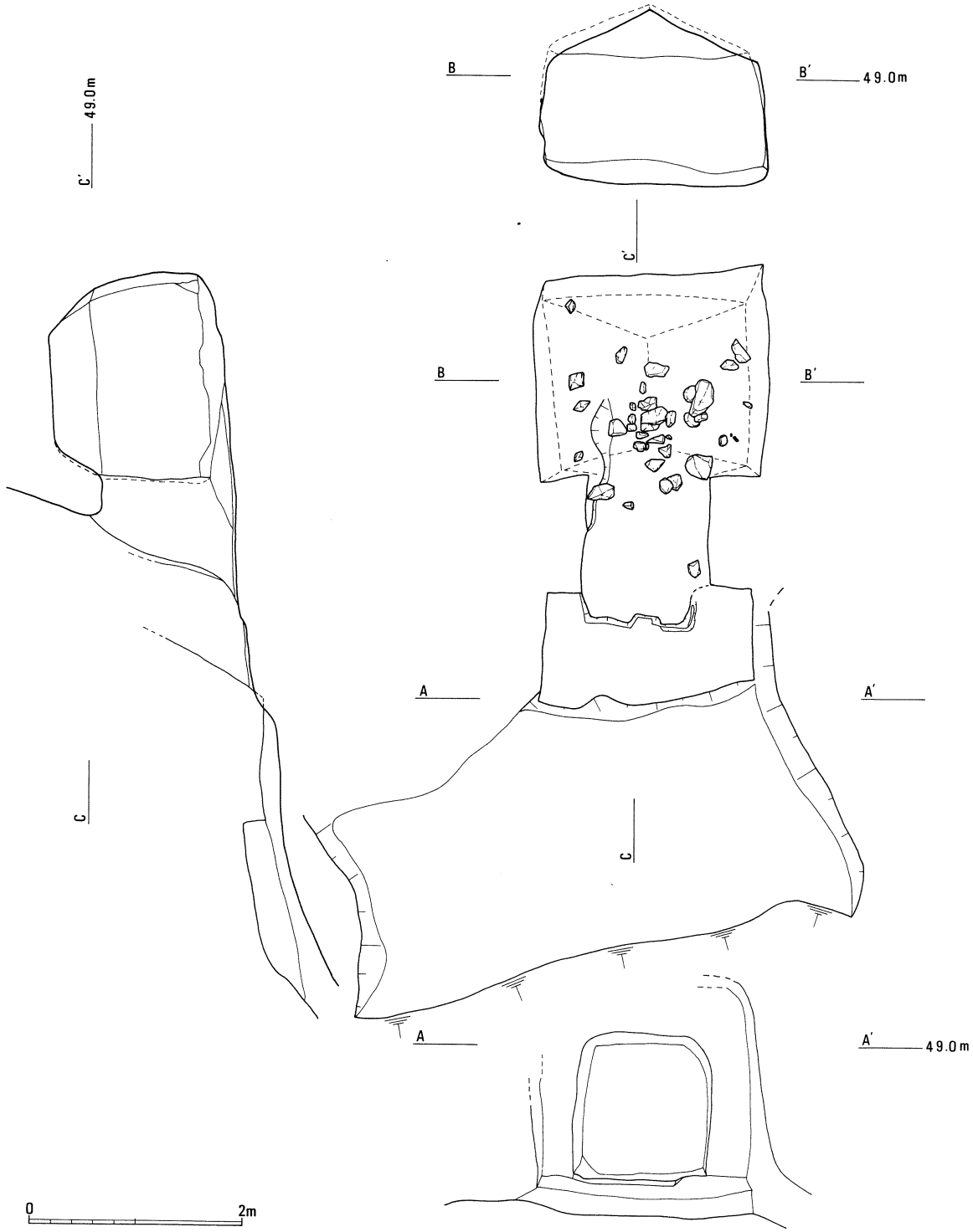
前の斜面を共有する。残存していた閉塞石によると、幅約0.8m、長さ約1.1m、厚さ約15cmの切り石を２枚並べて閉塞していたようである。羨道直前の幅は、約1.9m前庭部先端では、約3.2mを測り、



第34図　第21支群第５号横穴墓実測図（１：60）

長さは、約2.7mである。長さ約0.8m、幅約1.1m、高さ約1.2mを測る羨道部は、東に大きく振っている。

玄室は、奥行き約2.2m、幅約2.3mのほぼ正方形を呈し、奥壁から西壁を廻り玄門までと、玄室から羨道の間の中央を断面V字形の2本の溝が巡っている。西壁の溝と中央の溝は、玄門付近では、現状では離れているが、摩滅した溝の痕跡もあり、当初は続いていたものと思われる。また、奥壁の溝は、溝の掘り方が中央付近を境に明らかに異なっている。



第35図　第21支群第6号横穴墓実測図（1：60）

天井までの高さは、約1.6mある。四注式妻入り構造で、各壁面とも丁寧に整形されている。

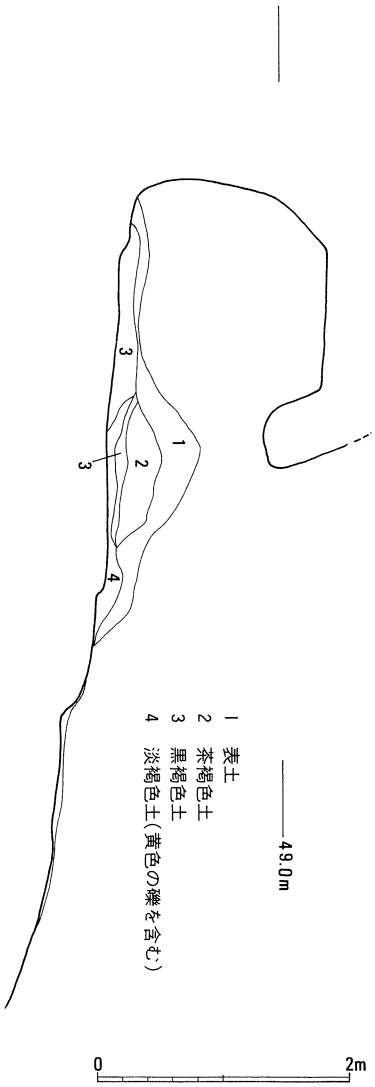
第3号横穴墓

第1・2号横穴墓が隣接し小支群を形成するのと同様に第3～5号横穴墓も隣接し、小支群を形成している。第21支群中では、他の小支群に比べ、小規模な横穴墓で構成される。

第3号横穴墓は、標高約45.9mに位置する。前庭部は幅約1.7m、最大長約3mを測るが、両側の壁が高く、計測値以上に狭く感じる。閉塞石の残存状況はけっして良くなかったが、第2号横穴墓と同様の2枚の切り石で閉塞していたようである。羨道は、幅約1m、長さ約1m、高さ約1.2mを測る。玄室は、1辺約2.2mのほぼ正方形で、天井までの高さは約1.6mを測る。四注式妻入り構造で、左右に2面のベッドを作り出す。各壁面の整形はやや雑で、鶴嘴状工具の痕跡を多く残す他、各面の界線も、やや不明瞭である。西側壁面には亀裂が入り、一部が崩落している。

第4号横穴墓

第4号横穴墓は、玄室床面の標高約45.5mに位置する。幅約2m、長さ約3.1mの前庭部には、破砕された閉塞石や上方から崩落してきたと思われる石が散在していた。閉塞には羨門付近に厚さ約40cmの切り石を置き、その上に板石2枚を並べている。羨道は、幅約1m、長さ約1.3m、高さ約1.3mを測る。玄室は、一辺約2.1mの正方形だが、玄門がやや西にずれているために、あたかも片袖のような印象を与える。床面が荒れているために不明瞭であるが、西側壁面下には、わずかに落ち込みがあり、排水路が巡っていた可能性がある。天井までの高さは、約1.7mを測り、四注式妻入り構造で、各壁面とも丁寧に整形されている。



第36図　第21支群第6号横穴墓
土層堆積状況（1：60）

第5号横穴墓

第5号横穴墓は、第21支群中最も規模の小さい横穴墓で、標高約46mに位置する。幅約2.3m、長さ約2.1mの前庭部は、第21支群中最も狭い。羨道部は、幅約90cm、長さ約1m、高さ約1mを測る一般的な規模だが、玄門付近に明瞭な段を備えている点で、他の横穴墓と異なる。閉塞石の残存状況は悪く、わずかに4点の石が見られるにすぎないが、第2号横穴墓と同様に2枚の切り石を使用したものであろう。玄室は、1辺約1.9mの正方形で、高さは約1.4mを測る。四注式妻入り形態を呈し、各面とも丁寧に整形されている。前庭部を中心に多量の土器が見られた。

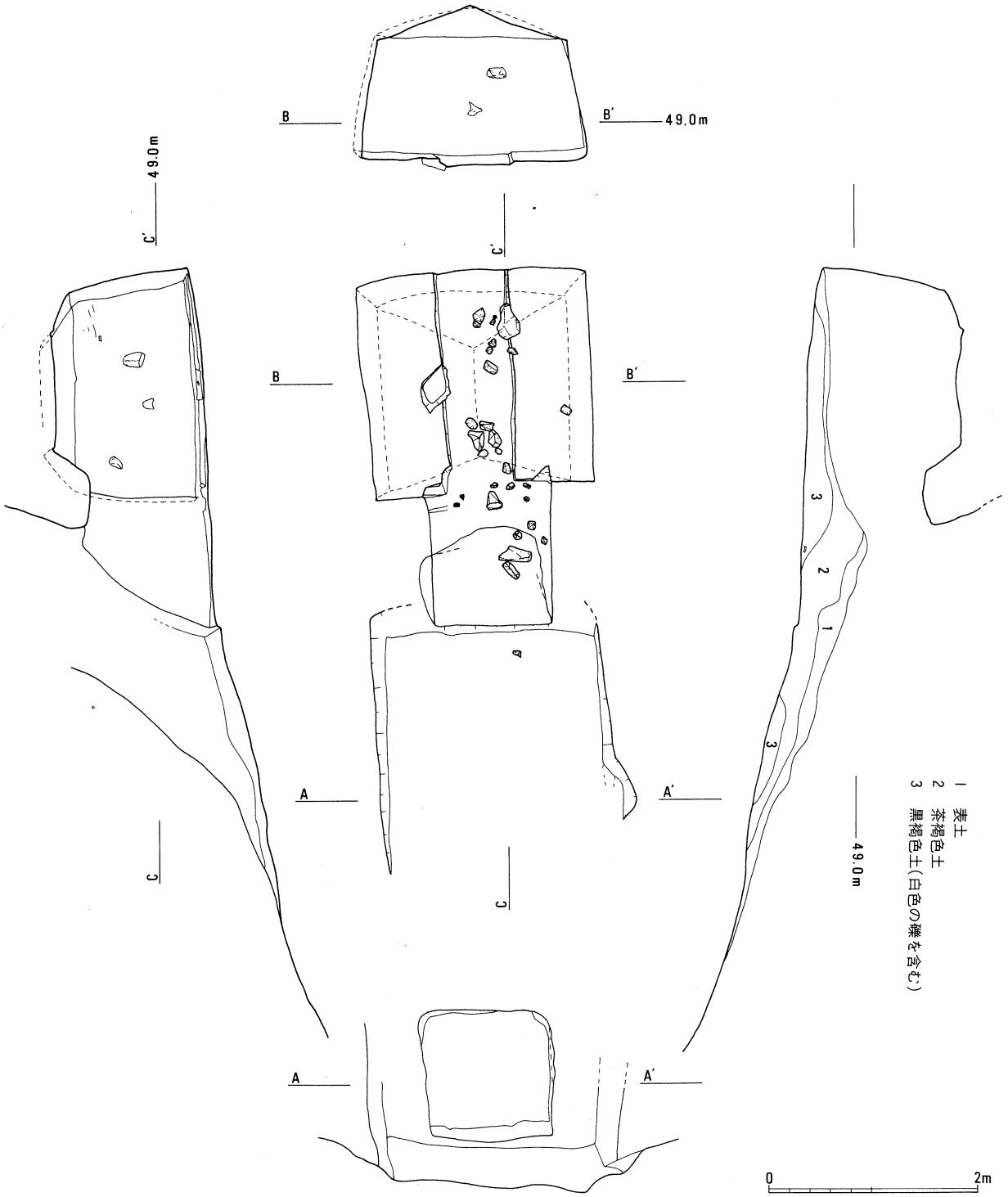
第6号横穴墓

第6～10号横穴墓も、東西に隣接し、小支群を形成している。この小支群は古くから知られていたもので、すでに完全に開口しており、いずれも閉塞石は無く、遺物の残存は絶望的に思えた。

玄室床面の標高約48mに位置する第6号横穴墓は、前庭部前に広々とした平坦面があり、どこまでが前庭部か断じがたい。確実

な前庭部は、羨門直前で、幅約2.1mを測る。羨門付近では、羨道から続く平面が造り出し状に飛び出している。また、羨門から１ｍの位置には、明確な段を備え、その前の平坦面と前庭部らしき長方形の平面とを分けている。羨道は幅約１ｍ、長さ約１ｍ、高さ約1.3mを測るが、左右の壁面がわずかにずれている。

玄室は、幅約2.2m、奥行き約1.9mを測る。床面は、かなり荒れているが、北側に小さな段があり、ベッドが存在した可能性が高い。天井までの高さは約1.7mで、四注式妻入り構造である。



第37図　第21支群第７号横穴墓実測図（１：60）

玄室内には大小の石が散乱していた。第６号横穴墓は、風化に依る摩滅は見られるものの、大きな損傷はなく、閉塞石の一部であった可能性が考えられる。これらの石にも風化の痕跡は見られ、人為的加工の痕跡は見られず、閉塞石であった場合は、自然石を使用していたと想像できる。

前庭部奥からは、擂り鉢の小片が出土している。この小片は、第８号横穴墓・第10号横穴墓出土の破片と接合した。

第７号横穴墓

第７号横穴墓は、標高48.7mに位置する。幅約２ｍ、長さ約1.9ｍを測る、小さな前庭部を持つが、その前に広い平坦面があるために、狭さを感じない。幅約1.2ｍ、長さ約1.3ｍ、高さ約１ｍを測る羨道部は風化による摩滅が著しく、角は全て丸くなっている。玄室はほぼ正方形プランで、一辺約2.1ｍを測る。天井までの高さは、約1.6ｍを測り、四注式妻入りである。玄室の左右には、ベッドを備えているが、あたかも、後になって削りだしたかのように、奥壁の形状にまで影響している。高さは、現状では５㎝程しかないが、床面が大きく荒れていることから当初は、更に高かったものと思われる。床面には拳大の石が散乱していたが、閉塞石の一部であろうか。

この横穴墓壁面には、西壁に３穴、奥壁に２穴の掘り込みが見られる。底面が平らな半球形を呈すもので、壁面の調整とは異なる工具で彫られている。煤等の付着は見られない。

第８号横穴墓

玄室床面の標高約48.8ｍに位置する第８号横穴墓は、その前庭部の大半を東側の第９号横穴墓と共有する。第９号横穴墓に依る干渉のため、いびつな形になっているが、幅約1.7ｍ、長さ1.6ｍ以上を有す。前庭部前の凝灰岩岩盤が荒れている影響もあるが、完全な平坦面を保っていない。羨道部は幅約１ｍ、長さ約１ｍ、高さ約1.2ｍで、羨門付近の段は、摩滅し、不明瞭になっている。玄室は、幅約2.3ｍ、長さ約2.2ｍのほぼ正方形である。天井までの高さは約1.4ｍで、面積に対する高さが低い。四注式妻入り構造を呈している。玄室床面には拳大の石が散乱していた。

玄室奥壁には、第７号横穴墓と同様の掘り込みが見られる。また、玄室内と前庭部から「寛永通寶」２枚が出土している。

第９号横穴墓

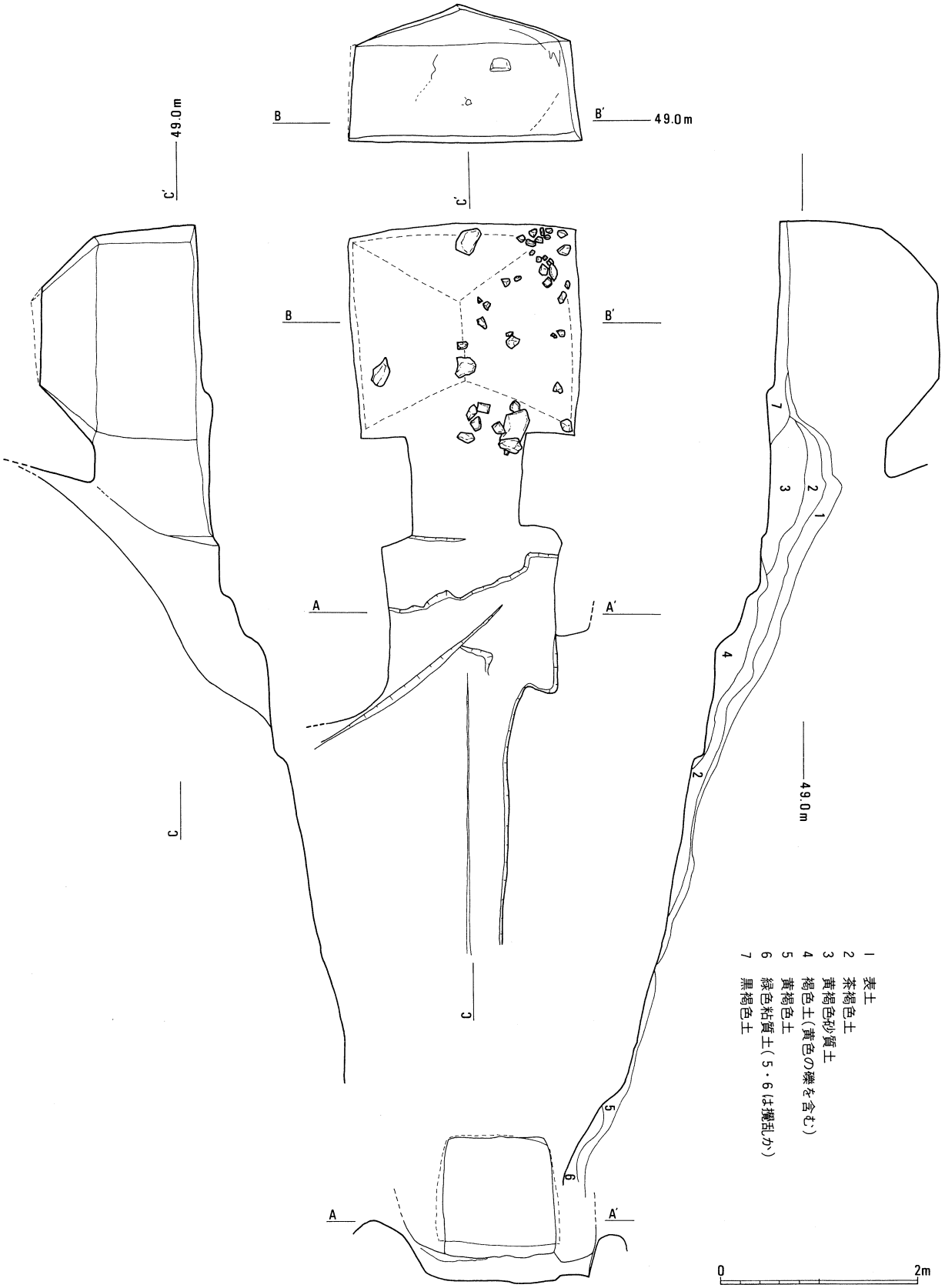
第９号横穴墓は、幅約1.6ｍを測る前庭部の大半を、第８号横穴墓に切られており、長さは約1.3ｍしか持たない。切られている部分での前庭部の比高差は、約10㎝第８号横穴墓の方が低い。前庭部の切り合い関係より第８号横穴墓より古い。前庭部と羨道を分ける羨門付近の段には、中央に切れ目があり、排水溝が存在した可能性がある。幅約1.2ｍ、長さ約1.1ｍを測る羨道は、前庭部が狭いため、非常に広く感じる。高さは、約1.1ｍを測る。玄室は、１辺約1.9ｍを測る、ほぼ正方形である。四注式妻入り構造だが、各壁面の界線は、不明瞭で、特に天井の軒線は見えない。天井までの高さは約1.6ｍである。

第10号横穴墓

第21支群中最も東側に位置する横穴墓で、玄室床面の標高は約48.1ｍを測る。となりの第９号横穴墓とは主軸を完全にずらしており、前庭部の共有関係は見られない。前庭部の幅約1.9ｍ、長さ約2.2ｍを測り、この小支群中では広い部類に入る。羨道は、幅約1.1ｍ、長さ約0.8ｍ、高さ約１ｍを測る

が、羨門から羨道天井にかけての摩滅が著しい。

玄室は、幅約２ｍ、奥行き約2.2ｍのほぼ正方形を呈し、２面のベッドを備えている。このベッドは、



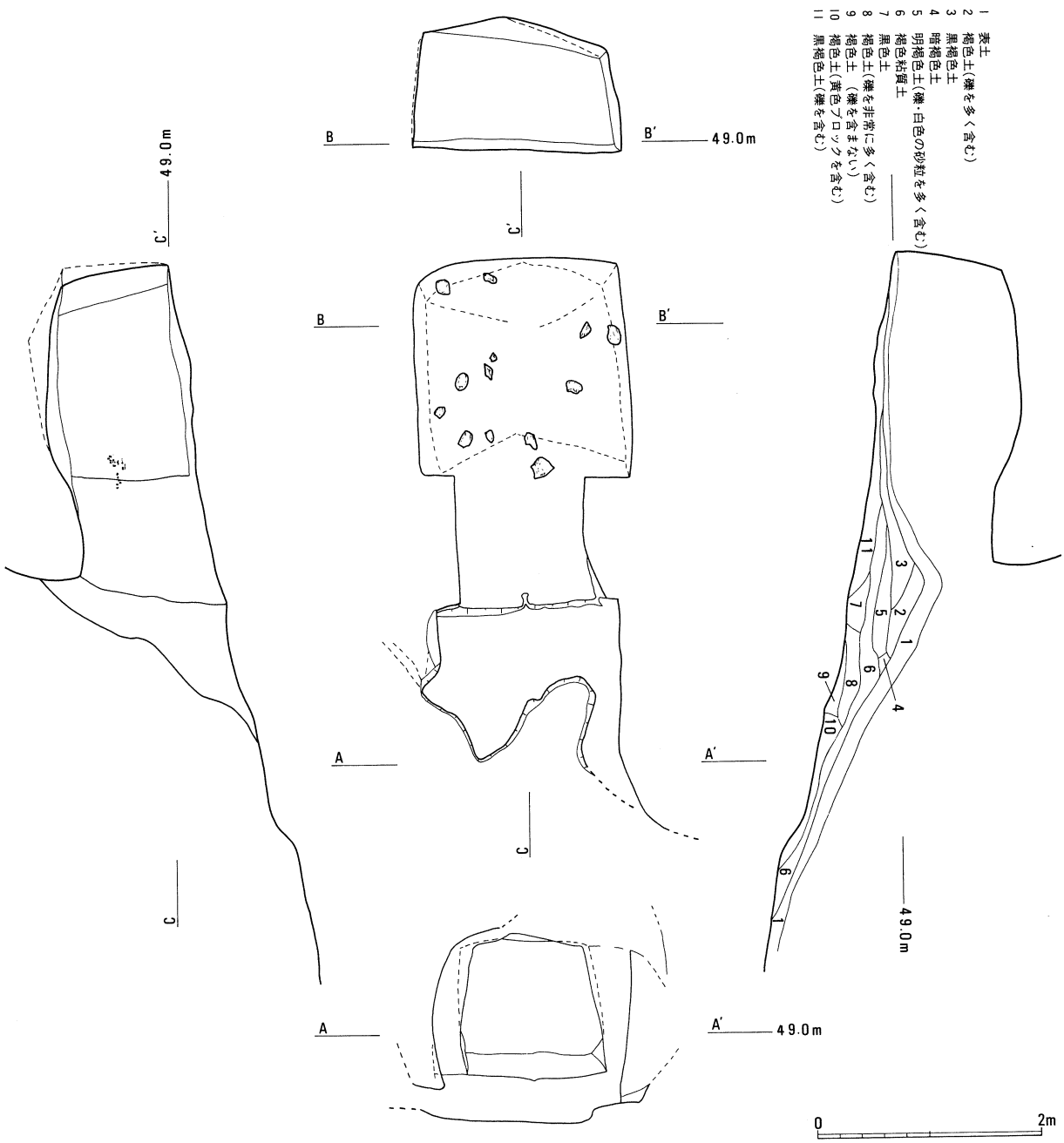
第38図　第21支群第８号横穴墓実測図（１：60）

第７号横穴墓と同様に奥壁の形状にまで影響している。天井までの高さは、約1.７ｍを測る。四注式妻入り構造で、各面とも丁寧に整形されており、各界線も明瞭である。

玄室床面には、拳大から人頭大の石が点在していた。また、奥壁と西壁には、第８号横穴墓等と同様の掘り込みを持っている。

前庭部から擂り鉢と土師器小皿の小片が出土したほか、羨道床面と、玄室内から須恵器が出土している。また、玄室内の埋土を洗浄したところ、金糸が出土した。

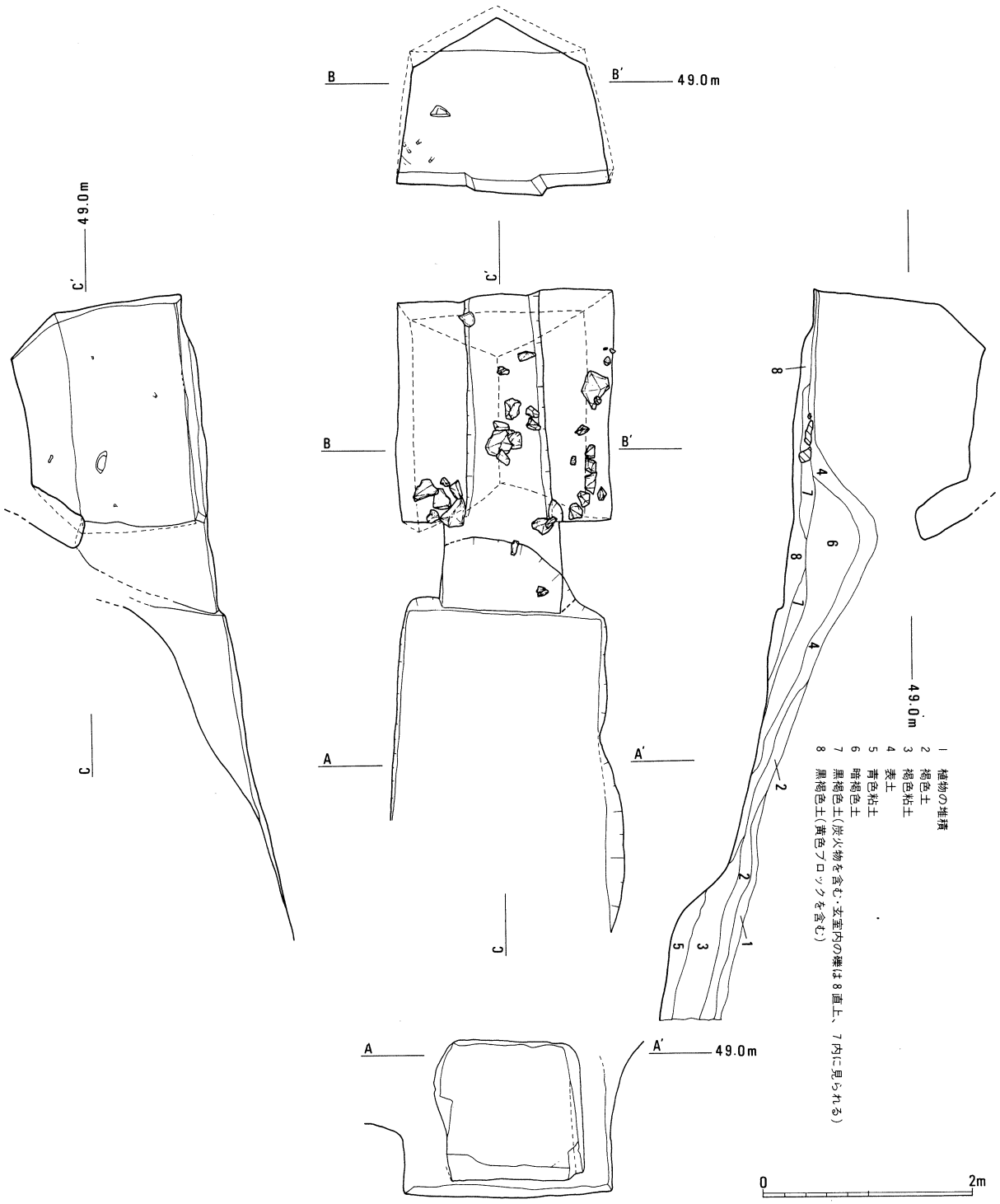
第10号横穴墓の前庭部先端には、腐食土が多く堆積していたが、横穴墓付近には見られず、暗褐色の表土に覆われていた。玄室付近では、岩盤上を水が流れるらしく、水の影響を強く受けたと思われる青色粘土が多くみられる。青色粘土は、地山（岩盤）直上の埋土であり、須恵器や金糸もこの土か



第39図　第21支群第９号横穴墓実測図（１：60）

ら出土した。この土は羨門を越え、前庭部にまで堆積しているので、須恵器の時期を確実に示すものとは言い切れないが、玄室内に見られた石は、青色粘土直上の炭化物を含んだ黒褐色土中に見られ、完全に開口する以前の状況を示す可能性はある。

第10号横穴墓は、全国的にも希少な金糸を出土しているが、完全に開口していたために、そのくわしい状況を知ることができなかった。しかしながら、この金糸が古墳時代のものである可能性は高く、一応伴出した２点の須恵器と共に、今後の検討を要するものである。



第40図　第21支群第10号横穴墓実測図（１：60）

3．その他の遺構について

ＳＸ－１

ＳＸ－１は、第１号横穴墓の西隣に位置する小横穴で、調査時には、掘削途上の横穴墓と考えていたものである。ＳＸ－１の位置は、西に延びる凝灰岩層が途切れるわずかに手前であり、岩盤に大きな亀裂が見られる。このことから、横穴墓を掘削しようとしていたが、掘りはじめてまもなく、岩質が悪いことが判明し、中止したのでは、と考えた。

ＳＸ－１は、斜面を標高約45ｍの位置から楔形に掘り込んだもので、遺物は認められない。平坦に掘られている部分の全長は約2.6ｍで、その内奥から70cmについては横穴状に掘り込まれている。天井部といえる部分の高さは約１ｍある。平坦面先端には、幅60cmの石が見られるが、地山面からは多少浮いており、ＳＸ－１とは無関係のようである。

「掘削途中の横穴墓」である可能性を否定する理由として、つぎの点が挙げられる。横穴墓の掘削は、基本的には前庭部から仕上げていくと言われている[註2]が、ＳＸ－１は、前庭部に当たる部分がきわめて狭く、前庭部を仕上げた状態とは考えにくい。また、現状では、確かに凝灰岩に亀裂が見られるが、第１・４号横穴墓などの状況から考えても、掘削が不可能なほどとは思えない。凝灰岩脈の端近くに位置するのは間違いないが、まだわずかに余裕があり、第１号横穴墓程度の規模であれば、掘削可能と思える。

以上のことから、横穴墓の掘削を途中でやめる理由は見あたらず、ＳＸ－１は、完結した一つの遺構と考えられる。ＳＸ－１の掘削方法は、床面などに残る加工痕などから、横穴墓と同様の方法で掘られているように見え、隣接する第１号横穴墓に付属する施設である可能性が高い。

ＳＫ－１

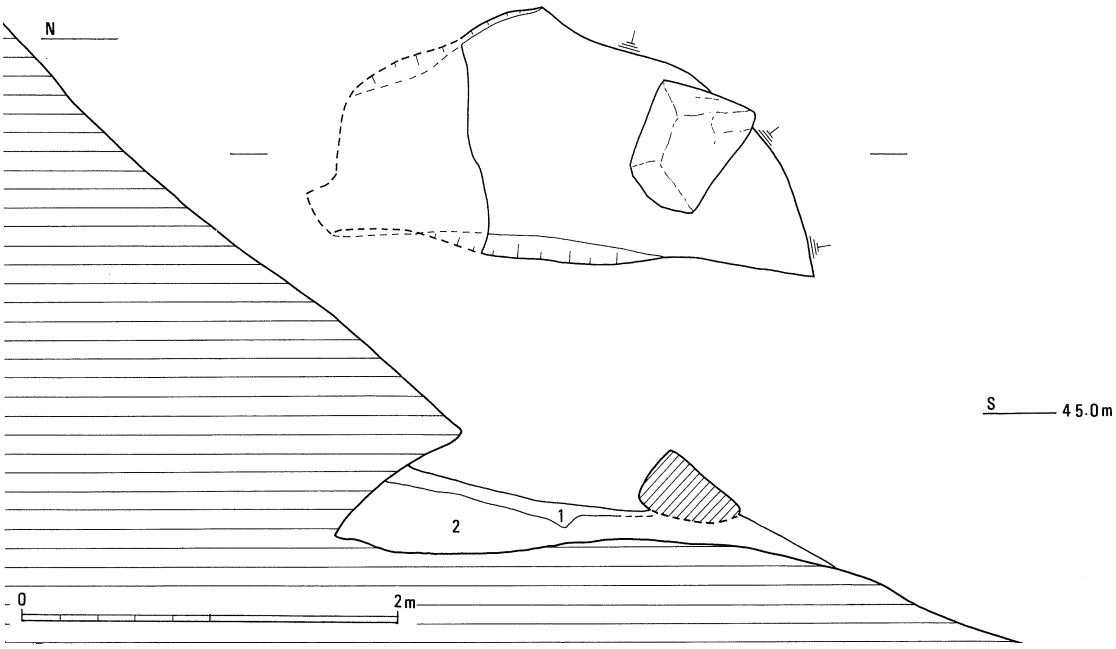
横穴墓群前方に広がる谷部の中央付近のやや東より、標高33ｍ付近で、土抗１基を検出している。長径1.12ｍ、短径0.8ｍ、深さ0.3ｍの隅丸方形を呈する土抗で、埋土は、地山の崩落土と思われる。床面・壁面とも火を受けた様な形跡は見られない。

遺物は検出できず、時期・用途は解らない。周辺では、須恵器類が出土しているが、いずれも黒色土中の出土で、それより上層の褐色土からは遺物の出土は見られない。ＳＫ－１の埋土である褐色土は、第12トレンチの状況から、須恵器等古墳時代の遺物が出土する黒色土よりも上層に堆積する土壌で、畑地の開墾時に谷の両側を削り、谷の内部を埋め、緩斜面の拡大を行ったときの造成土と考えられる。このことから、ＳＫ－１は、近代のものである可能性が高い。

谷部礫層

明確な遺構は、上記のものが全てであるが、第６～10号横穴墓の正面にあたる谷部奥では、礫の集中する部分（図版37上）が見られた。黒色土を含んだ礫層で、拳大の大きさの凝灰岩がほとんどである。礫層上面からは、須恵器横瓶（ＳＵ－145）が出土している。

この礫層に付いては、横穴墓を掘削したときの廃材である可能性、盗掘が行われた時に、閉塞石を破壊した痕跡である可能性の２つが考えられる。断定する根拠は薄いが、礫層中からも、小量ではあるが須恵器片が出土しており、横穴墓掘削中に礫層が堆積したとは思いにくい。このことから、盗掘



第41図　ＳＸ１実測図（１：40）

時に第６～10号横穴墓の閉塞石を破壊したものではないかと考える。

４．上塩冶横穴群第21支群出土遺物について

横穴墓出土の土器類

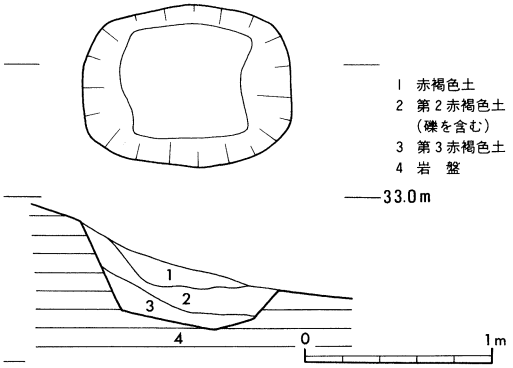
第１号横穴墓は、前庭部を中心に多量の遺物が出土した。ＳＵ―36～39は、坏である。ＳＵ―36は、返りがやや高く、底部にケズリの痕跡を残す。他の３点はいずれも返りが内傾し、高さを持たない。ＳＵ―38は、底部にケズリを残している。

ＳＵ―40・41は、返りを持つ蓋で、いずれもつまみの部分は欠損している。ＳＵ―41の頂部にはケズリ痕を残している。

ＳＵ―42～44は、蓋の輪状つまみ部分の小片である。いずれもナデ調整される。ＳＵ―42の口縁端部には、小さな返りがつくものと思われる。

ＳＵ―45～47は、蓋の口縁端部の小片である。退化した非常に小さな返りを持ち、ナデ調整される。つぶれた擬宝珠状か、小さな輪状つまみがつくものと思われる。

ＳＵ―48・49は、蓋の口縁部である。端部を折り曲げてたもので、返りは持たない。口縁部外面を強くナデ、他の部分もナデ調整する。輪状つまみが付くと思われる。ＳＵ―50・51は、高台部分の小片で、いずれ



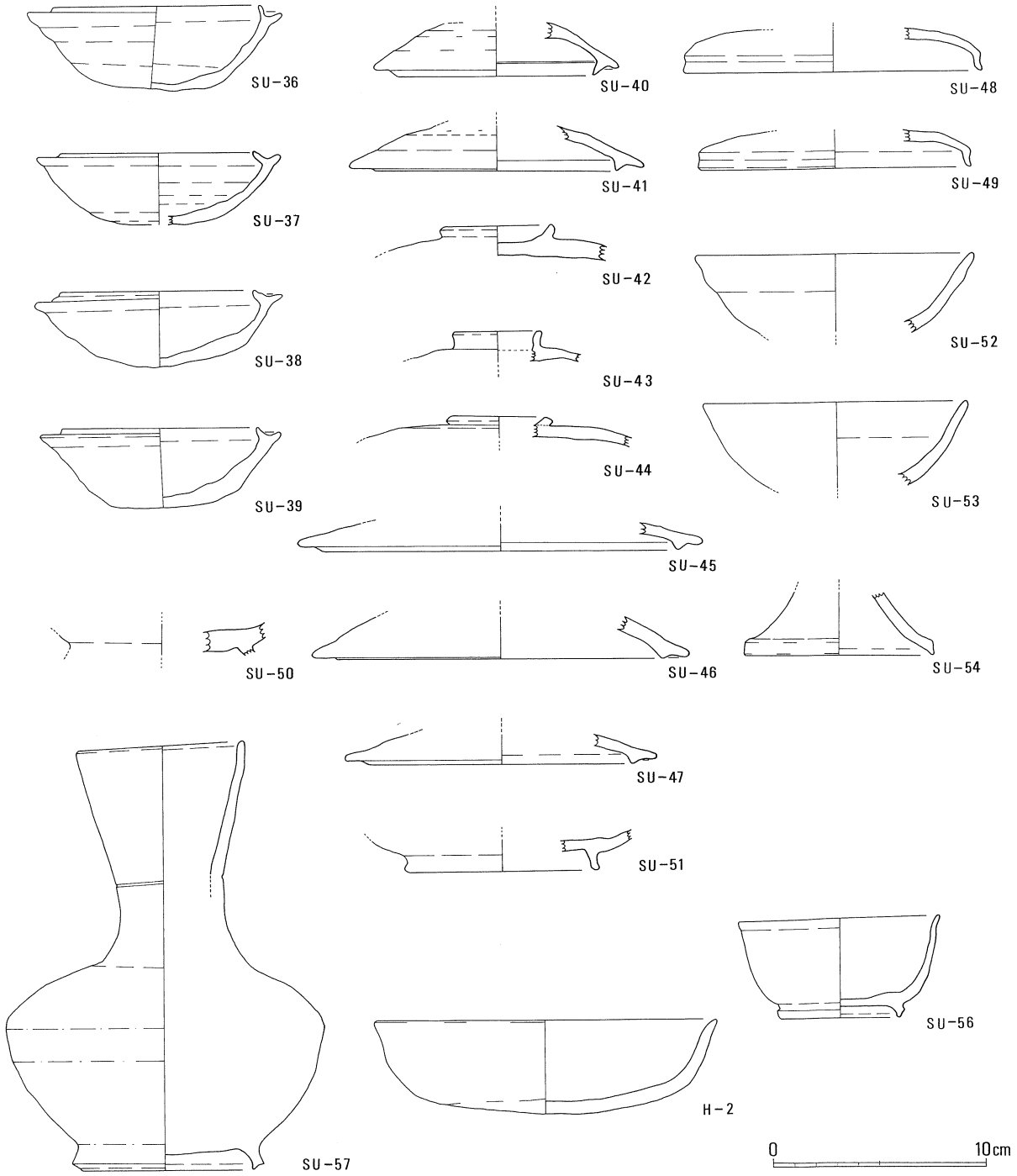
第42図　ＳＫ１実測図（１：40）

も坏であろう。

高坏と思われる個体は３点出土している。ＳＵ—52・53は、口縁部付近の破片で、いずれも口径が小さく緩やかに内湾する体部を持つ。全面ナデ調整される。ＳＵ—54は、脚部の破片で、端部外面に小さな面を持つ。スカシは見えない。

ＳＵ—56は、碗である。段のある高台を底部の端に付け、直立気味に立ち上がる体部から、口縁部はわずかに外反する。底部に回転ヘラ切り痕を残している。

Ｈ—２は、土師器坏である。底部はやや丸みを帯び、口縁端部でわずかに外反する。丁寧にヘラミ



第43図　第21支群第１号横穴墓出土土器実測図（１：３）

ガキされるが、暗文は見えない。全面に赤色顔料が塗布されている。

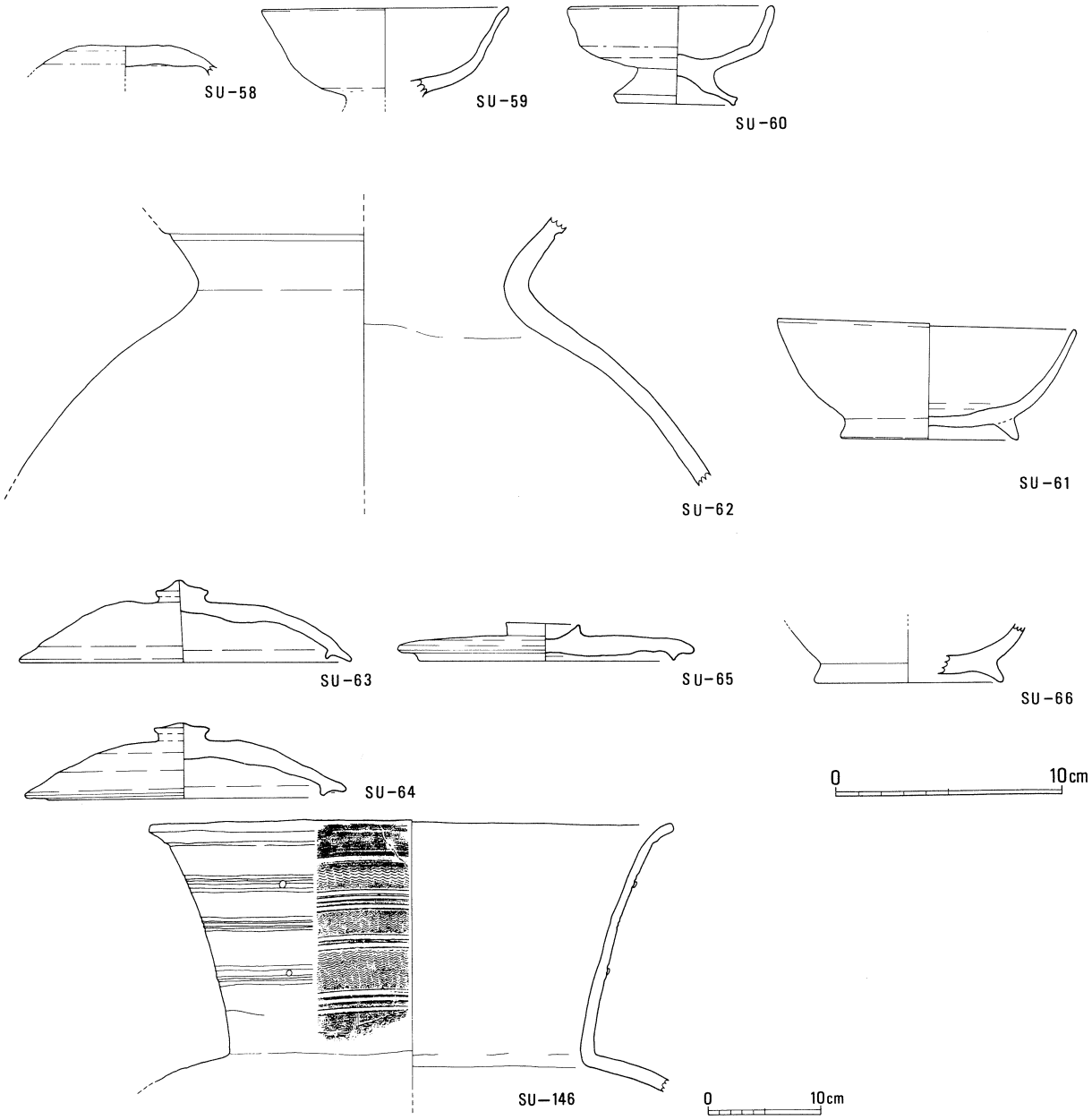
ＳＵ—57は、長頸壺である。肩が張り、頸部が直線的に延びる。頸部中央にヘラ描きの沈線を施す。底部にはヘラ切り痕を残す。外面には、自然釉が多く付着している。

ＳＵ—146は、甕の口縁部である。３段の波状文を持つ優美で、大型のものである。

第２号横穴墓に確実に伴う土器は、ＳＵ—59～62がある。ＳＵ—59は、高坏の破片で、脚部を欠くが、坏部は直線的に延び、口縁端部で外反するものである。

ＳＵ—60は、低脚坏である。直線的で浅い坏部に「ハ」の字に開く低脚を付けたもので、見込み部に重ね焼きの痕跡を残す。

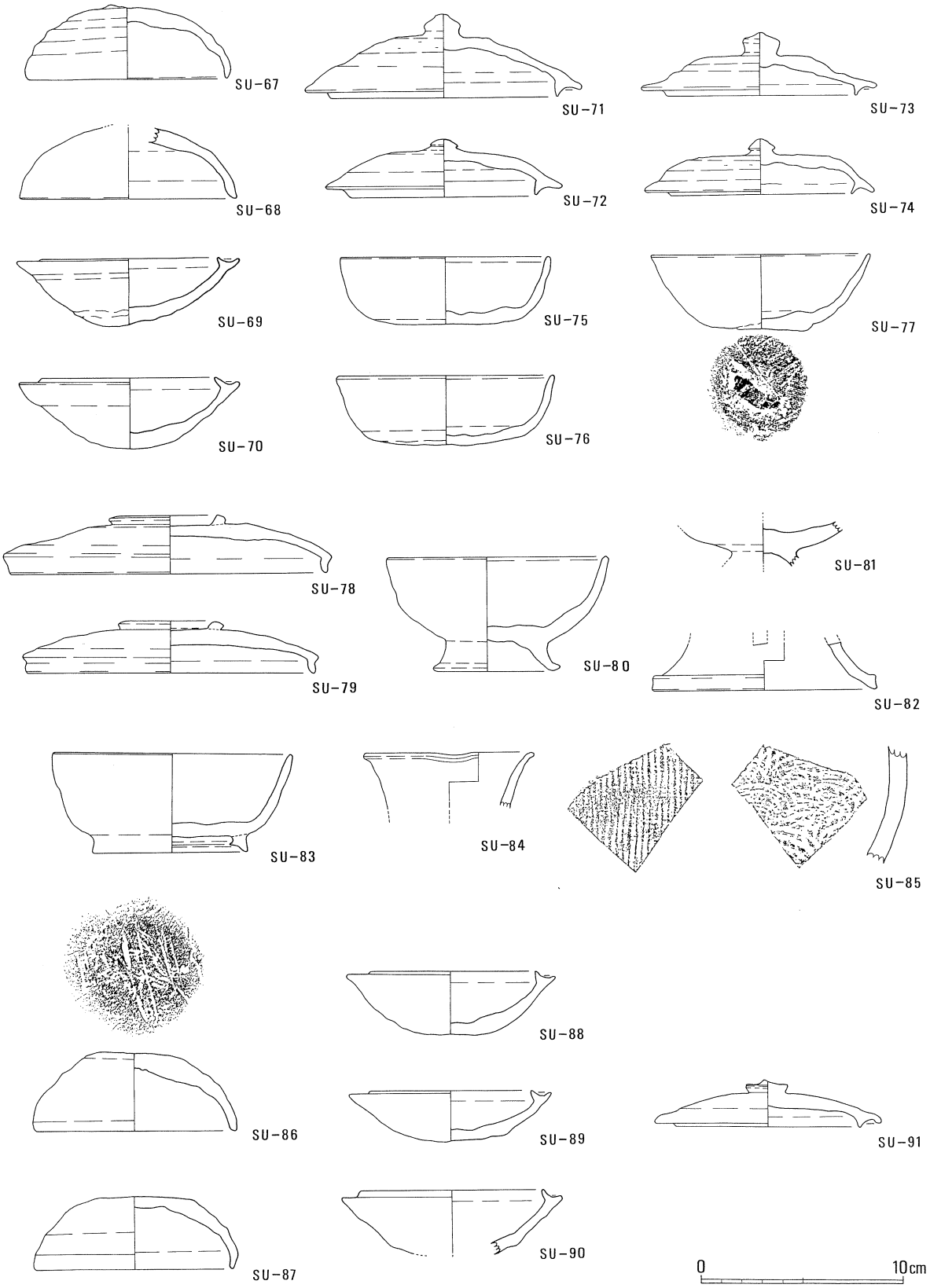
ＳＵ—61は、丸みを帯びた体部に断面三角形の高台を付けた、高台坏の碗である。体部は、緩やかに内湾し、口縁部内面にわずかにアクセントを持つ。体部外面には、わずかにロクロ目が入り、底部



第44図　第21支群第１・２号横穴墓出土土器実測図（１：３）

にはヘラ切り痕を残す。見込み部に「×」印のヘラ記号を記す。ほぼ全面にヨコナデが入り丁寧に整形されている。

ＳＵ—58・63〜66は、前庭部先端から出土したため、第１号・第２号横穴墓のどちらに伴うか分か



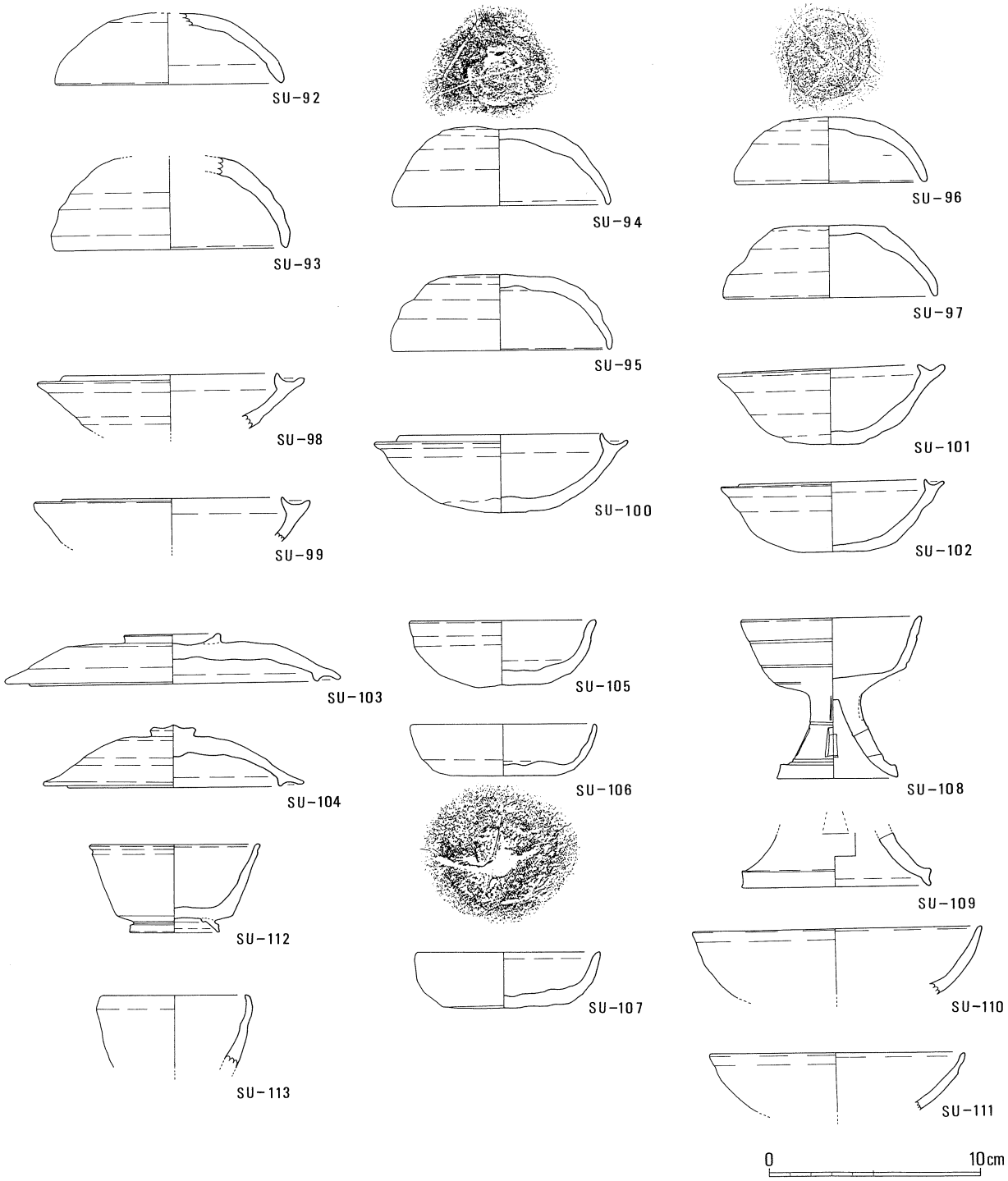
第45図　第21支群第３・４号横穴墓出土土器実測図（１：３）

らない。ＳＵ—62は、甕である。体部外面には平行タタキ、内面に同心円文の押さえ具の痕跡を残す。口縁端部を欠くが、欠損部近くに沈線があり、上部には、波状文等の文様が施される可能性がある。

ＳＵ—58は、蓋と判断したもので、頂部にヘラケズリの痕跡を残す。ＳＵ—63・64は、いずれも、擬宝珠状つまみを持つ蓋で、小さな返りを持つ。全面ナデ調整される。

ＳＵ—65は、輪状つまみを持つ蓋で、異常なほど偏平な形態である。小さな返りを持ち、口径112㎜を測るが、器高は、わずか17㎜しかない。外面には、自然釉が付着している。

ＳＵ—66は、高台の付く底部で、壺であろう。高台部分の復元径は82㎜である。



第46図　第21支群第５号横穴墓出土土器実測図（１：３）

ＳＵ—67～85は、第３号横穴墓から出土したものである。

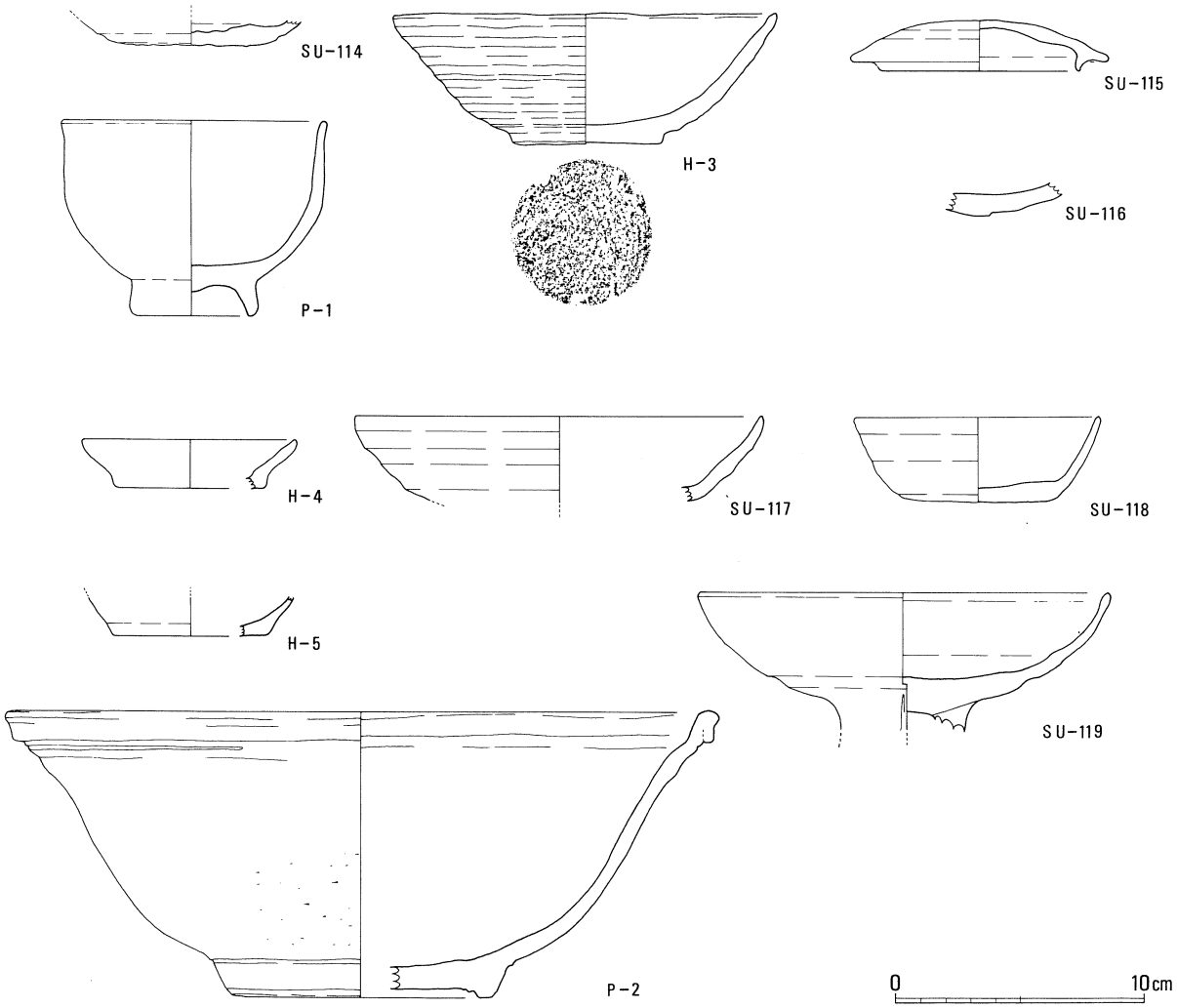
ＳＵ—67・68は蓋で、全面ナデ調整される。これらと組み合うと思われる坏がＳＵ—69・70である。大きく内傾する返りを持ち、体部の大半を回転ナデ調整する。ＳＵ—69の底部には、ヘラケズリが見られる。

ＳＵ—71～74は、擬宝珠状つまみを持つ蓋で、いずれも返りが付いている。ＳＵ—71は、器高があり、緩やかな体部を持っている。ＳＵ—72は、つまみが小さく、全面ナデ調整される。ＳＵ—72を除き、頂部にヘラケズリの痕跡をわずかに残す。

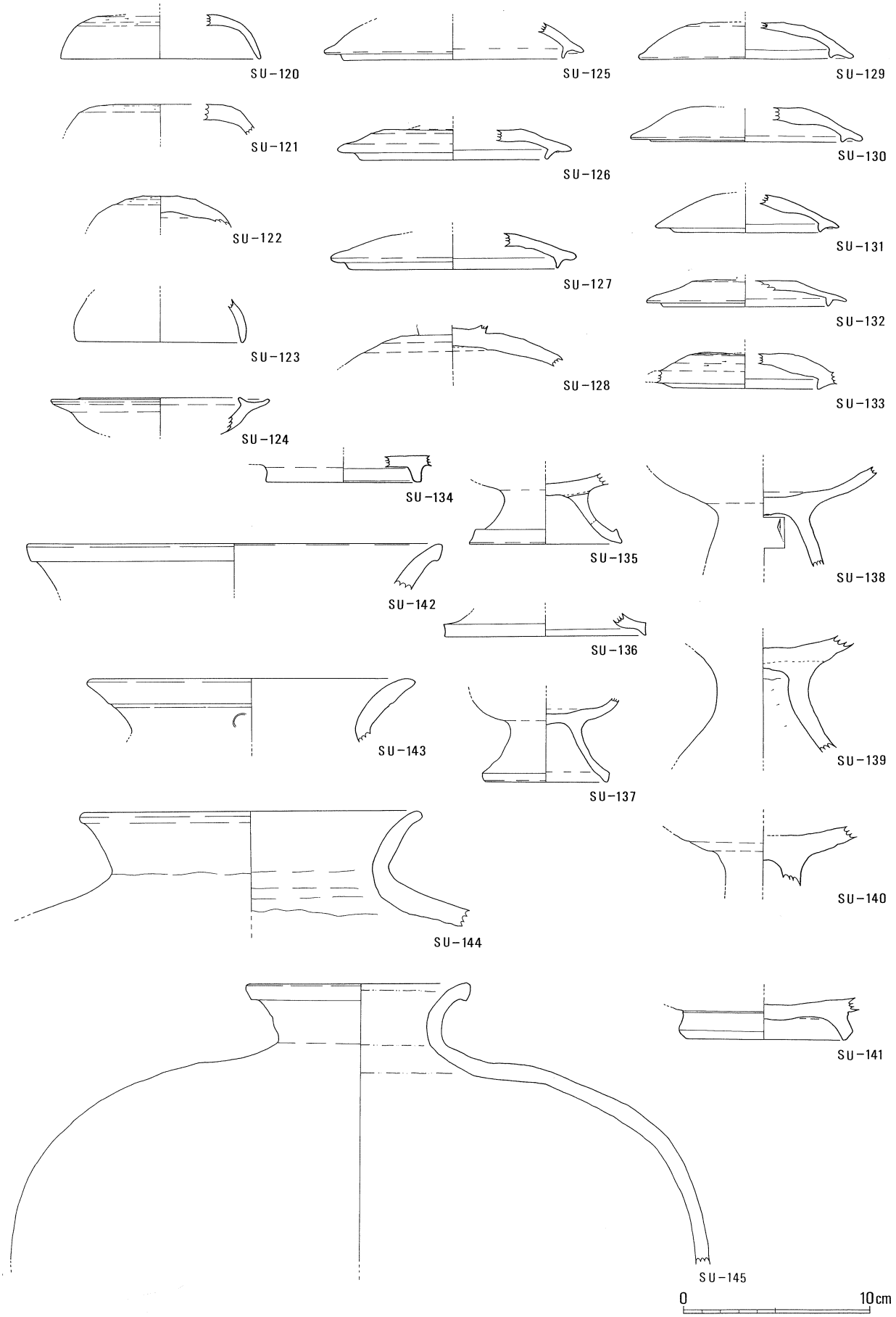
ＳＵ—75・76は坏である。底部は平坦で、体部は直線的に立ち上がる。底部に回転ヘラ切り痕をわずかに残す。ＳＵ—77は、深碗形の坏である。回転ヘラ切り痕を残す底部は、やや小さく、丸みを帯びた体部は、直線的に立ち上がる。底部外面にヘラ記号がある。

返りの無い蓋は２点出土している。ＳＵ—78は、口径160㎜に復元できる大型のもので、輪状つまみを持つ。頂部には、わずかにケズリの痕跡を残している。ＳＵ—79は、ＳＵ—78とまったく同じ器形を呈すが、復元口径は20㎜近く小さい。

ＳＵ—80は、低脚を持つ坏である。坏部は丸みを帯びて緩やかに内湾する体部を持ち、深碗形を呈



第47図　第21支群第６～10号横穴墓出土土器・陶磁器実測図（１：３）

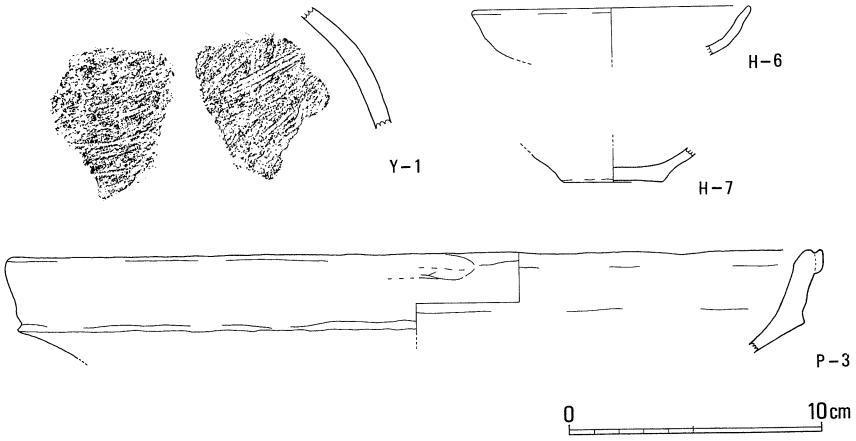


第48図　第21支群出土土器実測図（１：３）

している。「ハ」の字形に突き出す脚部は、端部近くで外側に大きく開いている。

ＳＵ—81・82は、高坏である。ＳＵ—82は、脚部の破片で、スカシの痕跡がある。三角形のスカシか。

ＳＵ—83は、高台を持つ坏である。平坦な底部から大きく屈曲して直線的な体部に続く。高台は、内側に陵を持つ特異な形で、ほぼ垂直に付く。底部外面にわずかにヘラの痕跡を残している。



第49図　第21支群出土土器・陶磁器実測図（１：３）

ＳＵ—84は、長頸壺口縁部の小片で、口径84mmに復元できる。口縁端部でわずかに外反し、注ぎ口を備える。

ＳＵ—85は、甕胴部の破片である。外面に平行タタキ、内面に同心円文が残る。玄室内から出土した。

第４号横穴墓からは、坏類ばかり６点が出土した。ＳＵ—86・87は、蓋である。どちらも口径約10cmに復元できるが、焼成はまったくことなり、ＳＵ—86は灰白色を呈し、非常に軟質である。ＳＵ—87は、口縁部内面で屈曲し、アクセントを持つ。ＳＵ—87の内面には、「川」の字形にヘラ傷が見える。どちらも頂部にヘラ起こしの痕跡を残す。

ＳＵ—88～90は、坏である。いずれも小さな返りを持っている。口径８～９cmに復元できるもので、ＳＵ—89の底部には、わずかにケズリ痕を残す。

ＳＵ—91は、擬宝珠状つまみを持つ蓋である。器高は24mmと、きわめて低い。ほぼ直立する返りを持ち、外面にわずかにケズリの痕跡を残している。

第５号横穴墓は、最も多くの遺物を出土した。ＳＵ—92～97は、蓋である。ＳＵ—92～95は、口径11cm前後に、ＳＵ—96・97は、９cm前後に復元できる。天井部にヘラケズリの痕跡を残すものが多く、ＳＵ—94の頂部には、「井」字形の、ＳＵ—96には、「×」印のヘラ記号が見られる。

ＳＵ—98～102は、坏である。口径は、ＳＵ—98・99で10cm前後に、ＳＵ—100～102では、９cm前後に復元できる。返りが内傾するものが多く、ケズリ痕をほとんど残さない。ＳＵ—101は、見込み部に「×」印のヘラ記号を持つ。

つまみを持つ蓋は、２点出土している。ＳＵ—103は、口径14cmに復元できる大型品で、口径に対する器高が低い。輪状つまみを持ち、返りはきわめて小さい。外面にケズリの痕跡をわずかに残す。ＳＵ—104は、擬宝珠状つまみを持つ、器高の高いものである。外面にわずかにケズリ痕を残し、返りは小さい。

ＳＵ—105～107は、返りを持たない坏で、口径９cm前後に復元できるものである。ＳＵ—105は、底部から体部にかけて丸みを帯びて内湾するもので、口縁部は外反する。底部は、回転ヘラ切り痕を残

す。ＳＵ―106は、平坦な底部を持ち、わずかに内湾する直線的な体部を持つものである。底部には、ヘラ起こしの痕跡を残す。ＳＵ―107は、ＳＵ―106とほぼ同様の器形であるが、体部が内湾せず、底部に回転ヘラ切り痕を残すものである。

高坏は、４点を確認した。ＳＵ―108は、完形を呈すもので、直線的な体部を持つ坏部と２段のスカシを持つものである。坏底部はほぼ平坦で、大きく屈曲して直線的な体部に至る。体部外面には３条のごく浅い沈線が入るが、下の１条は、途中で消えている。脚部には各２条毎の浅い沈線に区画され、２段のスカシが４方向に入る。上段のスカシは、貫通しない切り目のみで、きわめて浅い。下段のスカシは、台形である。ＳＵ―109は、脚部の小片で、底径約９㎝に復元できる。スカシの一部が残っており、三角形のスカシがあったものと思われる。

ＳＵ―110・111は、高坏坏部の小片である。いずれも緩やかに内湾する坏部を持つもので、口縁部下方にナデによる浅いくびれを持つ。全面回転ナデ調整される。

第６～10号横穴墓は既に完全に開口していたため、遺物量は極端に少なかった。

ＳＵ―114は、第6号横穴墓で出土した。坏の底部と思われる小片で、ヘラケズリの痕跡を残している。

Ｈ―３は、第６号横穴墓で出土した土師器碗で、破片となって出土したが、ほぼ完形に復元できた。円盤状の底部から、体部が直線的に立ち上がるもので、体部外面にはロクロ目状の窪みを強く残している。底部には回転糸切り痕を明瞭に残している。ロクロ目状の痕跡は、ヘラ状工具によるナデと考えられ、故意に強くつけられた上に、ナデ調整されている。下方でわずかに膨らみ、そこから直線的に立ち上がる体部は、口縁部直下で、わずかに内湾する。内面は、丁寧にナデ調整される。

Ｐ―１は、第６号横穴墓から出土した陶器碗である。削りだしによる高い高台を持ち、緩やかなカーブを描いて立ち上がる体部は、口縁部近くでわずかに外反する。胎土は乳白色を呈する精良なもので、それに、明黄褐色の釉をかける。釉には細かい貫入が入っている。

第７号横穴墓からは、２点の須恵器が出土した。ＳＵ―115は、蓋の破片で、頂部が欠損しているため、つまみの形状は分からない。復元径は、約８㎝と非常に小さく、つまみを持たないかもしれない。全面ナデ調整し、かえりはほぼ垂直に降りる。

ＳＵ―116は、坏の底部と考えられるが、小片のため分からない。外面には、ヘラ起こしの痕跡と思われる傷が入っている。内面は、ナデ調整される。

Ｈ―8は、第8号横穴墓前庭部で出土した土師器小皿である。底部は欠損しているが、回転糸切り底を持つものであろう。円盤状の底部から一段上がった位置に直線的な体部が付く。全面ナデ調整する。

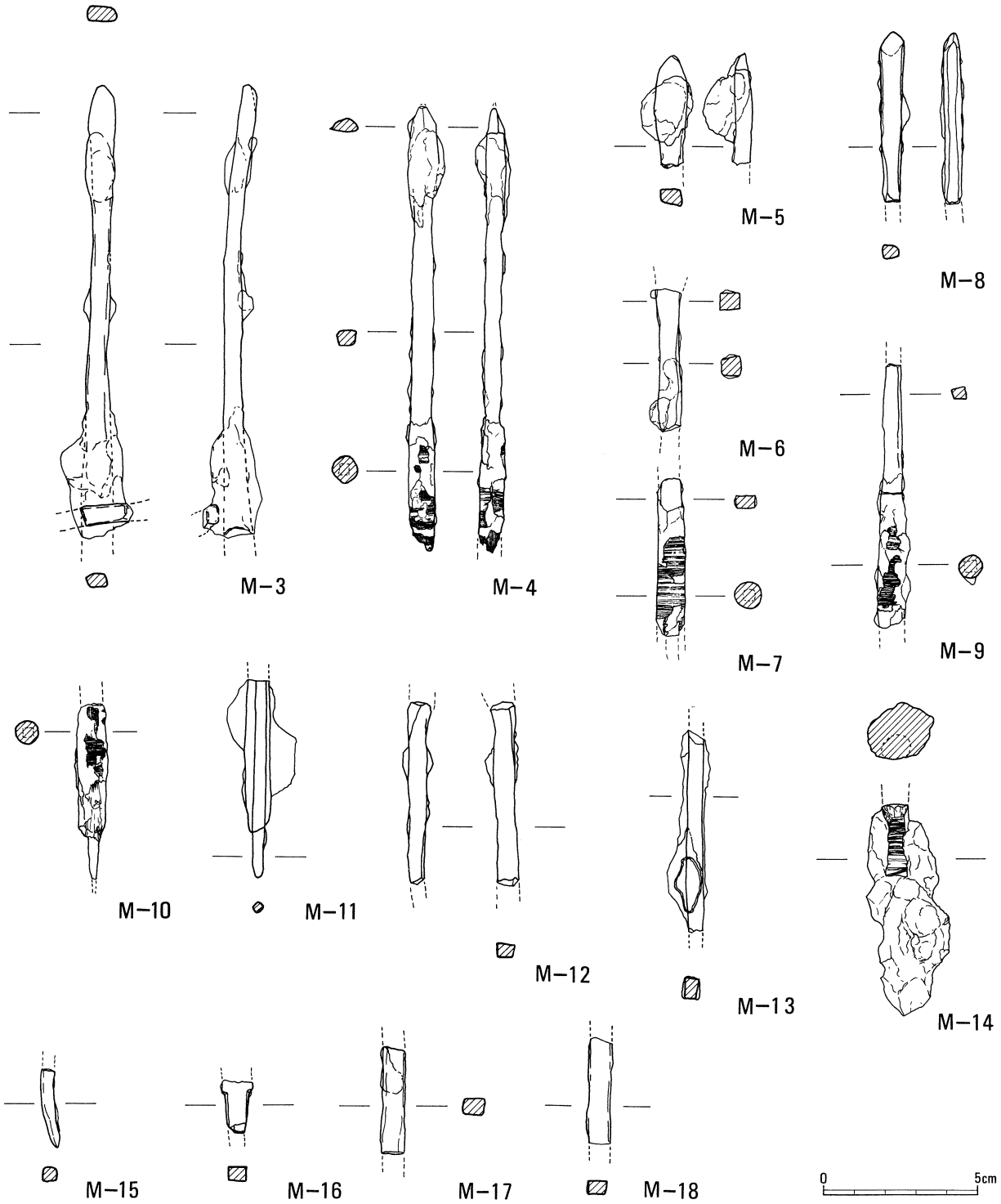
ＳＵ―117は、第９号横穴墓から出土した、須恵器の小片で、高坏になるものと思われる。緩やかに内湾する坏部で、外面には、強いナデによるロクロ目状の陵が見える。

第10号横穴墓からは、４点の土器・陶器が出土した。ＳＵ―118は、完形を呈する須恵器坏である。底部には回転ヘラ切り痕を残し、わずかに内湾しながら体部が立ち上がる。全面的に丁寧な回転ナデ調整されている。

ＳＵ―119は、須恵器高坏で、脚部を欠く。緩やかに内湾するきわめて薄手の坏部は、わずかにロクロ目が入る。口縁部は、端部近くでわずかに肥厚して丸く納める。脚部には、貫通するスカシが切り込み状に２方向に入る。全面ナデ調整を行う。

Ｈ－５は、土師器小皿の小片である。全体に摩滅しており、調整は不明だが、回転糸切り底を持つものと思われる。

Ｐ－２は、擂り鉢である。破片となって３点が、第６号横穴墓玄室内、第７・10号横穴墓の前庭部から出土し、接合した。削り出しの輪高台を持ち、緩やかに蛇行する体部が斜めに延びる。口縁部は、外側に小さく折り返し、内外面に強いナデを施している。内面の櫛目は、３㎝間に10本の単位で、反時計廻りに施されている。外面の体部下半には、ケズリ痕が残る。器面はくすんだ赤褐色を呈す。胎



第50図　第21支群第１号横穴墓出土金属器実測図（１：２）

土は、黄褐色で、白色の微砂粒を多量に含んでいる。

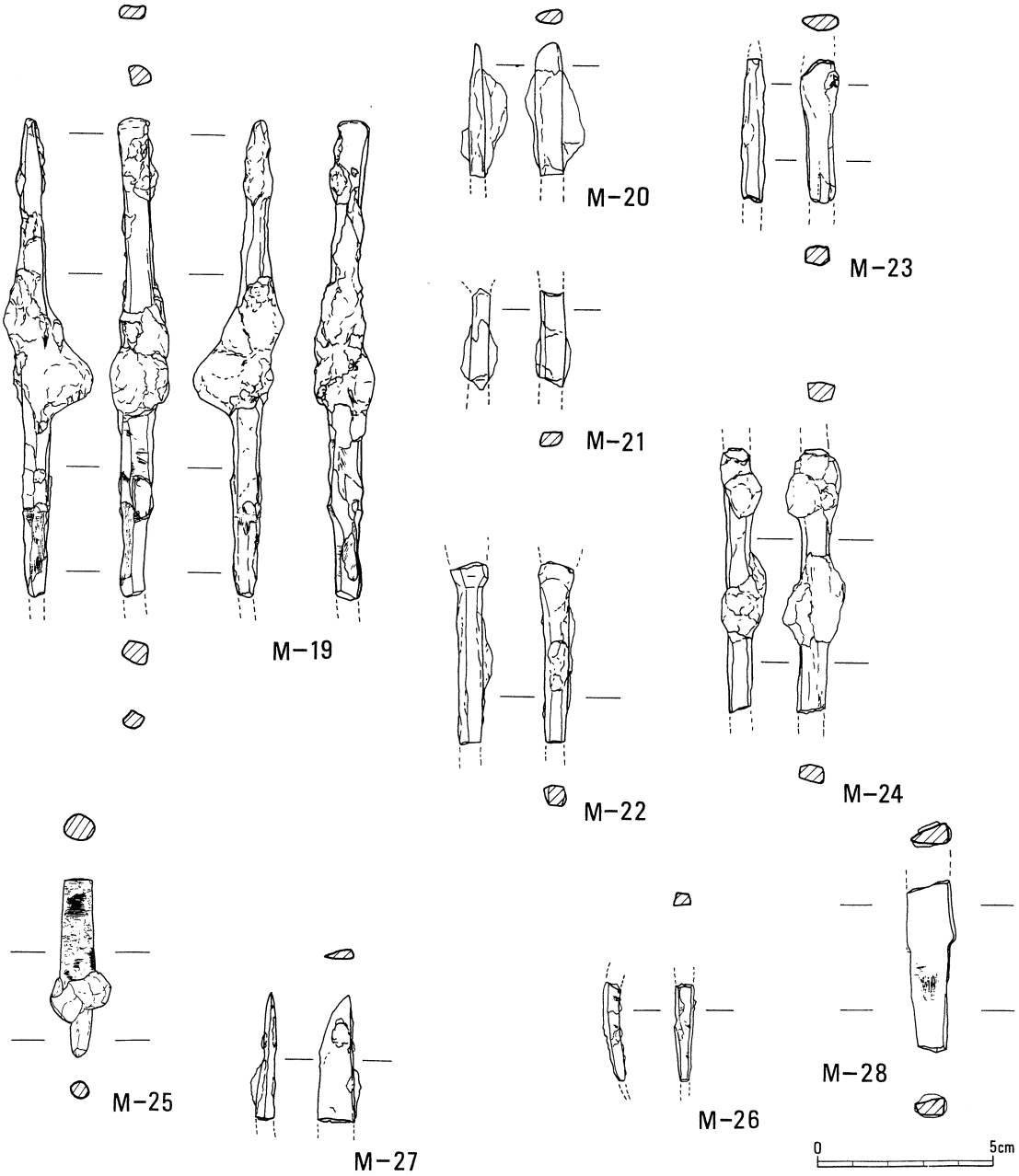
第48・49図に挙げたものは、遺構に伴わない土器である。第１号横穴墓より西側の斜面、及び谷部中央から多く出土している。

ＳＵ—120～123は、蓋としたものである。ＳＵ—120～122は、頂部にケズリ痕を強く残している。ＳＵ—122・123は、小型のものである。

ＳＵ—124は、坏の小片で、かえりが強く内傾する。

ＳＵ—125～133は、つまみの付く蓋と考えられるもので、ＳＵ—128には、輪状つまみが見られる。ＳＵ—131～133は、小型のもので、特にＳＵ—132は器高も低く、ＳＵ—2等と同様のつまみの付かないものの可能性がある。

ＳＵ—134は、高台部分の小片で、坏か皿の底部と思われる。ナデ調整し切り放し痕は、残さない。



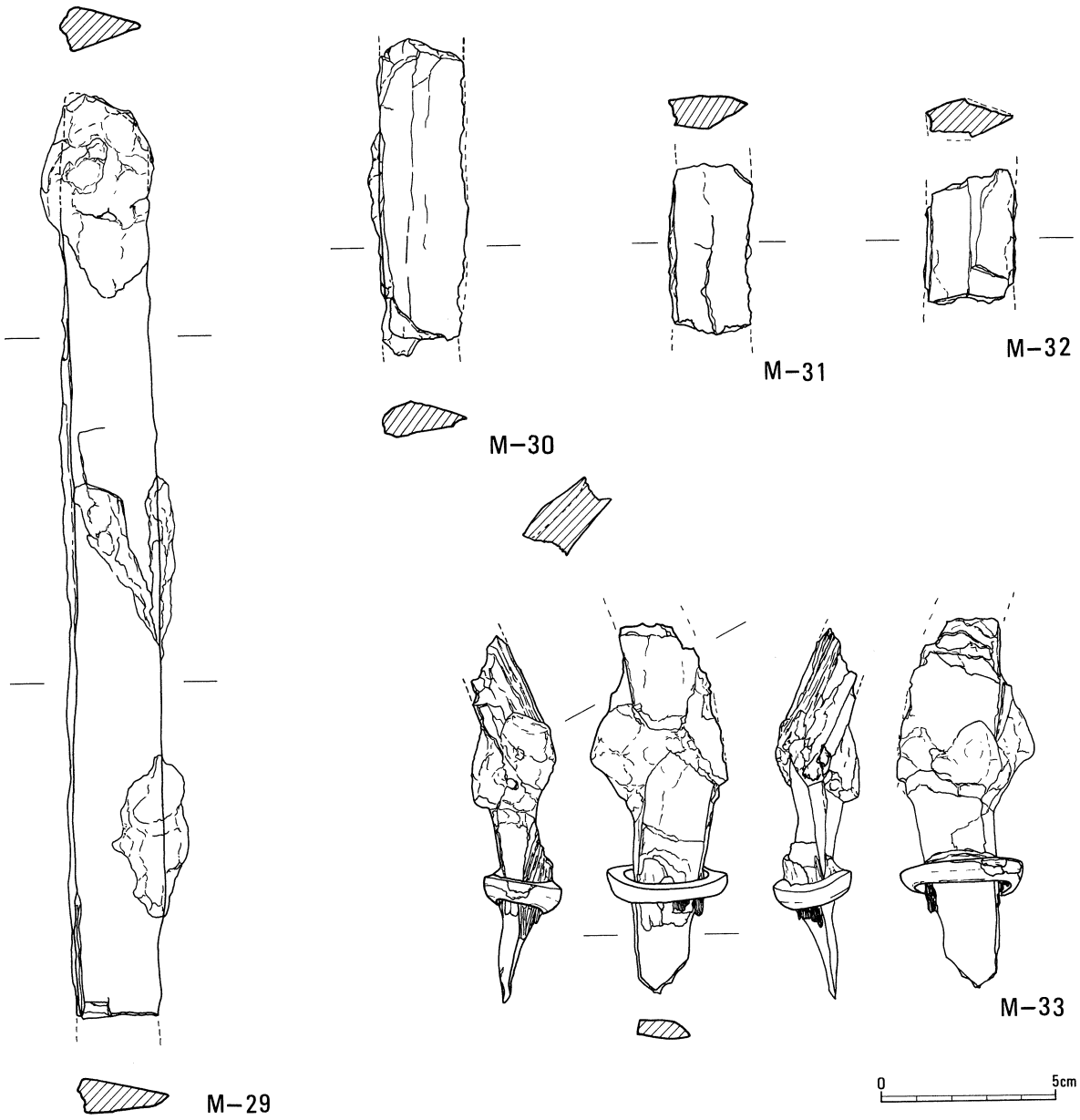
第51図　第21支群第２号横穴墓出土金属器実測図（１：２）

ＳＵ—135～140は、高坏である。坏部が残るものは、いずれも内湾して立ち上がるもので、屈曲し直線的に体部が立ち上がるものは見られない。脚端部は、上方に延びるもの（ＳＵ—135）と、下方に延びるもの（ＳＵ—136・137）がある。ＳＵ—135・138には、切り目になったスカシを備える。ＳＵ—139の脚部内面には、掻き取り痕が見られる。

ＳＵ—141は、高台の小片であるが、外側に突っ張る厚手のもので、壺であろうか。底部にはヘラ切り痕がわずかに残る。

ＳＵ—142～144は、甕である。ＳＵ—143には、頸部外面に竹管文（？）が施される。

ＳＵ—145は、横瓶である。口縁部は緩やかに外反し、端部を折り返す。体部は、外面に平行タタキを交互に打った後、軽く、カキメを施す。内面は、同心円文の押さえ具の痕跡を、軽くナデ消す。体部上方には、火当たりと思われる白い斑点が多く見える。暗青灰色から茶褐色を呈すが、断面は、暗赤褐色になっている。胎土中には、黒色の微砂粒をわずかに含んでおり、非常に硬く焼成されている。



第52図　第21支群第３号横穴墓出土金属器実測図（１：２）

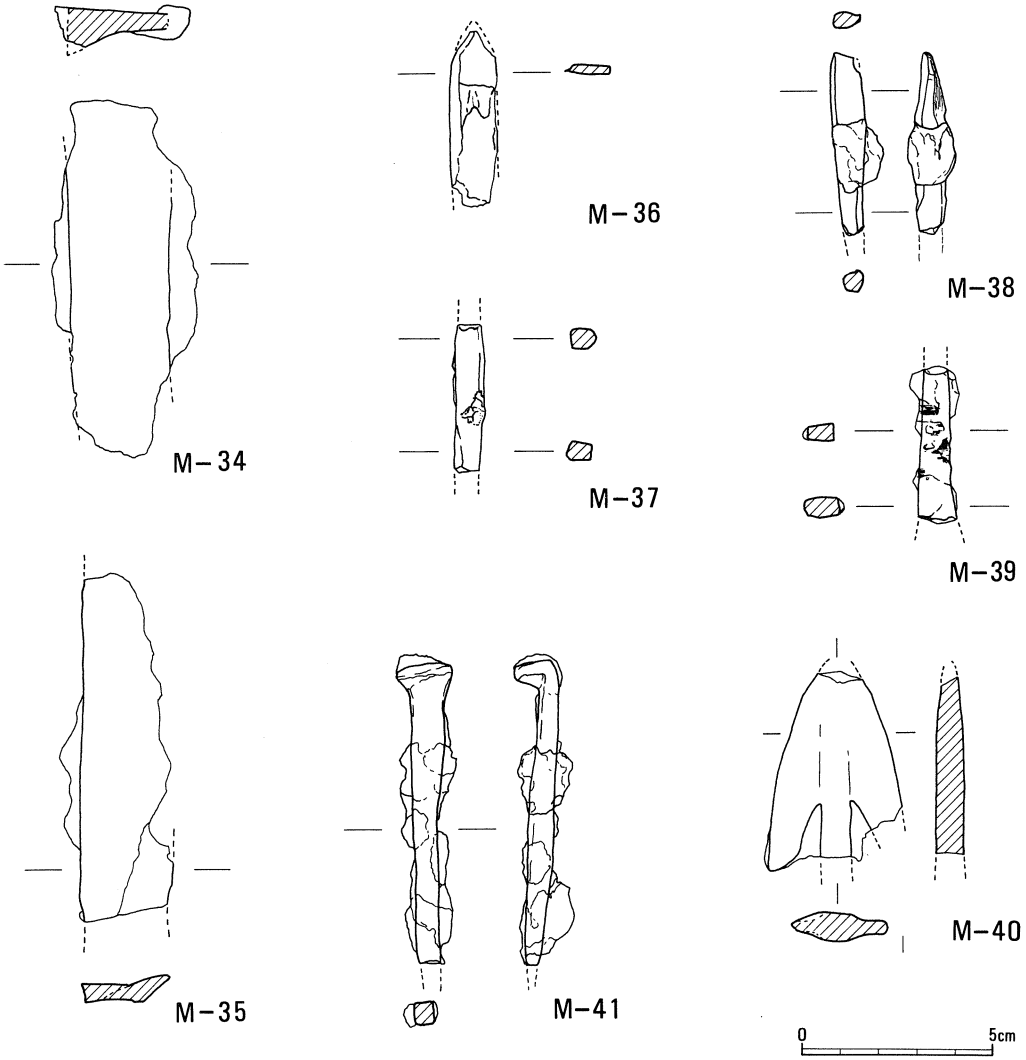
Y—1は、弥生土器と考えられる体部の破片である。内面は、ケズリの後ナデ、外面には不整方向のハケメが見える。器形は壺であろうか、弥生中期から後期のものと思われる。

H—6・7は、土師器小皿である。摩滅が著しく調整は見えない。

P—3は、口縁端部に注ぎ口を張り付けた、瓦質の鉢である。内面はナデ、外面は、器面が著しく荒れている。褐色を呈し、ガラス質の砂粒を非常に多く含んでいる。用途としては、鍋が考えられ、近世から近代のものと思われる。

第21支群で出土した須恵器は、全体で見ると以下のことがいえる。坏で見ると、口縁内面のかえりが高く直立するものが見られず、ケズリの痕跡を残すものに付いてもその範囲は非常に狭い。また、切り放しは、基本的にヘラを使っており、糸切りは見られない。この様なことから第21支群の須恵器は全てTK—217併行期のものとみられ、追葬の可能性は高いものの、その使用年代は、およそ7世紀台に限られるようである。第1号横穴墓で出土した土師器皿（H—2）も飛鳥Ⅲ期あたりに含まれるものと考えられ、上記の可能性を否定するものではない。

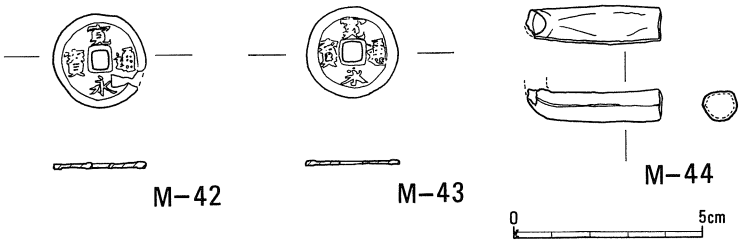
7世紀台に一応の使用を終えたと考えられる第21支群には、鎌倉時代に再び使用される時期がある。第6号横穴墓で見られる土師器碗（H—3）がそれで、およそ13世紀頃のものと考えられる。この時期の土師器が横穴墓から出土するのは、ここに限ったことではなく、大田市など石見東部に類例[註3]が見られる。



第53図　第21支群第4・5号横穴墓出土金属器実測図（1：2）

金　属　器

第1号横穴墓の前庭部から羨道部にかけて、多くの金属器が出土している。図示したものは、全て鉄鏃と考えられるものである。全体の分かるもの（M—3・4）では、鏃身は、



第54図　第21支群出土金属器実測図（１：２）

柳葉形を呈する小型で厚手のもので、断面方形の長い頸部を持つ。明らかに形態の異なるものとしては、M—８が、鏃身に幅を持たない。また、M—16は、茎と頸部の間に両関を備えている。M—4・7・9・10・14には、矢柄の一部が残存しており、それによると、矢柄に茎を差し込んで、糸で巻き、漆で固定したようである。M—３に見られるように、他の個体が錆び付いて付着している例があり、何点かまとめて副葬されたようである。

M—19〜28は、第２号横穴墓から出土した。鉄鏃と考えられるものは、M—19〜25で、第１号横穴墓で見られた、柳葉形の鏃身は見られない。M—19ではバチ形の、M—20では、背のある刀形の鏃身を持っている。M—25は、茎部の残るもので、第１号横穴墓のものと同様に矢柄の一部に糸、漆状の付着物が見られる。M—25茎の部分には、錆が付着しており、錆中に断面円形の棒状のものの跡が残されている。

M—26は、釘と思われるもので、断面方形を呈す。

M—27・28は、刀子と考えられるもので、膨らんで板状に剝離している部分も見られるが、刀身幅約13㎜を測る。両関と思われ、目釘穴は見えない。

第３号横穴墓からは、太刀（第52図）が出土している。残りが悪く、破片となって数点が出土したが、同一個体と考えられる。膨らんで、板状に剝離しており、接合できないが、全長は少なくとも50㎝以上ある。刀身幅約25㎜で、厚さは計測できない。大きく折れ曲がっているため定かでないが、背側の片関と思われる。関と思われる部位から26㎜の位置に目釘穴が見える。茎に青色を呈す輪が付いている。長径34㎜、短径23㎜の楕円形を呈しており、厚さは、6〜7㎜である。リング部分の断面は¼円形で、丸い部分が柄頭に向いている。材質は鑑定していないが、全面に緑青が浮いており、剝離した部分が黒色を呈する金属である。内径の大きさから言って、鐔には成り得ず、鍔としても小さすぎるため、柄か、柄頭の部品であろうか。

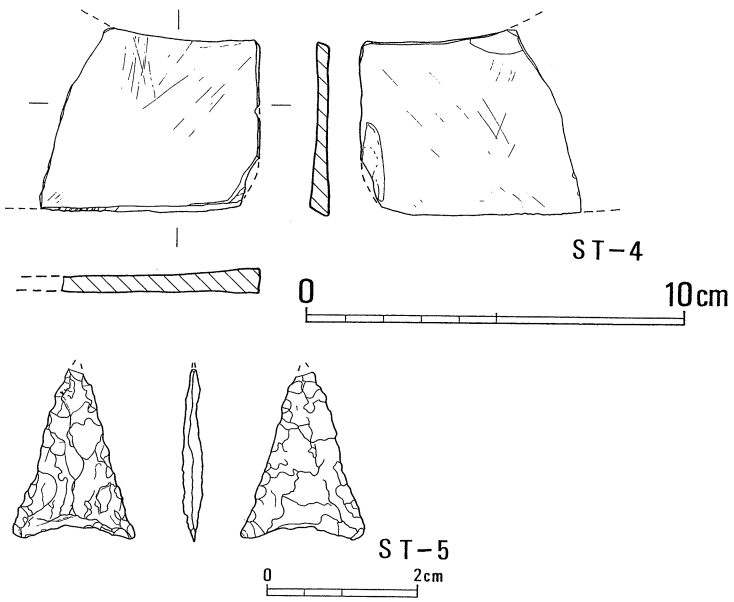
M—34〜39は、第４号横穴墓から出土した。M—34・35は太刀と考えられるもので、非常に残りが悪い。刀身幅25㎜、厚さ12㎜前後を測るものと思われるが、板状に剝離しており、正確には計測できない。

鉄鏃と思われる破片は４点出土している。M—36は、柳葉形をした小型の鏃身を持っており、鏃身幅12㎜を測る。M—38は、小さなバチ形を呈する鏃身を持つ。全形を伺うことはできないが、いずれも、断面方形の長い頸部を持つものと思われる。

M—41は、鉄釘で、中央付近で１辺５㎜の断面正方形、頭部近くで幅９㎜、厚さ４㎜を測る。頭部は折り曲げて潰した形になっており、隅丸方形を呈する。

第５号横穴墓からは、刺突部先端を欠く鉄鏃の鏃身部（M—40）が出土している。偏平な大型品で、長いかえりが付く。茎部の長さは明かでないが、断面方形を呈す。

以上が古墳時代の金属器である。これらの中で、もっと古い特徴を持つものが第５号横穴墓出土のM—40である。古い伝統的な形状を保った鉄鏃は、第21支群では他に出土しておらず、基本的には、鏃身部の小型化した長頸のもののようである。大刀については、言及できないが、M—33に見られる、



第55図　第21支群出土石器実測図（ST4 1:2　ST5 1:1）

金属製の輪に付いては、広島県高田郡甲田町法恩地南古墳[証4]に類例が見られる。法恩地南古墳は、横穴式石室を主体部とする後期古墳で、6世紀後半から末頃と考えられている。石室内で出土した3本の直刀の内の1本がそれで、全長86.4cmを測る完形の直刀に環状金具2個が伴出している。この環状金具は、出土状況から柄に付属するものと考えられている。

そのほか、横穴墓から近世・近代の金属器も出土している。

M—42・43は、第8号横穴墓で出土した寛永通寶である。2枚とも摩滅が著しく、字を読みとるのがやっとであり、字体の検討まで至らなかった。直径25mmを測る。

M—44は、第8号横穴墓で出土した煙管である。全面に緑青が浮いており、真鍮製と思われる。1側縁に鑞付けの痕跡が見える。

石　　器

ＳＴ—4は、第7号横穴墓前庭部で出土した砥石である。1側縁を欠くが、残存長56mm、残存幅49mm、厚さ6mmを測る。各面とも使用されており、細かい擦痕が多く見えるほか、側縁部には深い傷が幾本も見える。灰色の硬い石材が使用されている。

ＳＴ—5は、第21支群黒色土中で出土した石鏃である。凹基式三角形鏃で、基部のえぐりが比較的深い。丁寧に調整されており、第1次剝離面は残していない。先端をわずかに欠くが、残存長23mm、幅16mm、厚さ2mmを測る。石材は安山岩を使用している。

第11トレンチ出土遺物

第11トレンチは、横穴墓群下方西側の水田中に設定した。検出遺構は無く、前述の通り横穴墓群以前の遺物が多く出土している。

縄文土器（ST—2〜4）は3点を図示した。いずれも外面を条痕で仕上げるもので、深鉢であろう。Ｊ—2は、口縁部を残している。後期から晩期のものか。

Ｙ—2は、弥生土器である。底径65mmに復元できる底部の小片で、体部外面に縦方向のヘラミガキ、内面をナデで調整する。

ＳＴ—6は、太型蛤刃石斧である。刃部等の主要部を欠損している。緑色の石材を使用する。

Ｈ—8は、土師器甕とした。口径約13cmに復元できる小型のもので、口縁端部に面を持つ。

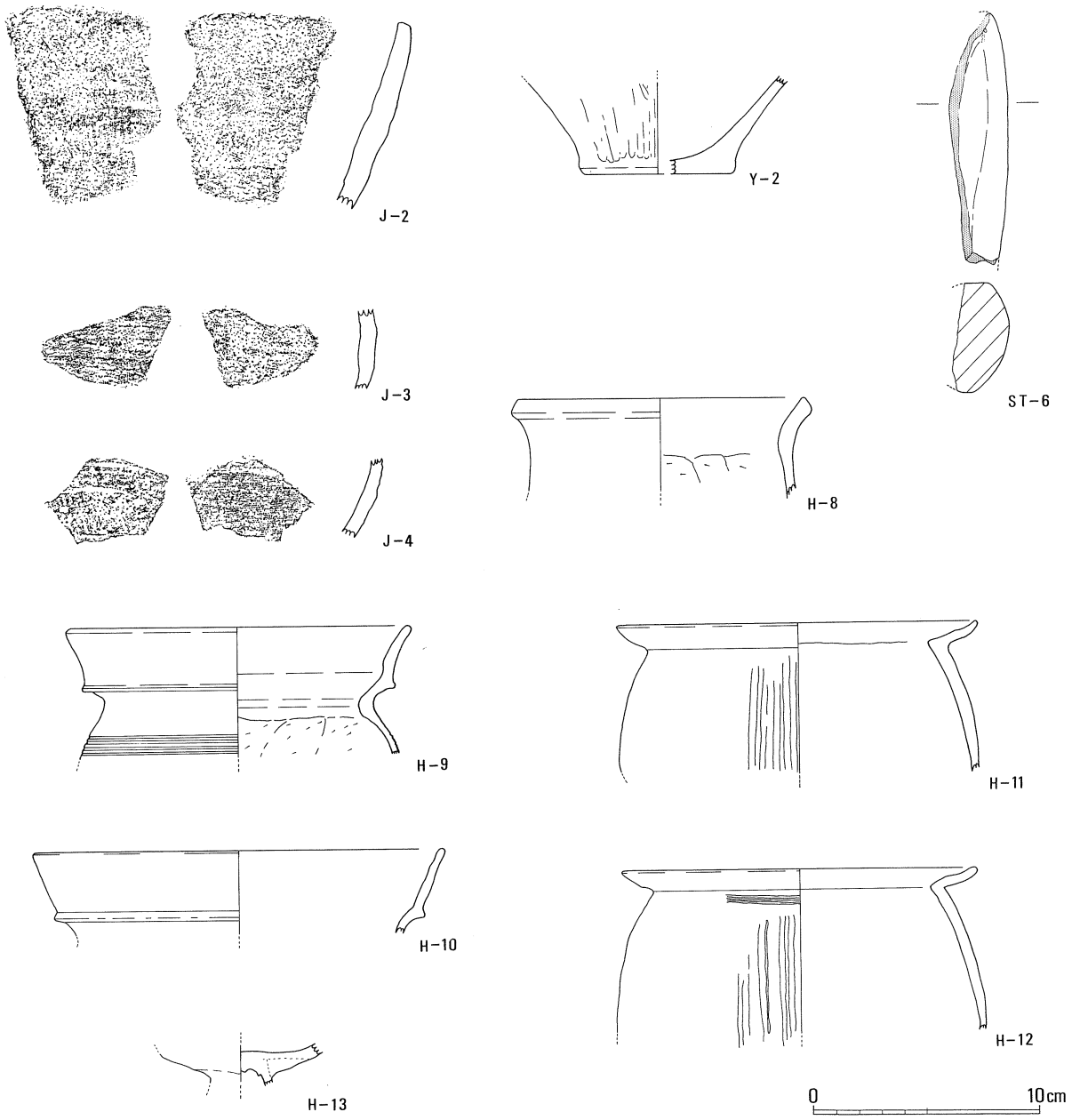
Ｈ—9・10は、二重口縁を持つ土師器の甕である。Ｈ—9は、内面のケズリが頸屈曲部の下方まで降りるもので、肩部にくし描き直線文を施す。体部は、非常に薄く仕上げている。Ｈ—10は、屈曲部を外側に突出させるもので、口縁部を薄く直線的に作り、小さな面を持たせている。

H—11・12も土師器の甕である。体部外面には、縦方向に荒いハケメが施される。頸部で鋭く屈曲し、わずかに内湾して口縁部に至るが、口縁端部は内面側に鋭いアクセントを持つ。内面は、ナデに見える。口縁端部内面にアクセントを持つことから、近畿地方の影響を受けた土器であろうか。

H—13は、土師器高坏の小片である。全形は、想像できないが、脚取付部には中央に刺突痕を持つ。

これらの遺物は、ほとんどが礫層中からの出土で、縄文土器から土師器に至るまで層位的差は存在せず、全て流れ込みと判断される。従来出雲平野には縄文時代の遺跡は少ないと言われてきたが、この付近での縄文土器は、1975年に島根県教育委員会が行った調査で、三田谷Ⅰ遺跡（三反谷遺跡）から確認されており[証5]、付近に縄文時代の集落の存在をうかがわせている。

三田谷Ⅰ遺跡は、縄文から中世に至る複合遺跡で、須恵器・土師器を中心とする良好な包含層を有すると考えられ、第11トレンチから西に500m程の位置と、非常に近いこともあり、現時点では第11ト



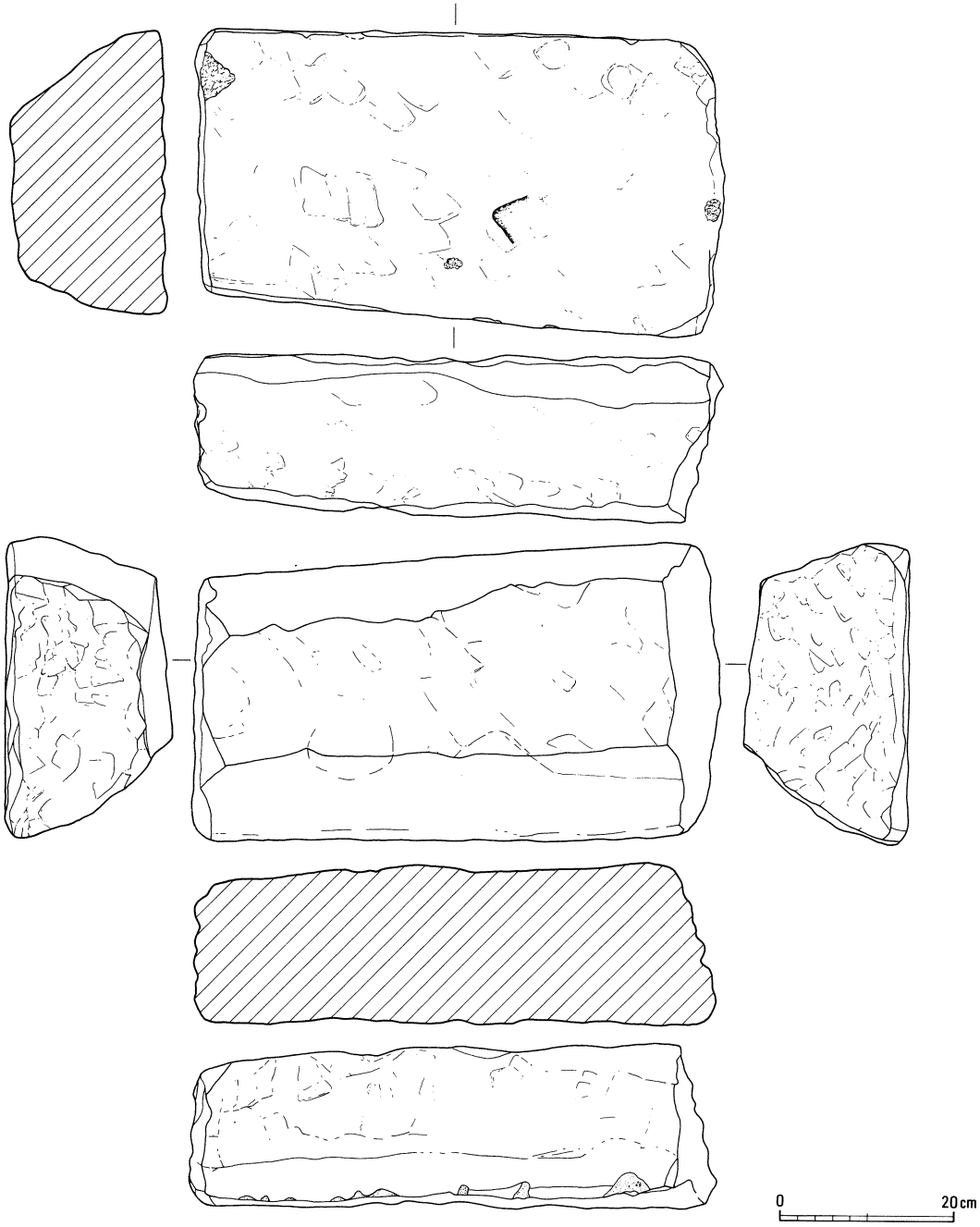
第56図　斐伊川放水路第11トレンチ出土遺物実測図（1：3）

レンチと一連の遺跡である可能性がある。三田谷Ⅰ遺跡は、標高15m前後の位置にあり、第11トレンチの位置する谷が神戸川に至る出口にあたっている。

第1号横穴墓出土石製品

第57・58図は、第1号横穴墓玄室内に置かれていた大型石製品である。第1号横穴墓玄室内に2個とも並べて置かれていたもので、出土状況から閉塞石とは考えにくい。検出当初は、棺台か石棺と想像したが、違うようである。

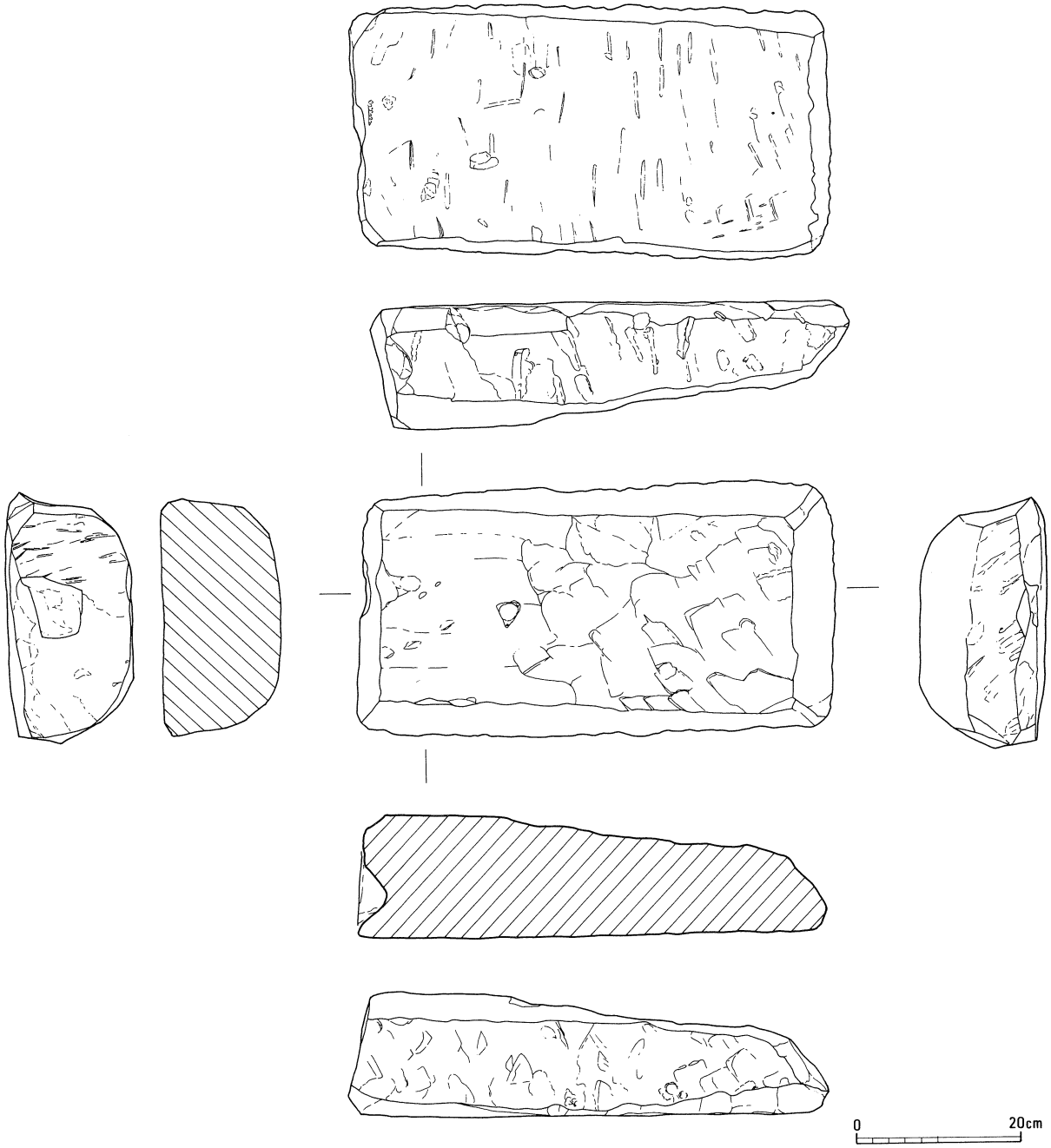
第57図は、玄室中央に、広い面を下にして、主軸方向に置かれていたもので、縦断面長方形、横断面6角形の細長い形状をしており、長さ約60cm、幅約33cm、高さ約18cmを測る。各面とも平のみ状工具で荒く削られ、その痕跡を非常に多く残しているが、両側面の狭い範囲のみは、丁寧に調整されて



第57図　第21支群第1号横穴墓出土石製品実測図1（1：8）

おり、他の用途に使用された石製品の転用である可能性がある。石材は触れると砂が落ちるような脆いもので、砂岩質と思われる。

第58図は、第57図に平行に置かれていたもので、同様に、広い面を下に、高さの低い側を奥壁に向けていた。横断面は、かまぼこ形を呈しているがわずかに陵があり、第57図と同様の６角形を意識しているように感じる。縦断面は、片面が直立し、他の面が鋭く傾斜しており、その形状は、片刃摩製石斧を思わせる。図面中央の左約⅓にあたる部分のみ非常に丁寧に調整されているが、ほとんどの面で荒い平のみ状工具の痕跡を残している点は、第57図のものと同様である。端部の直立する面には、直径７㎝、深さ４㎝程の窪みが開いているが、窪みの中にはのみ痕が見られず、石材中の不純物（石？）が抜け落ちた跡と思われる。使用する石材は、横穴墓を掘削している岩とほぼ同様の凝灰岩で、わずかに不純物を含んでいる。



第58図　第21支群第１号横穴墓出土石製品実測図２（１：８）

註 1　『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』　島根県教育委員会　1980年

註 2　『陰田』　米子市教育委員会　1984年

註 3　『大田市松田谷横穴群』　島根県教育委員会　1982年

『諸友大師山横穴群』　大田市教育委員会　1983年

『仁摩健康公園造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』　仁摩町教育委員会　1989年

註 4　『法恩地南古墳』　（財）広島県埋蔵文化財調査センター　1984年

註 5　『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』　島根県教育委員会　1980年

挿図番号 図版番号	出土位置	器種	法　量	色調・胎土・焼成	備　　考
SU-36	21支群 1号横穴 前庭部	坏	口径97㎜ 器高39㎜	青色灰色 1㎜程度の白～黄の砂粒を含む 良好	底部外面にケズリの痕跡 底部内面ナデ その他は回転ナデ　½以上
SU-37	1号横穴 前庭部	坏	口径90㎜ 器高34㎜	青灰色　1㎜以下の砂粒含む 良好	立ちあがりは内傾し低い 回転ナデ
SU-38	1号横穴 前庭部	坏	口径91㎜ 器高34.7㎜	青灰色　細かな白い砂粒を含む 良好	立ちあがりは内傾し、やや低い 底部外側にケズリ痕　底部内側ナデ　他は回転ナデ　定形
SU-39	1号横穴 前庭部	坏	口径92㎜ 器高38㎜	乳灰白色 1.5㎜、あでの白砂粒を含む 良好	立ちあがりは内傾し、やや低い 底部内面ナデ その他は回転ナデ 底部外面切離しアト　完形
SU-40	1号横穴 前庭部	坏蓋	口径92㎜ 残高25㎜	内青色　外黄青色 1㎜以下の砂粒があるが、中には2㎜程度のものが少量残っていた 良好	かえりは内傾 外側ナデ　内側　回転ナデ
SU-41	1号横穴 前庭部	坏蓋	口径114㎜ 残高21㎜	内黒色土　外灰色(黄色っぽい) 1㎜以下の砂粒含む　良好	外側：上部削り　下部回転ナデ 内側：ナデ
SU-42	1号横穴 前庭部	坏蓋		灰褐色　小砂粒を含む 良好	低めに輪状つまみ　天井部内面ナデ　その他回転ナデ
SU-43	1号横穴 前庭部	坏蓋	残高15㎜	内青灰色　外黒灰色 1㎜程度の砂粒含む　良好	やや高めの輪状つまみ ナデ　½以下
SU-44	1号横穴 前庭部	坏蓋		青灰白色　2㎜までの砂粒を含む 良好	低い輪状つまみをもつ 回転ナデ
SU-45	1号横穴 前庭部	坏蓋	口径168㎜ 残高13㎜	明灰色 良好	かえりは厚い 回転ナデ　½以下
SU-46	1号横穴 前庭部	坏蓋	口径154㎜ 残高20㎜	明灰色　1㎜以下の砂粒含む 良好	かえりは厚く受部よりやや高い 回転ナデ　½以下
SU-47	1号横穴 前庭部	坏蓋	口径124㎜ 残高14㎜	明灰色　1㎜以下の砂粒含む 良好	かえりは厚い 回転ナデ　½以下
SU-48	21支群 1号横穴 前庭部	坏	口径138㎜	灰白色　細かな白い砂粒を含む 良好	内面に一部ケズリ 他は回転ナデ　½以下 口縁端部は下垂
SU-49	1号横穴 前庭部	坏	口径127㎜	青灰色　小砂粒を含む　良好	口縁端部は下垂 回転ナデ
SU-50	1号横穴 前庭部	Ⅲ		灰褐色　細かな砂粒を含む 良好	内面ナデ 外面回転ナデ
SU-51	1号横穴 前庭部	Ⅲ	底径88㎜	灰白色　白い砂粒を含む	½以下　内面ナデ 外面ケズリ痕をわずかに残す 比較的細かく高い高台
SU-52	1号横穴 前庭部	高坏	口径130㎜	暗灰色　2㎜までの砂粒を含む 良好	回転ナデ 口縁部の小柱は
SU-53	1号横穴 前庭部	高坏	口径124㎜	暗灰色　細かな白い砂粒を含む 良好	回転ナデ
SU-54	1号横穴 前庭部	高坏	底径87㎜	外面灰白色　断～内面赤褐色 白色の微砂粒を少量含む 不良　断～内面は完全に酸化炎焼成になっている	
SU-56	1号横穴 前庭部	椀	口径84㎜ 器高42㎜ 底径57㎜	青灰色 2㎜程度の白い砂粒を含む 良好	坏部はゆるやかに内湾し、口縁端部でわずかにくびれる。上げ気味の底尾端に低い高台
SU-57	1号横穴 前庭部	長頸壷	口径79㎜ 器高199㎜ 底径82㎜	灰白色　全面的に緑色～黒色に自然釉付着・白色の砂粒を多く含む 良好	坏底部外面にケズリの痕を残す 〃　内面ナデ　その他は回転ナデ　底部外面に何らかの工具によるナデ？ 表面一部に自然薬ほぼ完形 頸部は直線的に外傾高台をつける
H-2	1号横穴 前庭部	Ⅲ	口径161㎜ 器高34㎜	赤黄色　全面に赤色顔料使用 赤色で軟質の微砂粒を含む やや軟質	口縁やや外反気味 内外面ともヘラミガキか？
SU-58	1・2号 横穴前庭	坏蓋		内灰色　外黄灰色 1㎜以下の砂粒含む　良好	天井部外面ヘラ切り 天井部内面ナデ　その他回転ナデ
SU-59	2号横穴 前庭部	高坏	口径107㎜	灰褐色 内面と外面一部に自然釉薬 細かな砂粒を含む　良好	坏部はゆるやかに内湾し、口縁部でやや外反
SU-60	2号横穴 前庭部	高坏	口径87㎜ 器高43㎜ 底径50㎜	暗灰色 1㎜程度の白い砂粒を含む 良好	体部は比較的浅く、内湾気味に口縁部に至る。脚部は「ハ」の字に開く。重ね焼の痕跡あり　定形
SU-61		椀	口径129㎜ 器高53㎜ 底径76㎜	くすんだ青灰色 白色の小砂粒を少量含む 良好	見込み部分に小さくへら記号「×」 底部回転ヘラ切り反時計廻り

挿図番号 図版番号	出土位置	器種	法　量	色調・胎土・焼成	備　　考
SU-62	2号横穴 前庭部	甕		灰色　砂粒はほとんど含まない 良好	体部外面に緑褐色自然釉付着
SU-63	1・2号 横穴前庭	坏蓋	口径145㎜ 器高36㎜	灰白色 1㎜までの白い砂粒を少量含む 良好	天井部に宝珠つまみ 天井部外面にケズリ痕を残す 天井部内面ナデ　その他は回転ナデ　天井部内面にヘラ記号あり ½以上
SU-64	1・2号 横穴前庭	坏蓋	口径120㎜ 器高33㎜	青灰色　1㎜程の砂粒を少量含む ほか全体に白色の微砂粒を多く含む　良好	外面上部ケズリ痕を残す その他回転ナデ　内面にヘラ記号あり　宝珠状つまみをもつ
SU-65	1・2号 横穴前庭	坏蓋	口径112㎜ 器高17㎜	灰色　白色の砂粒を含む　良好	外面ケズリの痕を残す 内面回転ナデ 上面の一部に自然釉付着
SU-66	1・2号 横穴前庭	壷	底径82㎜	灰白色 1㎜以下の白い砂粒を含む 良好	½以下 底部外面のヘラケズリの跡ナデ？ その他回転ナデ
SU-146	1号横穴 前庭部	甕	口径460㎜	暗灰褐色　白色の微砂粒をわずかに含む　良好	
SU-67	3号横穴 前庭部	坏蓋	口径100㎜ 器高36㎜	暗青灰色　白い粒を多く含む 良好	外面に強いロクロ目 天井部はナデ　その他は回転ナデ 内面の赤色っぽい色は赤色顔料か？　完形
SU-68	3号横穴 前庭部	坏蓋	口径108㎜	暗灰白色　白と黒の粒を含む 良好	口縁部にわずかなくびれ 天井部内面ナデ その他は回転ナデ　½以下
SU-69	3号横穴 前庭部	坏	口径89㎜ 器高34㎜	青灰色 最大3㎜程度の白い粒を含む 良好	外面ケズリ　底面内面ナデ 他は回転ナデ　完形 立ちあがりは内傾し、低い
SU-70	3号横穴 前庭部	坏	口径86㎜ 器高36㎜	内面青灰色　外面淡茶灰色 表面に白っぽい粒を多量に含む 良好	立ちあがりは内傾し比較的低い 回転ナデ　底部外面にくし状のキズ　½以上
SU-71	3号横穴 前庭部	坏蓋	口径114㎜ 器高31㎜	青灰白色　細かい白い粒を含む 良好	宝珠状のつまみ 天井部外面にケズリの痕を残す 内面に小さなヘラ記号に見えるキズ　½以上
SU-72	3号横穴 前庭部	坏蓋	口径93㎜ 器高29㎜	暗青灰色　断面中心部は赤褐色 白色の微砂粒を含む 良好	宝珠状つまみ　天井部外面ケズリの痕をわずかに残す　天井部内面ナデ　その他回転ナデ
SU-73	3号横穴 前庭部	坏蓋	口径94㎜ 器高20㎜	暗灰色　黄色っぽい粒を少量含む 良好	天井部に宝珠つまみ 天井部にケズリ痕を残す 表面に自然釉薬　完形
SU-74	3号横穴 前庭部	坏蓋	口径90㎜ 器28㎜	外面茶灰色　内面青灰色 白っぽい粒を含む 良好	比較的小さな宝珠状のつまみをもつ　かえりは内傾　外面天井部にケズリ痕をわずかに残す 内面にはヘラケズリの跡？残す その他は回転ナデ　接合完形
SU-75	3号横穴 前庭部	坏	口径104㎜ 器高34㎜	暗青灰色　0.5㎜程度の白い粒 5㎜近い白い砂粒が少量入る 良好	底部は平坦　体部回転ナデ 底部は回転ヘラ切りか　½以上
SU-76	3号横穴 前庭部	坏	口径108㎜ 器高35㎜	暗青灰色　白っぽい微粒砂を含む 良好	口縁部はわかに外反気味 底部外面回転ヘラ切り　ケズリ痕をわずかに残す　底部内面ナデ 他は回転ナデ　½以上
SU-77	3号横穴 前庭部	坏	口径19㎜ 器高38㎜	青灰色　表面に黒色自然釉薬付着 1㎜までの黄色っぽい粒を含む 良好	底部外面にケズリ痕をわずかに残し切り離しあとに×ヘラ記号 底部内面ナデ その他は回転ナデ　½以上
SU-78	3号横穴 前庭部	坏蓋	口径160㎜ 器高29㎜	暗青灰色 良好	天井部に低い輪状つまみ　口縁端部は下垂　外面にケズリの痕を残す　天井部内面ナデ その他回転ナデ　½以上
SU-79	3号横穴 前庭部	坏蓋	口径146㎜ 器高22㎜	灰色　1.2㎜までの黒い粒を含む 良好	天井部に低めの輪状のつまみ 口縁端部は下垂　接合　½以上
SU-80	3号横穴 前庭部	低脚坏	口径120㎜ 器高38㎜ 底径66㎜	暗灰白色　白い砂粒を含む 良好	体部は内湾気味に口縁端部にいたる。脚部は開く　底部内外面ともナデ　坏部外面下方にケズリの痕を残す その他は回転ナデ　½以上
SU-81	3号横穴 前庭部	高坏		淡黄褐色 0.5㎜程度の粒を少し含む やや軟	「ハ」の字に開く脚部片 坏部内面ナデ　その他回転ナデ ½以下

挿図番号 図版番号	出土位置	器種	法　量	色調・胎土・焼成	備　　考
SU-82	3号横穴 前庭部	高坏	底部111㎜	灰褐色 白と黄色っぽい微粒砂を含む 良好	透かしをもつ 回転ナデ 脚部破片　½以下
SU-83	3号横穴 前庭部	高台 付坏	口径118㎜ 器高50㎜ 底径76㎜	暗青灰色（断面は暗赤褐色） 白っぽい粒を含む　良好	体部は内湾気味に伸び　底部外縁に内側に鋭い突起をもつ高台底部外面は回転ヘラ切り？　底部内面にナデ　その他は回転ナデ ½以上
SU-84	3号横穴 前庭部	壷	口径84㎜	暗灰色 0.5㎜程度の白い粒を含む 良好	注ぎ口あり　口縁部は外反気味に伸び端部は丸くおさめる 回転ナデ　口縁部　½以下
SU-85	3号横穴 玄室内	甕		青灰色 1㎜までの白っぽい粒を含む 良好	甕の破片 外面平行多き　内面同心円文 ½以下
SU-86	4号横穴 前庭部	坏蓋	口径99㎜ 器高39㎜	淡褐色　白い砂粒を含む やや軟質	接合½以上　天井部外面ヘラおこしの甕　他回転ナデ
SU-87	4号横穴 前庭部	坏蓋	口径99㎜ 器高37㎜	暗灰色 2㎜以下の白黒の砂粒を含む 良好	天井部外面ヘラケズリのあとナデ 天井部内面ナデ　他は回転ナデ 内面にヘラキズ　½以上
SU-88	4号横穴 前庭部	坏	口径83㎜ 器高32㎜	青灰色 1.5㎜までの白い砂粒を含む 良好	立ちあがりは内傾し低い　底部外面切り離しあと　底部内面ナデ 他は回転ナデ　接合½以上
SU-89	4号横穴 前庭部	坏	口径81㎜ 器高25㎜	暗青灰色 5㎜以下の白い砂粒を含む 良好	立ちあがりは内傾し低い　底部外面ケズリ痕を残す　底部内面ナデ その他は回転ナデ 表面に自然釉　ほぼ完形
SU-90	4号横穴 前庭部	坏	口径90㎜ 器高33.5㎜	青灰色　白い砂粒を少量含む 良好	½以下　立ちあがりは内傾しやや低い　回転ナデ
SU-91	4号横穴 前庭部	坏蓋	口径91㎜ 器高23㎜	外面灰白色　内面青灰色 1㎜までの白い砂粒を含む 良好	天井部に宝珠状のつまみを有する　天井ぶ内面にナデ　口辺部外面にわずかにケズリの痕を残す その他は回転ナデ　ほぼ完形
SU-92	5号横穴 前庭部	坏蓋	口径108㎜	青灰色 白っぽい砂の微粒を少し含む 良好	底部外面にケズリの痕をわずかに残す　回転ナデ ½以下
SU-93	5号横穴 前庭部	坏蓋	口径112㎜	暗灰白色 1㎜までの白い粒と黒い粒を含む 良好	天井部外面ナデ　ヘラによる「＃」状の線（記号？）が入る その他は回転ナデ　½以下
SU-94	5号横穴 前庭部	坏蓋	口径103㎜ 器高37㎜	暗灰白色　0.5㎜程度の白い粒	天井部外面ケズリ　天井部内面 その他は回転ナデ　½以上
SU-95	5号横穴 前庭部	坏蓋	口径104㎜ 器高37㎜	灰褐色 0.1～1㎜程度の砂粒を含む やや軟質	口縁部でわずかにくびれる 天井部外面ヘラキズあり 天井部内内面ナデ その他は回転ナデ　½以上
SU-96	5号横穴 前庭部	坏蓋	口径91㎜ 器高32㎜	灰白色 0.3㎜程度の白い粒を含む 良好	天井部外面ケズリ　ヘラ記号あり（×）天井部内面ナデ その他は回転ナデ　½以上
SU-97	5号横穴 玄室内	坏蓋	口径100㎜ 器高35㎜	灰色　白い砂粒を含む　良好	平坦な天井部　天井部外面に切り離しのヘラキズ　天井部内面ナデ その他は回転ナデ 表面に自然釉薬　½以上
SU-98	5号横穴 前庭部	坏	口径102㎜	青灰色　白い粒を少量含む　良好	立ちあがりは内傾くしやや低い 回転ナデ　½以下
SU-99	5号横穴 前庭部	坏	口径105㎜	灰白色　5㎜程度の白い粒を含む 良好	立ちあがりは内傾し低い 回転ナデ　½以下
SU-100	5号横穴 前庭部	坏	口径96㎜ 器高38㎜	外面暗灰色　内面青灰色 0.5㎜程度の白い粒を含む　良好	立ちあがりは内傾しやや低い 回転ナデ　½以上
SU-101	5号横穴 前庭部	坏	口径84㎜ 器高36㎜	青灰色 1㎜程度の白い粒黒い粒を含む 良好	立ちあがりは内傾し低い 底部外面にケズリ痕　内面はナデ その他は回転ナデ　底部内面にヘラ記号4　接合完形
SU-102	5号横穴 前庭部	坏	口径90㎜ 器高34㎜	淡灰色　白色の砂粒を少量含む 良好	立ちあがりは内傾し低い　底部外面にヘラキズ、ケズリ痕をわずかに残す　底部内面ナデ　その他は回転ナデ　SU-98とペアか？ 接合完形
SU-103	5号横穴 前庭部	坏蓋	口径140㎜ 器高20㎜	外面淡黄褐色　内面青灰白色 白黒の微砂粒を含む　良好	天井部に輪状のつまみ 天井部内面はナデ 天井部外面にケズリの痕を残す その他は回転ナデ　½以下
SU-104	5号横穴 前庭部	坏蓋	口径102㎜ 器高29㎜	暗灰色　1㎜程度の白い粒を含む 良好	低めの宝珠状のつまみをもつ 天井部外面にケズリ痕を残す 天井部内面はナデ その他は回転ナデ　½以下

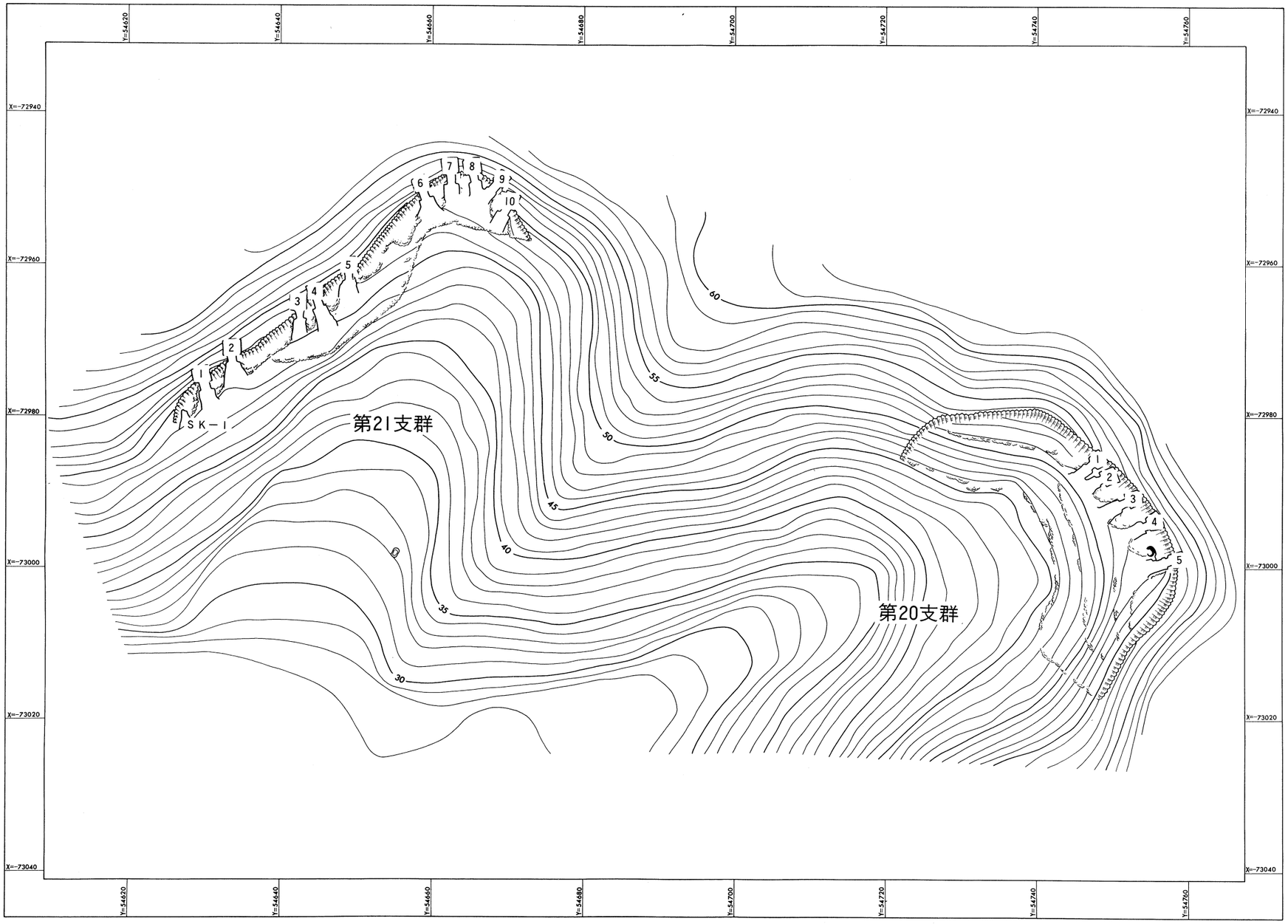
挿図番号 図版番号	出土位置	器種	法　量	色調・胎土・焼成	備　　考
SU-105	5号横穴 前庭部	坏	口径88㎜ 器高31㎜	灰白色　白い粒を少し含む　良好	口縁部はわずかにくびれる 底部外面ヘラ切り　底部内面ナデ その他は回転ナデ　完形
SU-106	5号横穴 前庭部	坏	口径86㎜ 器高25㎜	暗青灰色　表面に自然釉薬 3㎜程度の砂粒（ガラス質）など多くの粒を含む　良好	平坦な底部より丸味をもってたちあがる　底部外面ヘラケズリ痕 坏部の下方にケズリ痕？ 底部内面はナデ　他は回転ナデ ½以上
SU-107	5号横穴 前庭部	坏	口径91㎜ 器高27㎜		平坦な底部　底部は回転ヘラ切り その他は回転ナデ　接合完形
SU-108	5号横穴 前庭部	高坏	口径76㎜ 器高78㎜ 底径58㎜	暗灰色　白色の微砂粒を含む 良好	4方向にスカシ 回転ナデ
SU-109	5号横穴 玄室内	高坏	底径90㎜	暗青灰色 1㎜以下の白っぽい粒を含む 良好	透かしあり　回転ナデ 脚部　½以下
SU-110	5号横穴 前庭部	高坏	口径139㎜	暗青灰色 1㎜程度の白い粒を含む　良好	回転ナデ　½以下
SU-111	5号横穴 前庭部	高½	口径120㎜	暗灰色 白っぽい1㎜程度の粒を含む 良好	口縁部にわずかなくびれがあり器壁がうすい　外面回転ナデ 内面ナデ　½以下
SU-112	5号横穴 前庭部	高台 付坏	口径79㎜ 器高43㎜ 底径42㎜	灰白色～青灰色 白色の砂粒を少量含む　良好	坏部は直線的に外傾 高台貼り付け 坏部下方外面にケズリ その他回転ナデ
SU-113	5号横穴 前庭部	壷？	口径68.5㎜	暗青灰色 0.5㎜程度の白い砂粒を少量含む 良好	口縁端部でわずかに内側にくびれる　回転ナデ 口縁部小片　½以下
SU-114	6号横穴 前庭部	坏		灰白色　1㎜以下の砂粒含む 良好	底部外面回転ヘラ切り 底部内面ナデ　その他回転ナデ
H－3	6号横穴 前庭部	椀		淡赤褐色　ガラス質微砂粒含む 良好	底部外面に強いナデ 底部糸切痕アリ その他回転ナデ
P－1	6号横穴 前庭部	椀	口径106㎜ 器高79.5㎜ 底径46㎜	明黄褐色　細かな黒い粒を含む 良好	カンニュウ（價入）あり （½以上）
SU-115	7号横穴 前庭部	坏蓋	口径80㎜ 器高20.5㎜	灰褐色　小砂粒を含む　良好	外面ケズリの痕を残す　天井部内面ナデ　その他回転ナデ つまみのつくものか？
SU-116	21支群 7号横穴 玄室内	坏？		明青灰色　白色の小砂粒を含む 良好	外面何か貼り付けたあと？ 内面ナデ
H－4	8号横穴 前庭部	小皿	口径85㎜ 器高20㎜ 底径58㎜	淡褐色　細かな黒粒を含む　良好	小片
SU-117	9号横穴 前庭部	高坏	164㎜	暗灰色 1㎜までの白い砂粒を含む　良好	回転ナデ
SU-118	10号横穴 玄室内	坏	口径98㎜ 器高35㎜	青灰色　砂粒を含む　良好	平坦な底部　ナデ ややゆがみあり　完形(欠けあり)
SU-119	10号横穴 玄室内	高坏	口径166㎜	灰白色 ガラス質の微砂粒を多く含む 良好　やや軟質	坏部内面ナデ　その他回転ナデ すかしは2方向か
H－5	10号横穴 前庭部	小皿	底径62㎜	明赤灰色　細かい砂粒を含む 良好	底部は平　全面磨滅
P－2	10号横穴 前庭部	擂鉢	口径282㎜ 器高116㎜ 底径106㎜	赤褐色　1㎜程度の黒い粒を含む 良好	体部は内湾して立ちあがり口縁をおりまげる　底部としっかりした高台をけずる　内面くし目模様31㎜×10本口縁部内面にもくしが多少あたっている　外面下方にケズリ　他はヨコナデ 備前焼　注ぎ口不明
SU-120	21支群	坏蓋	口径110㎜ 残高24㎜	明灰色　1㎜程度の砂粒含む 良好	外側上部ヘラ削り 後は回転ナデ ½以下
SU-121	21支群	坏蓋		青灰色　白色の微砂粒を含む 良好	外面上部ケズリ その他ナデ
SU-122	21支群	坏蓋		内面・外面暗青灰色　断面・暗赤灰色　白色の小砂粒を多く含む　良好	天井部外面ケズリ その他ナデ
SU-123	21支群	坏蓋	口径90㎜ 残高24㎜	灰色　1㎜以下の砂粒含む　良好	回転ナデ ½以下
SU-124	21支群	坏	口径87㎜	明灰色　白い小砂粒を含む　良好	立ち上りは内傾し、非常に低い 口縁部小片 ½以下

挿図番号 図版番号	出土位置	器種	法　量	色調・胎土・焼成	備　　考
SU-125	21支群	坏蓋	口径119㎜ 残高20㎜	灰色　1㎜以下の砂含む　良好	かえりをもつ　内傾　回転ナデ
SU-126	21支群	坏蓋	口径100㎜ 残高16㎜	内明灰色　外灰色（黄色っぽい） 1㎜以下の砂粒含む　良好	かえりをもつ　外側上部ケズリ その他回転ナデ
SU-127	21支群	坏蓋	口径112㎜ 残高19㎜	外茶褐灰色　内明灰色 1㎜以下の砂粒含む　良好	かえりをもつ　回転ナデ
SU-128	21支群	坏蓋	残高24㎜	黄茶灰色　1㎜以下の砂粒含む 良好	輪状つまみをもつ 外面はヘラ削りの後回転ナデ その他はナデ
SU-129	21支群	坏蓋	口径94㎜	内暗灰色　外緑灰色 1㎜程度の砂粒含む	かえりをもつ　外側上部ケズリ 下部ヘラケズリの後回転ナデ 内側回転ナデ
SU-130	21支群	坏蓋	口径104㎜	外面暗灰色　内面青灰白色 2㎜までの粒を含む　良好	かえりをもつ　回転ナデ
SU-131	21支群	坏蓋	口径80㎜	外側先端部分黒色　他は明灰色 密　良好	外側面ヘラ削りの後 その他回転ナデ
SU-132	21支群	坏蓋	口径90㎜	灰褐色　1㎜程度の白色の砂をわずかに含む　良好	かえりをもつ 天井部外面ケズリ その他回転ナデ
SU-133	21支群	坏蓋	口径80㎜ 器高19㎜	白灰色　1㎜程度の砂粒を含む 良好	外側上部ナデ　外側側面、内側側面回転ナデ　磨耗が激しい ½以下
SU-134	21支群	坏	底径84㎜ 残高14.5㎜	明灰色　1㎜前後の砂粒含む 良好	坏部上部ナデ　その他回転ナデ 高台部を含む小片
SU-135	21支群	高坏	底径82㎜	外面暗青灰色　内面～断面明青灰色　白色の小砂粒を少量含む 良好	スカシをつける　1～2方向か 回転ナデ
SU-136	21支群	高坏	底径110㎜ 脚径	暗灰色　1㎜以下の砂粒含む 良好	脚部小片　回転ナデ ½以下
SU-137	21支群	高坏	底径66㎜	青灰色～暗灰色 白色の砂粒を含む　良好	内湾する坏部 回転ナデ
SU-138	21支群	高坏	残高54㎜	明灰色　1㎜前後の砂粒を含む 良好	坏部内面ナデ　その他回転ナデ すかしをもつ　2方向か？
SU-139	21支群	高坏		内部青灰色　灰褐色 2㎜までの砂粒を含む　良好	坏部内面ナデ 脚部内面ヘラによるかき取り その他　回転ナデ
SU-140	21支群	高坏		こげ黄茶色　1㎜以下の砂粒含む 良好	外側側面は回転ナデ その他はナデ
SU-141	21支群	壷	底径86㎜ 脚径 残高23㎜	灰色　一部側黒色	脚は外傾「ハ」の字に開く 底部外面ヘラ切りの後ナデ 底部内面ナデ　その他回転ナデ
SU-142	21支群	甕	口径112㎜	灰色　外面は緑灰色 白色の砂粒をわずかに含む　良好	内面ナデ　外面ヨコ方向のナデ 口縁部小片
SU-143	21支群	甕	口径173㎜	暗灰白色 白色の小砂粒をわずかに含む 良好	口縁内面を中心に暗緑色自然釉多量含む 外面の一部は竹管元か その他回転ナデ
SU-144	21支群	甕	口径181㎜	灰白色～青灰色　口縁部に暗緑色自然釉付着　白色の小砂粒をわずかに含む　良好	外反する口縁部 口縁部内外面回転ナデ 外面平行多き 内面同心円押当具痕
SU-145	21支群	瓶	口径119㎜	暗青灰色～茶褐色 0.5㎜以下の砂粒を含む　良好	口縁部は外反し、端部は外傾気味の面をなす 口縁部内外面回転ナデ 外面平行多き 内面円弧押当具痕
Y-1	21支群	壷？		外面明赤褐色　内～断面褐色～灰褐色1～2㎜の白色の砂粒を非常に多く含む　やや軟質か	内面ハケ因 外面に浅く細い沈線
H-6	21支群	小皿	口径111㎜	淡褐色　細かな黒い粒を含む 良好	口縁部わずかに外反気味 外面ナデ　内面は磨滅 口縁部小片　½以下
H-7	21支群	小皿	底径40㎜	明赤褐色　褐色の砂粒を含む 良好	調整不明
P-3	21支群	鉢？	口径316㎜	表面灰褐色　断面明灰色 0.5㎜ほどの砂粒を多く含む 瓦質	口縁端部はりつけ 口縁外面下部未調整 その他ヨコ方向のナデ
M-3	1号横穴 前庭部 前庭部	鉄鏃	残存長148㎜		

挿図番号 図版番号	出土位置	器種	法　量	色調・胎土・焼成	備　　考
M-4	1号横穴	鉄鏃	残存長143㎜		木質あり
M-5	1号横穴 前庭部	鉄鏃	残存長37㎜		
M-6	1号横穴 前庭部	鉄鏃	残存長46㎜		
M-7	1号横穴 前庭部	鉄鏃	残存長51㎜		
M-8	1号横穴 前庭部	鉄鏃	残存長56㎜		
M-9	1号横穴 前庭部	鉄鏃	残存長86㎜		
M-10	1号横穴 前庭部	鉄鏃	残存長57㎜		
M-11	1号横穴 前庭部	鉄鏃	残存長64㎜		
M-12	1号横穴 前庭部	鉄鏃	残存長59㎜		両端がやや太く、わずかにねじれている
M-13	1号横穴 前庭部	鉄鏃	残存長66㎜		
M-14	1号横穴 前庭部	鉄鏃	残存長69㎜		
M-15	1号横穴 前庭部	鉄鏃	残存長26㎜		
M-29	3号横穴 玄室内	直刀	残存長134㎜		
M-30	3号横穴 玄室内	直刀	残存長92㎜		
M-31	3号横穴 玄室内	直刀	残存長50㎜		
M-32	3号横穴 玄室内	直刀	残存長39㎜		
M-33	3号横穴 玄室内	直刀	残存長107㎜		
M-34	4号横穴 前庭部	直刀	残存長94㎜		
M-35	4号横穴 前庭部	直刀	残存長92㎜		
M-36	4号横穴 前庭部	鉄鏃	残存長47㎜		
M-37	4号横穴 前庭部	鉄鏃	残存長40㎜		
M-38	4号横穴 前庭部	鉄鏃	残存長49㎜		
M-39	4号横穴 前庭部	鉄鏃	残存長42㎜		
M-40	5号横穴 玄室内	鉄鏃	残存長47㎜		
M-41	4号横穴 前庭部	鉄釘	残存長83㎜		

挿図番号 図版番号	出土位置	器種	法　量	色調・胎土・焼成	備　　考
ST－4	7号横穴 前庭部	砥石		青灰色～暗緑色の石材	使用面5面以上
ST－5	21支群	石鏃			安山岩製石鏃
J－2	11トレンチ	深鉢		茶褐色 3㎜までの砂粒を多く含む　良好	外面条痕か？内面ナデ 口縁部小片
J－3	11トレンチ	深鉢		淡茶白色 2㎜までの砂粒を多量に含む 良好	外面条痕　½以下
J－4	11トレンチ	深鉢		外面暗茶褐色　内面黒褐色 1㎜程度の砂粒を多く含む　良好	外面条痕あり　内面ナデか ½以下
Y－2	11トレンチ	甕	底径65㎜	外面淡褐色　内面灰褐色 小砂粒を含む　良好	外面ヘラミガキ　その他ナデ 平底胴部に向かってやや開く
H－8	11トレンチ	甕	口径126㎜	淡灰褐色 1㎜前後の砂粒を多く含む　良好	単純　口縁　外反 口縁部ナデ　外面ケズリの痕をわずかに残す？ 内面ヘラケズリ　口縁部小片
H－9	11トレンチ	甕	口径 149.5㎜	外面黒褐色　内面灰褐色 小砂粒を多く含む　良好	複合縁部は外反 肩部にクシ描き　沈線文 体部内面ヘラケズリ 口縁部外面ヨコナデ　½以下
H－10	11トレンチ	甕	口径176㎜	淡褐色　小砂粒を多く含む　良好	複合口縁部は外傾 口縁部小片　½以下　ナデ
H－11	11トレンチ	甕	口径158㎜	灰褐色　白色小砂粒を多く含む 良好	口縁部は「く」の字に屈曲し、 やや内湾気味に端部に至る 口縁部ヨコナデ　内面ナデ 外面1㎝の間に5本程度のハケメ(½以下)H－12と同個体か？
H－12	11トレンチ	甕	口径156㎜	灰褐色　白色小砂粒を多く含む 良好	口縁部（H－11）と同個体か？
H－13	11トレンチ	高坏		淡橙褐色 1㎜程度の砂粒を含む　良好	※坏部と脚部の境 ナデ　½以下
ST－6	11トレンチ	石斧		緑灰色の石材を使用	刃部に打痕がわずかに見られる 外面ともよく磨かれ削痕は見えない
M－42	8号横穴 玄室内	古銭	残存長25㎜		
M－43	8号横穴 玄室内	古銭	残存長25㎜		
M－44	8号横穴 玄室内	きせる	残存長36㎜		

第59図　上塩冶横穴群第20・21支群遺構配置図（１：600）



Ⅴ　第21支群第10号横穴墓出土金糸について

第21支群第10号横穴墓からは、金糸が出土している。玄室内埋土をふるいに掛け検出したもので、総量は、0.46ｇであった。掘りだした埋土中から出土したもので、厳密な出土位置は分からないが、およそ、玄室内東側のベッド上、中央付近と思われる。

金糸は、薄い帯状にした金によりを掛け、巻いていった形状をしており、中空で、断面円形の金糸を作り出している。太さは約0.3㎜前後で、長さは、微細な砕片から、長いもので15㎜前後のものまである。この金糸を単位とし、コイル状の構造を造りだしたものが何点か認められる。

古墳時代の金糸に関しては、現在全国で９例を把握している。

大阪府高槻市の阿武山古墳は、直径約82ｍの円墳で、花崗岩と磚で築かれた石棺式石室を持っている。京都大学地震観測所敷地内にあるこの古墳は、昭和９年に石室が発見され、棺内の遺体の保存状況が非常に良好であったことと、玉枕をした飛び抜けた貴人と考えられること、三島郷が藤原氏ゆかりの地であること等から、藤原鎌足の墓ではないかと言う説が出され、注目された。

ここで出土した金糸は、報告書によると(註1)、「遺体の頭部から肩部にわたって、やや多量の金糸が遺存していたのと、肩甲骨の上にのっていた樹皮の上にも金糸が遺存していた。それは、端が鍵手状に折り曲げられていた他は、定型をなさず、織物や総飾りではなく、単に納骨のときの飾りとして置かれたものかと推測されている。」となっている。金糸については、厚さ約0.03㎜、幅0.22～0.64㎜の金箔を螺旋状に巻いた中空のもので、もと芯糸があったと考えられており、右巻きらしい。現在６本が保存されていると言うことである(註2)。この古墳では、周堀底から７世紀前半頃に位置付けられる須恵器が出土しており、７世紀代の古墳と考えられている(註3)。

大阪府南河内郡河南町の塚廻古墳も石棺式石室を持つ終末期古墳である。墳丘規模及び墳形は、既に付近が水田になっており確認されていないが、主体部は全長7.5mの花崗岩切り石による石棺式石室である。緑釉陶棺や漆塗籠棺の破片が見られる他、金象嵌鉄刀、七宝銀製飾金具、ガラス製玉類等豪華な副葬品を持っている(註4)。

金糸は、羨道付近を中心に、10本が出土している。薄い金箔を細く切り、ラセン状に巻き糸としたもので、太さ0.3～0.5㎜、最長のもので長さ44㎜を測る。右巻きと左巻きの両者がある。実見した４本は、全て右巻きで、中空の線状になっていた。各金糸は曲線を描くものが多く、ちぢれたようになったものも見られた。

他にコイル状に巻かれた金線（ラセン状金線）が出土している。太さ約0.3㎜の金線を内径約３㎜のコイル状に10～13回転巻いたもので、左右両巻きが見られた。

この古墳は、追葬の形跡がなく７世紀第３四半期と考えられている。

加古川工業用水ダム古墳群の池尻15号墳は、兵庫県加古川市にある円墳で、径約35ｍを測る。全長15ｍにも及ぶ横穴式石室を主体部とし、金銅製の馬具や三輪玉等豊富な副葬品を持っている(註5)。

金糸は、絡み合った形で多量に出土しており、金糸の太さは0.5㎜ぐらいとされている。

この古墳は、追葬の形跡があり、使用年代は、６世紀初葉から７世紀末と比較的長く見られている。

この他、近畿地方では、三重県志島10号墳からの出土が知られているが、詳細は確認していない。

千葉県木更津市の上総金鈴塚古墳は、全長95mの復元案がある大型の前方後円墳で、地籍図から周溝を巡らせると考えられている。主体部は、小型の切り石を使用した狭長な横穴式石室で、組み合わせ式の箱型石棺が納められる他、羨道近くに木棺を乗せたと考えられる板石が検出されている。被葬者は3人と推定されており、6世紀末から7世紀中頃まで追葬が行われたらしい。(註6)

副葬品には、鏡、玉類、環頭大刀をはじめとする15本にも及ぶ大刀類、馬具、金銅製飾履の他、金鈴があり、このことから、金鈴塚と呼ばれるようになったらしい。

金糸は、まさしく多量に出土している。太さ0.2〜0.5㎜で実見したものは右巻きであった。多くは金色を保っていたが、黒変しているものも多く、金以外の金属の割合が、比較的高いことが想像される。

瓢塚40号墳は、千葉県成田市にある、東西14m、南北11mの方墳で、幅6mの造り出しを持っている。(註7)主体部は雲母片岩の板石による組み合わせ式の箱形石棺で、この地方ではごく普通の構造・規模のものという。副葬品には、銀象嵌大刀、木製把頭、金銅鈴、馬具と見られる鉄製品等の他、金銅飾板が見られる。

金糸は、総数48本で、その総延長は約75㎝と言う。実見したものは太さ0.2〜0.3㎜の右巻きであった。伴出遺物は金銅飾り板で、これは、金銅の薄板造りで、列点文が施されており、冠の類である可能性が指摘されている。金糸は、冠の装飾として用いられた可能性も言われてはいるが、金糸の出土位置が、被葬者の足元付近と推定されていることから、明確には、用途は分からない。(註8)

瓢塚40号墳は、この地方での平均的な規模の終末期古墳であるが、特徴的な副葬品を納めていることが注目される。築造時期に付いては、7世紀の初葉から前葉と考えられている。

この他、関東地方では、直径30mの円墳である群馬県高崎市の石川稲荷塚古墳からの出土例が言われているが、詳細は不明である。

上記7例はいずれも古墳からの出土であったが、山陰地方では、横穴墓から出土している。鳥取県西伯郡西伯町のマケン堀19号横穴墓玄室内からは、断片的なものを含め、14本の金糸が確認されている。(註9)

マケン堀横穴墓群は、35基の横穴墓が検出されている。軟質花崗岩に掘削された横穴墓群で、後背墳丘を伴う、6世紀後半から7世紀中葉の横穴墓群である。玄室形態は、ほとんどが断面三角形の妻入りで、上塩冶横穴群と異なり、狭長な前庭部を持つ。出土遺物は、須恵器をはじめ、鉄鏃・鉄刀・刀子・玉類・耳環等が出土しているが、特に卓越したものは見られない。

金糸は、Ⅱ—C支群19号横穴墓から出土している。19号横穴墓は、後背墳丘である6号墳北側斜面に位置し、20・21号横穴墓と供に小支群を形成する。天井部は崩壊していたが、断面三角形と考えられ、平面プランは、ややいびつな正方形を呈している。玄室右奥側に人骨が集積されており、人骨の下から金糸が検出されている。この他、ふるいで検出されたものも含め、14本となった。

金糸は、厚さ0.01㎜、幅0.4〜0.5㎜の板金を太さ0.3㎜の中空に巻いたもので、1㎝間に18〜20回転右巻きに巻かれている。比較的長い金糸を見ると、曲線を描いているものもあり、刺繍するか縫いつけたものと推定されている。14本全てを加えると総延長は、37㎝となる。

全国での出土例を見ると、ほとんどが終末期の首長墓クラスの古墳であり、卓越した出土遺物の中の一つであることが分かる。ところが山陰地方では、横穴墓の出土であり、マケン堀横穴墓群での例にある通り、小地域の首長墓であるとも思えない。金糸そのものの製作過程については、上記各遺跡の報告で推定されてはいるが、いずれの場合を見ても高度な技術を要すると想像されるもので、どこで製作され、どのような経路で入手できたのか、不明な点ばかりである。マケン堀19号横穴墓の被葬者も含め、山陰の横穴墓の被葬者が、なぜ、これだけの貴重品を入手し得たのか、今回は言及できない。

金糸そのものの希少性を含め、多くの問題を抱えてはいるが、今回は事実報告と、類例の照会に今後の調査・研究に期待したい。

註1　「阿武山古墳」『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告第7輯』　大阪府教育委員会　1936年

註2　樋口隆康「阿武山古墳の金糸を巡って」『橿原考古学研究所論集　第九』　1988年

註3　「阿武山古墳」『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告第7輯』　大阪府教育委員会　1936年他

註4　北野耕平・冨賀　「大阪府平石塚廻古墳」『日本考古学年報32』1982年

『飛鳥時代の古墳』　奈良国立文化財研究所飛鳥資料館　1979年

註5　『印南野』　加古川市教育委員会　1965年

『日本の古代遺跡3　兵庫南部』　保育社　1984年

註6　『上総金鈴塚古墳』　千葉県教育委員会　1951年

註7　『公津原』　千葉県企業庁　1975年

註8　安藤鴻基「千葉県成田市瓢塚40号墳の資料吟味」『千葉県立房総風土記の丘年報13』1990年

註9　『マケン堀古墳群　北福王寺遺跡』　西伯町教育委員会　1990年

Ⅵ まとめ

1．遺構について

横穴墓以前の遺構

第20支群では、縄文土器・太型蛤刃石斧が、第21支群では石鏃が出土しているが、横穴墓以前と考えられる遺構は、検出できなかった。横穴墓に伴わない遺構としては、ＳＫ－１が考えられるが、土層堆積状況から横穴墓より新しい時期の遺構と考えられる。縄文・弥生時代の遺構の可能性としては、第20支群直前の平坦面が考えられるが、横穴墓造成地に削平されているのだろうか。横穴墓群下方の第11トレンチでは、包含層中より縄文・弥生土器が出土しているが、これらの遺物が、横穴墓付近からの流入とは思えず、さらに南の谷奥からのものと思える。

横穴墓の構造

第21支群の横穴墓は、その全てが四注式妻入りであった。これは、調査前から予想されていたことであり、上塩冶横穴群では四注式妻入りが多いという一般的に言われていた通りの結果であったが、第20支群についてはその内の２基で平入り構造が見られた。各横穴墓の時期差について出土遺物で言及することはできない。

全て盗掘を受けており、また、封土の失われている上塩冶横穴群第20・21支群に於いて、横穴墓の構築順序を探ることはほぼ絶望的である。その中で、第21支群では、第８号横穴墓と第９号横穴墓の前庭部に切り合い関係が見られた。第６～10号横穴墓の小支群を見ると、更に第６～８号横穴墓がほぼ主軸を等しくし、第９・10号横穴墓の主軸が近い様に見える。明確な切り合い関係こそ見えないものの、第10号横穴墓の前庭部は第８号横穴墓の干渉を受けているように見える。こうした仮定が全て正しかった場合、第21支群の東小支群では、第10号横穴墓が最初に構築され、続いて第９号、第８号の順に造られたのではないだろうか。

閉塞方法

第20支群では、その全ての横穴墓で、羨門付近に自然石を積んだ状態が見られ、自然石を積んで閉塞していたと考えられる。これに対し、第21支群では、第１～５号横穴墓で、切り石が残存しており、切り石によって閉塞していたことが確認された。第６～10号横穴墓では、閉塞石は残存していなかったものの、玄室内に礫が散在しているものが多く、第20支群と同様に、自然石を使用していた可能性がある。

横穴墓の中近世での使用

第21支群第７・８・10号横穴墓に見られる壁面の掘り込みは、その形から灯明を置く機能が考えられる。これらの横穴墓では、いずれも土師器小皿が出土しており、灯明を置いた可能性は、有力視できる。21支群第８号横穴墓では、回転糸切り底を有す土師器碗（Ｈ－４）が出土している。土師器小皿については、時期の検討できないが、Ｈ－４は回転糸切り底を有し、まっすぐに延びる体部が、口縁部直前でわずかに外反し、器高が高いという特徴から10～13世紀代と考えられる。現状では、閉塞

石がまったく無いために昼間は十分に明るく、灯明の必要は感じられないが、閉塞石が残存していた時点、もしくは、夜間の使用が考えられ、祭祀的な使用状況が想像される。中世の比較的早い時期の土器が横穴墓内で出土する例は、大田市、仁摩町など、石見東部に於いて類例が見られる[註1]がいずれもその時期については、言及されていない。これらの横穴墓では、壁面の窪みは確認されていない。

松江市の中竹矢遺跡第３調査区５号穴では、横穴墓玄室内から更にトンネルを掘り、地中に部屋を造った施設が確認されている[註2]。ここでは、明確に煤の付着が見られ、灯明を置いたことは、確実である。中竹矢遺跡では、中世関東で行われていた祭祀である、「矢倉」の存在を紹介するにとどめている。この遺構については、近世初頭の年代観が与えられているが、隣接地には、平安期の建物跡も検出されている。

２．遺物について

上塩冶横穴群第20・21支群の横穴墓は、全て盗掘を受け、開口していたため、出土した遺物が全ての遺物であるとは思えない。そうした限られた資料の中で横穴墓の時期を推定することは誠に心苦しい限りであるが、断片的に言えることを考えてみたい。

古墳時代の遺物

上塩冶横穴群第20・21支群出土の須恵器は、基本的にはＴＫ217併行期のものに限られ[註3]、ＴＫ209併行期のものは含まない。

（１）具体的には、坏では、口縁内面のかえりが高く直立するものは見られず、最も古いと考えられるもので、かえりが直立し、口縁端部よりわずかに高くなるもの（ＳＵ―36等）がある。この段階の遺物は、上塩冶横穴群第20・21支群では、きわめて少ない。

（２）次の段階のものとしては、かえりが内傾する坏（ＳＵ―69等）と、坏と蓋が逆転する（ＳＵ―104等）時期のものである。ＳＵ―69では、かえりが非常に小さくなり、内傾して高さを持たない。これに組み合うと思われる蓋では、ケズリの範囲が極端に狭くなり、全体に丸みを帯びたプロポーションになっている。また、ＳＵ―104では、蓋と身が逆転し、擬宝珠状つまみを備える。比較的器高が高く丸みを帯びたプロポーションである。また、ＳＵ―５等の様に、プロポーションがほぼ同様で、輪状つまみを持つものが見られ、擬宝珠状つまみも、輪状つまみも時期差は無いものと思える。SU-2のようなつまみの無い蓋も、この段階のものと思われる。

（３）次の段階としては、蓋のかえりが極端に小型化する段階である。この段階に該当するものは、破片が多く、断片的な情報から想像する。ＳＵ―45～47等、口縁部の小片となっているものが典型的なものと考えられるが、近いものとして、ＳＵ―103が挙げられる。口縁端部の返りは極端に小型化し、頂部が平坦になり、体部中央で、屈曲して口縁に至るプロポーションを持つもので、輪状つまみを持つものと思われる。

（４）上塩冶横穴群第20・21支群での最後の段階としては、口縁内面のかえりを喪失する段階で、ＳＵ―78等がある。輪状つまみは、小型化し、断面では、小さな突起となって見える。全体に器高が低く、頂部の平坦面から口縁部近くまで、緩やかに屈曲する。口縁端部は、折れ曲がりかえりを持たない。これらの蓋に組み合う坏としては、ＳＵ―83等、低い高台を持つものであ

ろう。

上記４段階は、およそ飛鳥Ⅰ～Ⅴ期に含まれるものと思われ[註4]、実年代としては、７世紀初頭から末の年代が考えられる。

中世の遺物

第21支群第６号横穴墓では、土師器坏が出土している。底部に回転糸切り痕を残し、高台を持たず、体部が直線的に立ち上がる。出雲地方では、回転糸切り技法の使用開始がきわめて早く、丹塗りの土師器に回転台成形、糸切りの使用が見られ[註5]、中世には、同様の技法が続いている。伯器国庁等での例を見ると、10世紀前半頃から回転糸切り底が出現するようである[註6]。この頃の坏類は、器高に対し、底部が広いものが多く、13世紀頃にかけて徐々に底径が小さくなって行くようで、Ｈ―４とほぼ同様の器形を持つものとしては、米子市の青木遺跡ＨＳＸ―69辺りが近いものと思われる。青木遺跡ＨＳＸ―69[註7]は、勝間田産と見られる須恵器甕と共伴しており、13世紀頃と考えられる。

上塩冶横穴群第20・21支群は、７世紀初頭に構築が始まり、７世紀末まで追葬が行われたと思われる。その後、中世に何らかの形で再利用され、付近は、近世以後、開墾の手が入って行ったようである。今回の調査では、横穴墓の具体的な構築方法に付いて確認することは出来なかった、また、盗掘により、追葬の具体的状況を確認することもできなかった。これらのことを今後の課題としたい。将来、上塩冶横穴群の他の支群の発掘調査によって横穴墓のみの構築順序に留まらず、支群単位での時期、性格が解明されることを期待する。

註１　『大田市松田谷横穴群』　島根県教育委員会　1982年
『諸友大師山横穴群』　大田市教育委員会　1983年
『仁摩健康公園造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』　仁摩町教育委員会　1989年

註２　『一般国道９号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅹ』　島根県教育委員会　1992年

註３　古墳時代の須恵器に関しては、以下の報告、論文を参考にした。
『高広遺跡発掘調査報告書』　島根県教育委員会　1984年
柳浦俊一「出雲地方の須恵器生産」　『山陰考古学の諸問題』　1983年
大谷晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」　『島根考古学会誌　第11集』　1994年
『都城の土器集成』　古代の土器研究会編　1992年

註４　註３文献を参考にした。

註５　武田恭彰「中国地方に於ける回転台土師器の様相」『第12回中世土器研究集会報告資料』　1993年

註６　『伯耆国庁跡発掘調査概報（第４次）』　倉吉市教育委員会　1976年
『伯耆国庁跡発掘調査概報（第5・6次）』　倉吉市教育委員会　1978年
橋本久和「山陰の古代・中世土器の概要」　『鳥取埋文ニュースNo36』　1993年

註７　『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』　鳥取県教育委員会　1978年

Ⅶ　島根県出雲市上塩冶10号横穴墓出土金糸の材質と製作技法について

奈良国立文化財研究所　村　上　　隆

ⅰ）はじめに

わが国で出土した古代の金糸は、畿内では大阪府高槻市阿武山古墳など、関東では千葉県木更津市金鈴塚古墳など、数カ所での事例があるに過ぎない。今回、島根県出雲市上塩冶10号横穴墓から出土した金糸は、鳥取県西伯町マケン堀19号横穴墓に続き山陰地方では二例目である。しかも、山陰地方における二事例がどちらも７世紀前半の横穴墓からの出土というのは大変興味深い。本稿では、島根県出雲市上塩冶10号横穴墓から出土した金糸を中心に材質と構造の調査を報告するとともに、古代金糸の製作技法についても考察を加えた。

ⅱ）分析方法

金糸の材質分析には、㈱テクノス製ミクロ蛍光Ｘ線分析装置ＴＸ550を使用した。この装置はエネルギー分散型、分析対象物に照射するＸ線ビームを100μｍφまで絞れるため、非破壊的手法で迅速に遺物の細部を分析できることを特徴とする。分析条件は、管電圧40ｋＶ、電流0.5ｍＡ。測定時間は500秒を標準とした。また、金糸の表面状態観察及び製作技法の推定には、㈱日本電子製走査型電子顕微鏡ＪＸＭ840を用いた。観察条件は、加速電圧15ｋＶ、電流１ｘ１０$^{-9}$Ａ。金糸を複雑に巻き込んだコイル状構造体の内部構造観察には、㈱アンドレックス社製マイクロフォーカスＸ線ラジオグラフィー装置を用いた。Ｘ線源の焦点が10μｍφと小さいため、これまで観察できにくかった微細構造まで探ることが可能となる。撮影条件は、電圧170ｋＶ、電流0.3ｍＡである。

ⅲ）結果及び考察

⒜金糸の構造

上塩冶10号横穴墓から出土した金糸は、電子顕微鏡の観察により、厚さ約10μｍ（0.01㎜）、幅0.5～0.8㎜の細いリボン状の金を螺旋状に巻いた構造をしていることがわかった（写真１）。ただし、埋蔵中にオリジナルの形が変形しているものが多く、製作当初の形を保っているものはほとんどない状態である。長いものでも５㎝程度であるが、切れ切れになっているため正確な長さはわからない。当初は芯に繊維があったという考えもあるが、現在のところ繊維質の遺存は確認できていない。すなわち、基本的に中空の状態である。

この上塩冶10号横穴墓から出土した金糸の、他の出土金糸と異なる大きな特徴に、螺旋に巻き上げた金糸をさらに巻いて作った長さ約1.2㎝、太さ約２㎜のコイル状構造体が挙げられる。写真２に電子顕微鏡によって観察したコイル状構造体の全貌を示す。このコイル状構造体は、形が崩れているものも含めると数点出土している。マイクロフォーカスＸ線ラジオグラフィーによる観察（写真３）から、一本の螺旋状金糸を１㎝程度の長さで二～三重に折り束ね、それを芯にして、続けてその上にコイル状に巻いていることが明らかになった。この構造は、古代金糸の用途を探る上で重要な特徴と考

えられるが、今のところ類例を確認できていない。今後、日本国内ばかりではなく、西アジアから東アジアにかけての出土事例や、伝世品も含めた詳しい調査が必要であろう。

(b)材　質

上塩冶10号横穴墓から出土した金糸を非破壊的手法によって蛍光X線分析装置で分析した結果、金約96%、4%弱程度の銀と微量の銅を含むことがわかった。金の純度は大変高く、約23金（純金は24金）に近い。純金では柔らかすぎるが、少量の銀と微量の銅が入ることで展延性を下げずに硬度を上げ、薄く延びやすい割には切れにくくなる。現在製作されている金箔は、最高0.1μmまでの薄さを要求されるが、金95%前後に銀が5%程度含まれているのが一般的である。この類似性は、古代において、すでに金合金の加工性を考慮した材質調整技術が発達していた可能性を示唆するものと考えられ興味深い。因みに、同じく山陰地方の横穴墓、鳥取県西伯町マケン堀19号墓から出土した金糸も金約97%、3%程度の銀と微量の銅を含む。上塩冶10号墓から出土した金糸同様、銀と微量の銅を含んでいる。先に述べた様に用途を考慮して何らかの材質調整が人為的に行われたのか、今後の検討を要する問題である。

(c)製作技法

上塩冶10号横穴墓から出土した古代金糸がどのように製作されたか、たいへん興味あるところである。近代から現代にかけて行われてきたというダイスを用いた線引きによる金糸の製作技法についてはこれまでにも紹介されている[註1]が、この技法が古代においても行われていたかどうか検証されるには至っていない。今回、上塩冶10号横穴墓から出土した金糸の電子顕微鏡による表面精査により、古代金糸の製作技法を解明する手がかりを得ることができた。注目すべき特徴はリボンの端面にある。写真4に見られるように、表面に垂直に切り落とされた痕跡が端面に見られ、エッジが立った状態であった。さらに、螺旋構造の内壁には、焼鈍された状態の10μm程度の大きさの結晶粒が遺存しているものも認められた（写真5）。この特徴は、鳥取県西伯町マケン堀19号横穴墓出土の金糸にも同様に見られた。すなわち、これは線引きされた細線をたたいて作ったものではなく、あらかじめ用意した10μm程度の薄板を鋭利な道具で幅0.8㎜程度の細いリボン状に裁ち切り、それを螺旋状に巻いたものではないかと想定される。

iv）まとめ

上塩冶10号横穴墓から出土した古代金糸の材質・構造を調査する中で、その製作技法を解明する糸口を見いだせたことは今回の調査の大きな収穫であった。今後、分析事例を増やし、金糸の製作技法の詳細に迫ると共に、その地域性や時代性も解明していきたい、と考えている。

註1）「マケン堀古墳群・北福王寺遺跡」（西伯町教育委員会）（1990）における中原斉「金糸」の項（P93～94）の註1を参照。

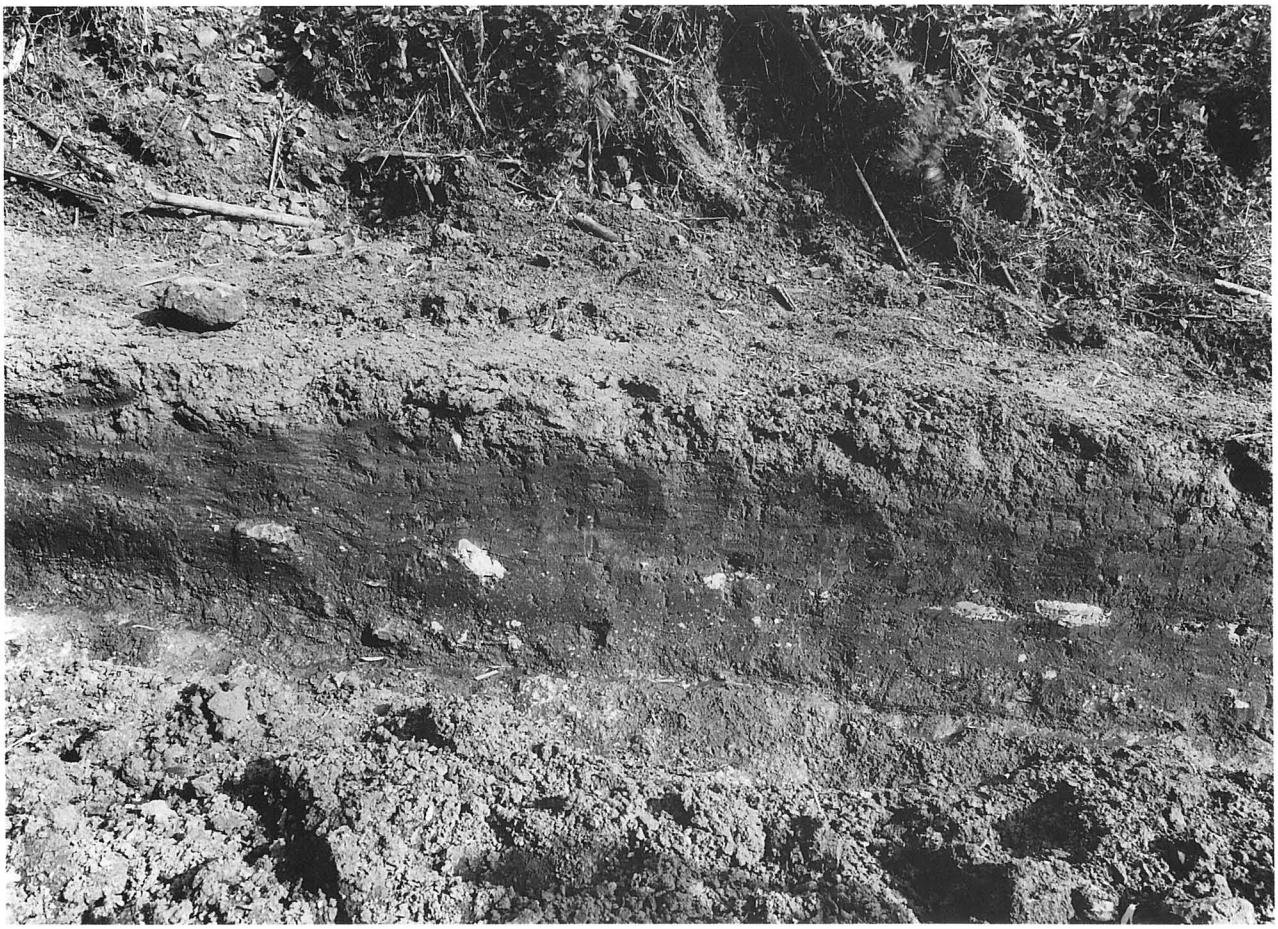
写　真　図　版

上塩冶横穴群第20支群調査前全景

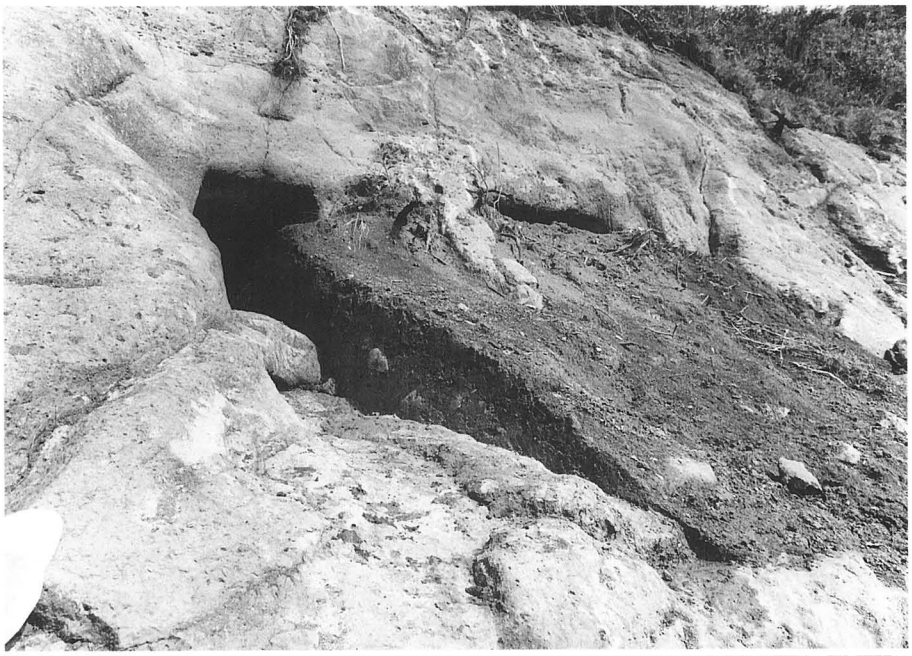
上塩冶横穴群第21支群調査前全景

図版 2

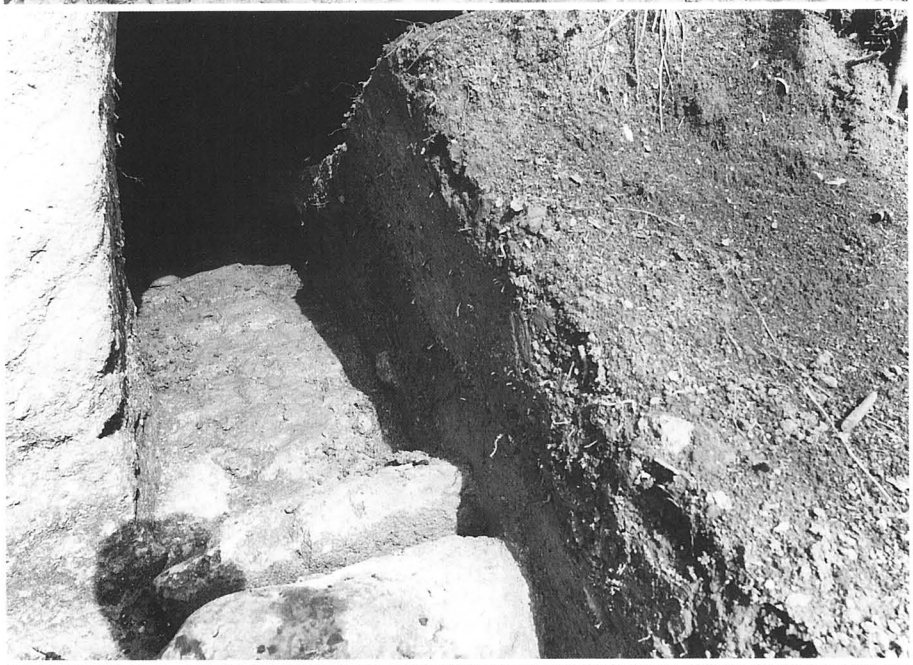
斐伊川放水路第15トレンチ土層断面（西から）



斐伊川放水路第14トレンチ土層断面（西から）



第１号横穴墓検出状況

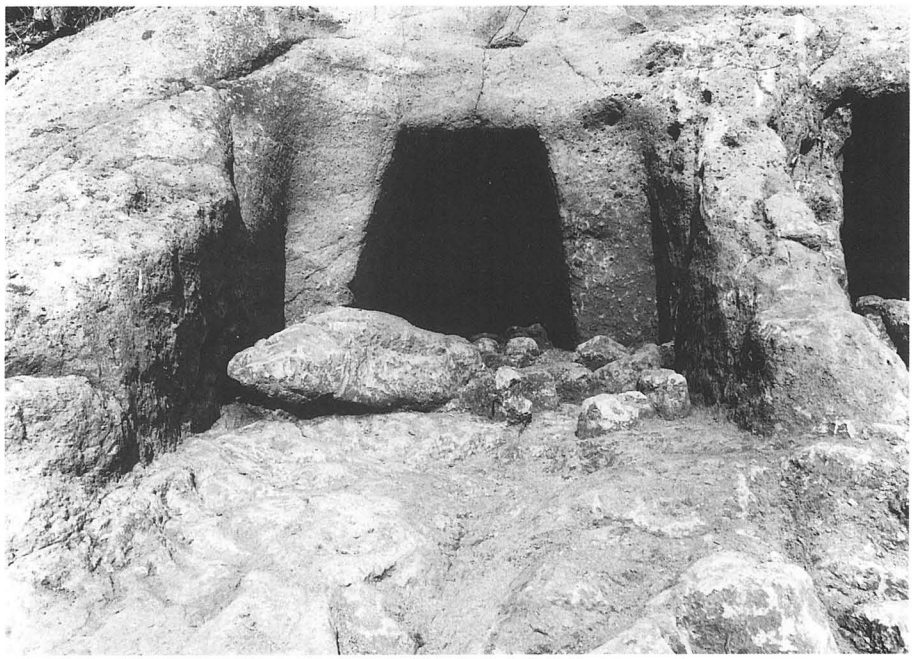


第１号横穴墓土層断面

太刀（Ｍ１）出土状況

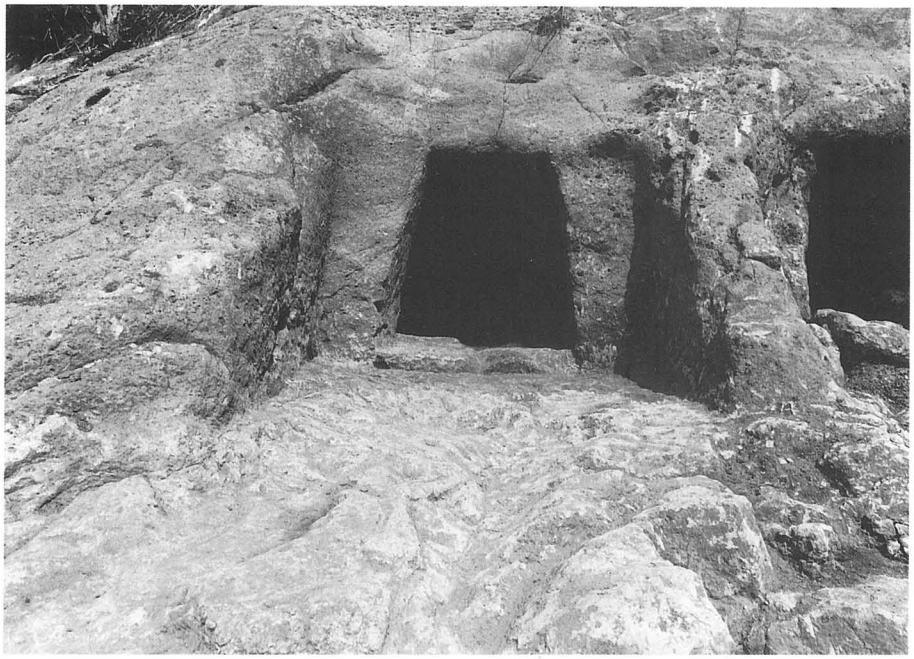
図版 4

第 1 号横穴墓土層断面



第 1 号横穴墓閉塞状況

第 1 号横穴墓遺物出土状況

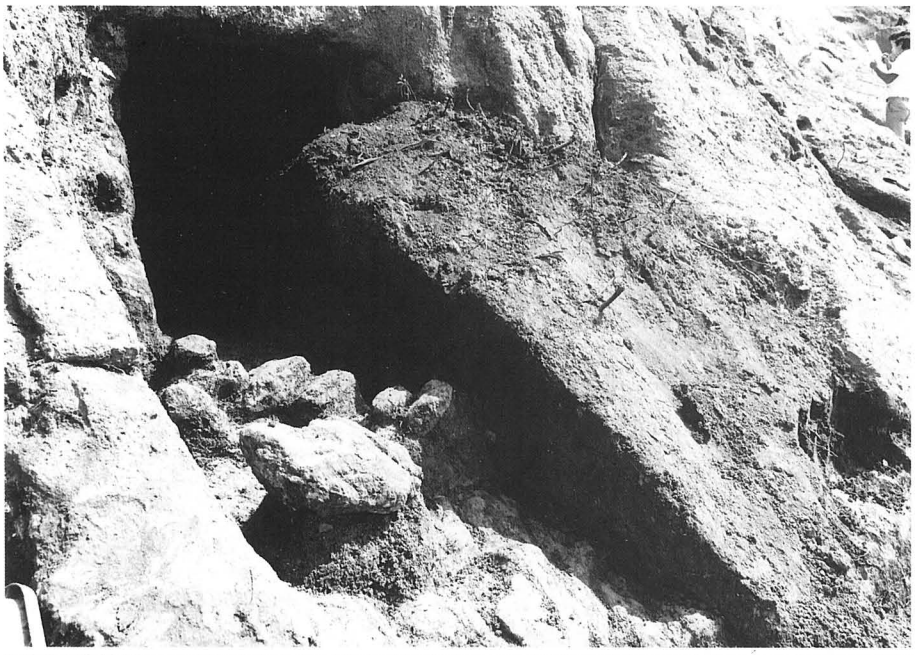


第 1 号横穴墓前庭部完掘状況

第 1 号横穴墓玄室内

第 1 号横穴墓奥壁～西壁

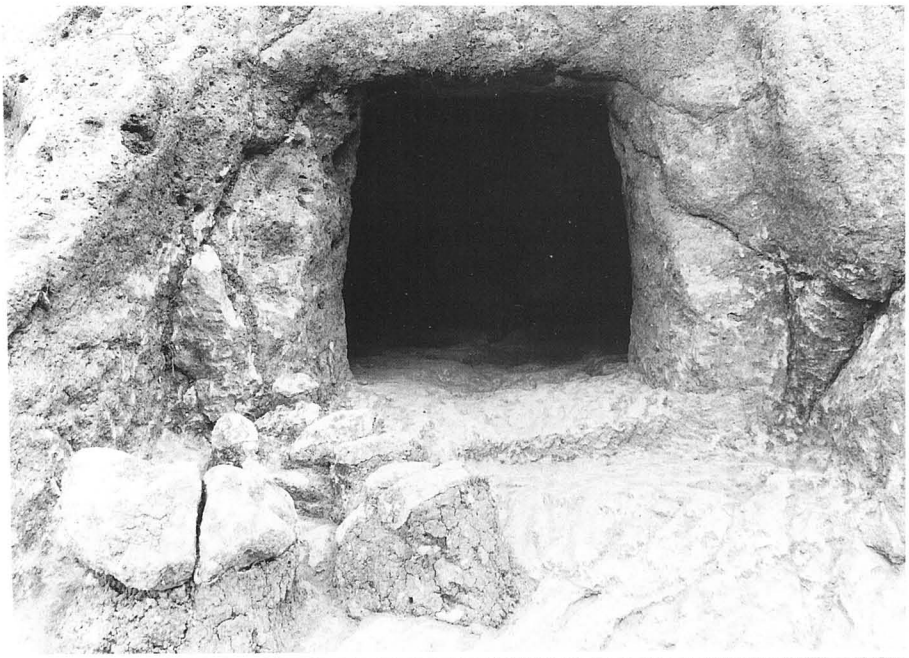
図版 6



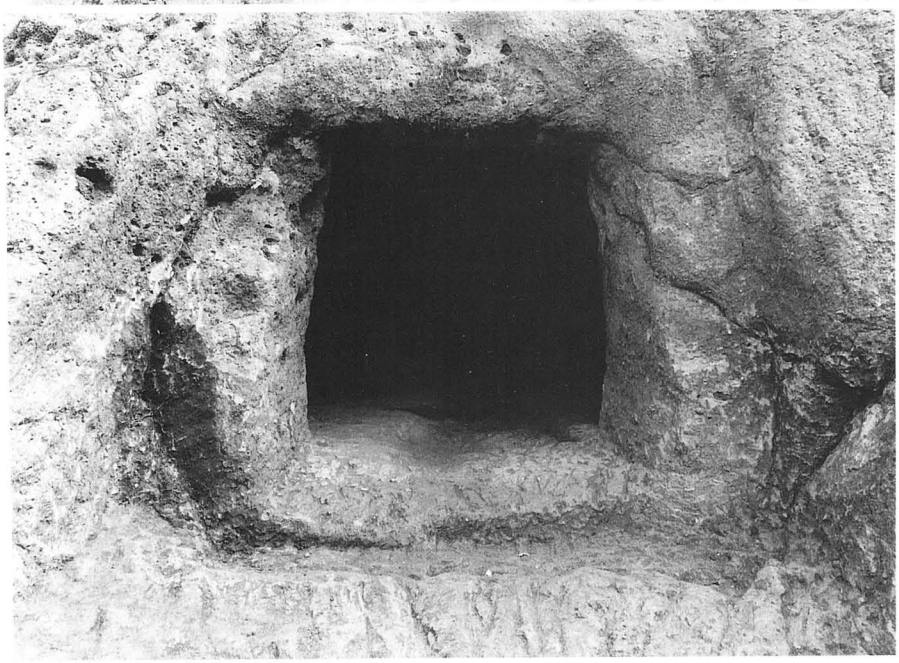
第 2 号横穴墓検出状況

第 2 号横穴墓閉塞状況

第 2 号横穴墓遺物出土状況



第 2 号横穴墓前庭部完掘状況



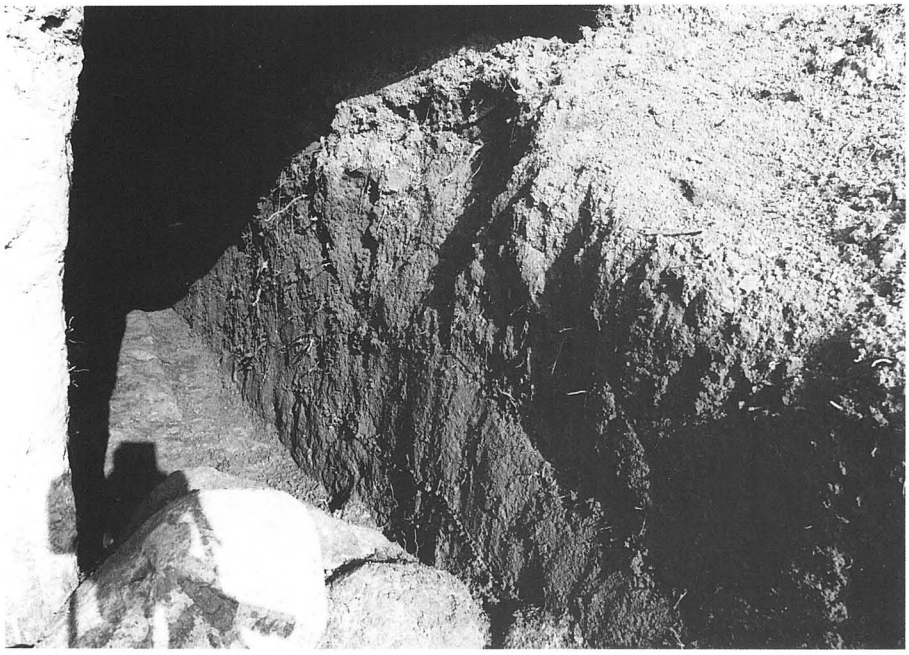
第 2 号横穴墓羨門

第 2 号横穴墓玄室内

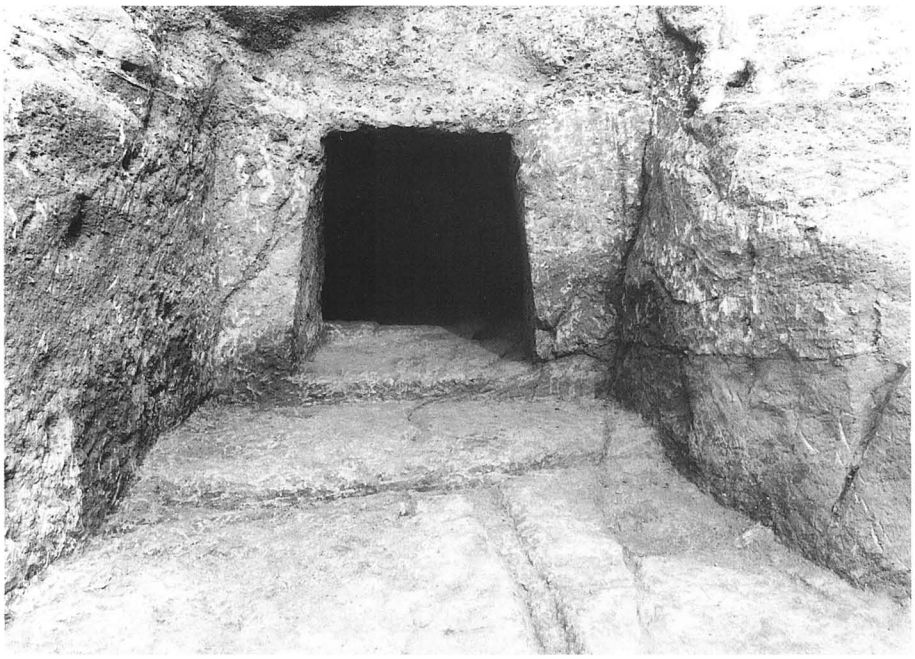
図版 8

第 3 号横穴墓検出状況

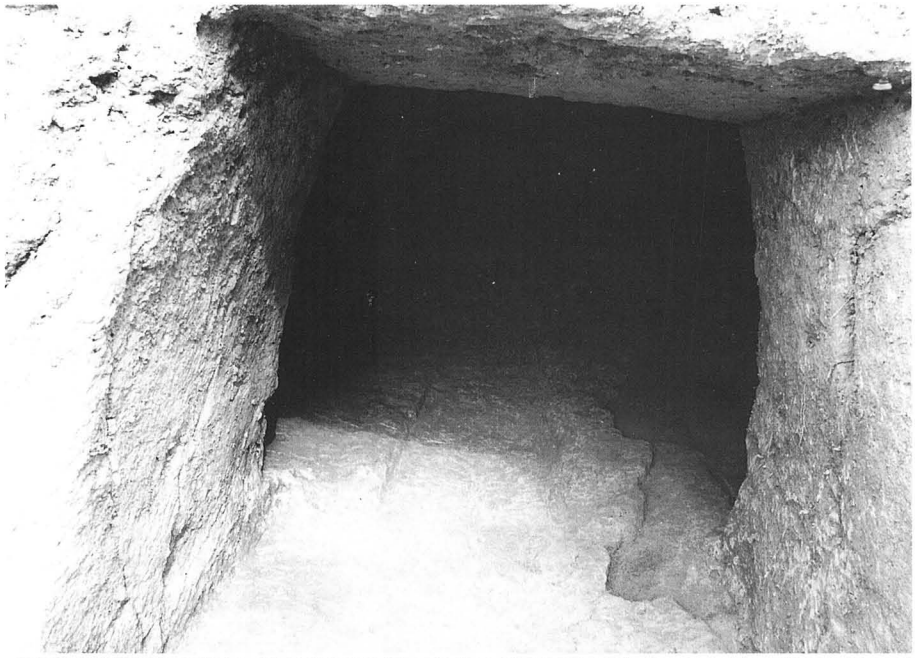
第 3 号横穴墓閉塞状況



第 3 号横穴墓土層断面



第 3 号横穴墓前庭部完掘状況

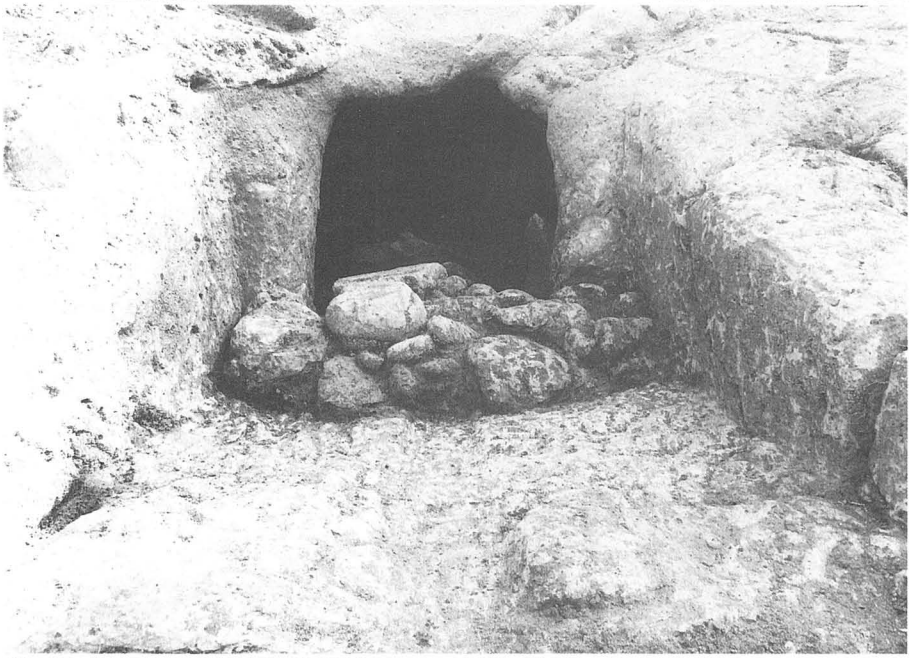


第 3 号横穴墓玄室内

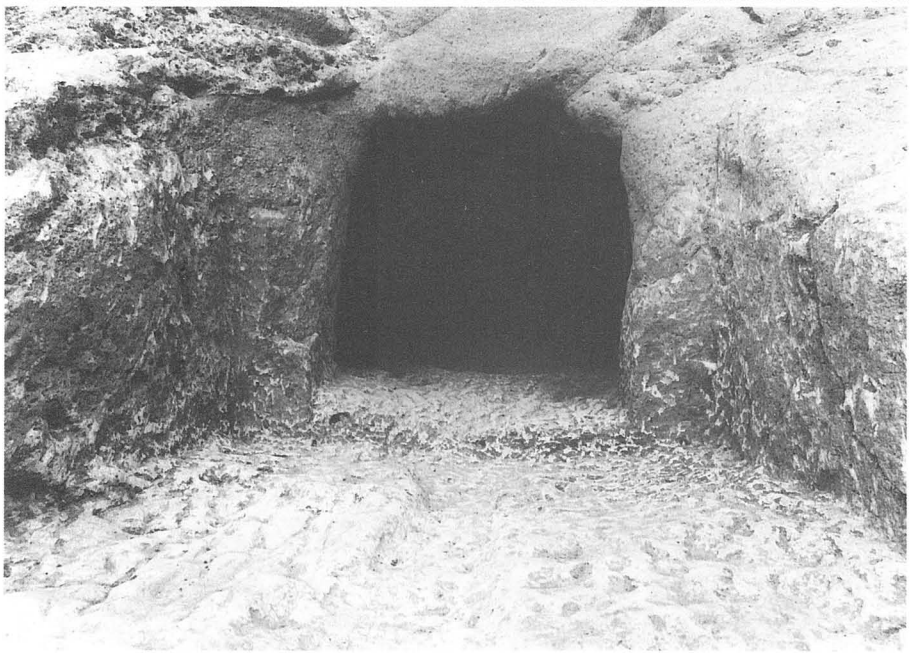
第 3 号横穴墓東壁

図版10

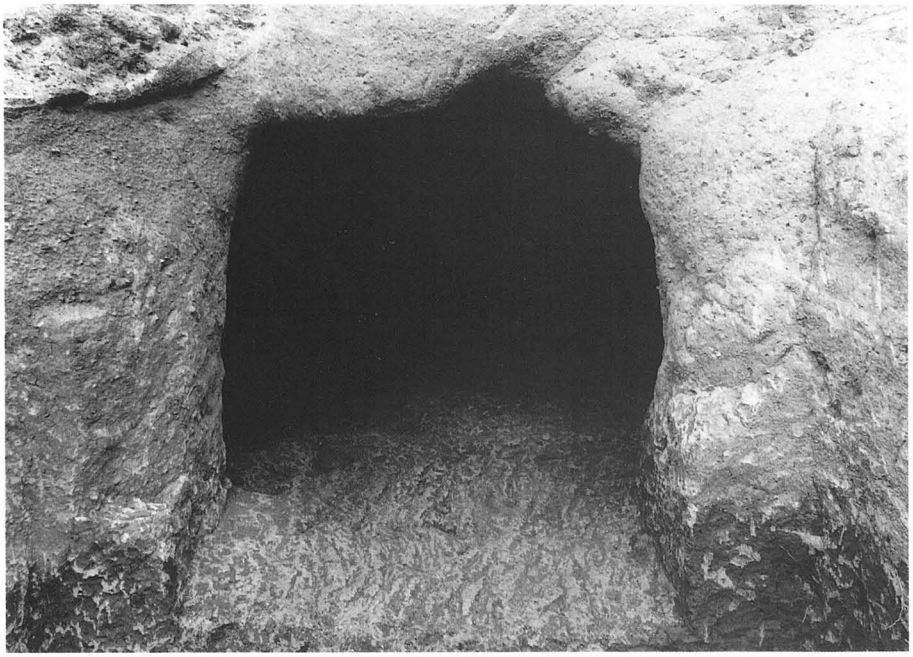
第４号横穴墓土層断面



第４号横穴墓閉塞状況

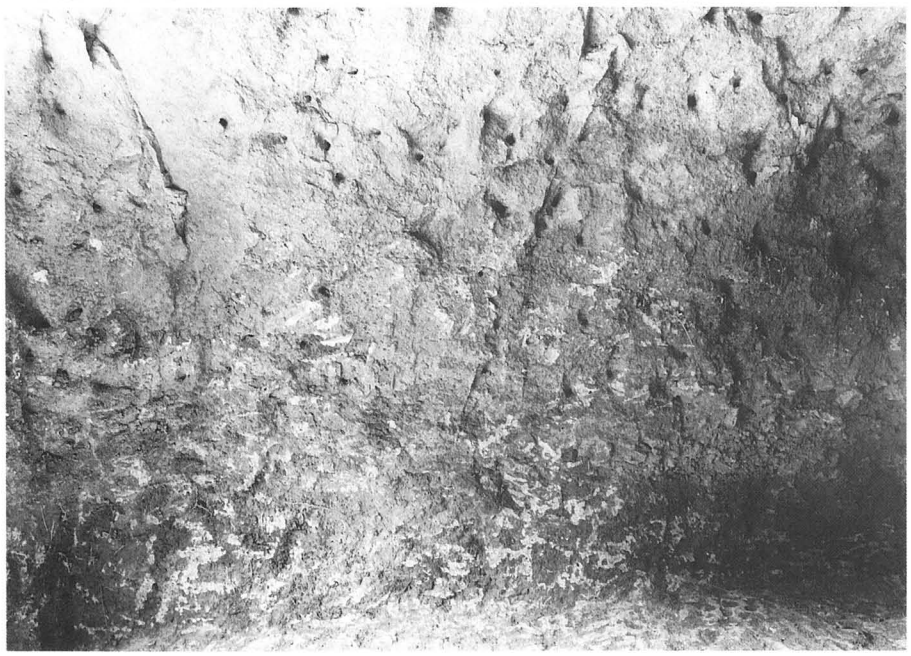


第４号横穴墓前庭部完掘状況



第４号横穴墓羨門

第４号横穴墓玄室内



第４号横穴墓東壁

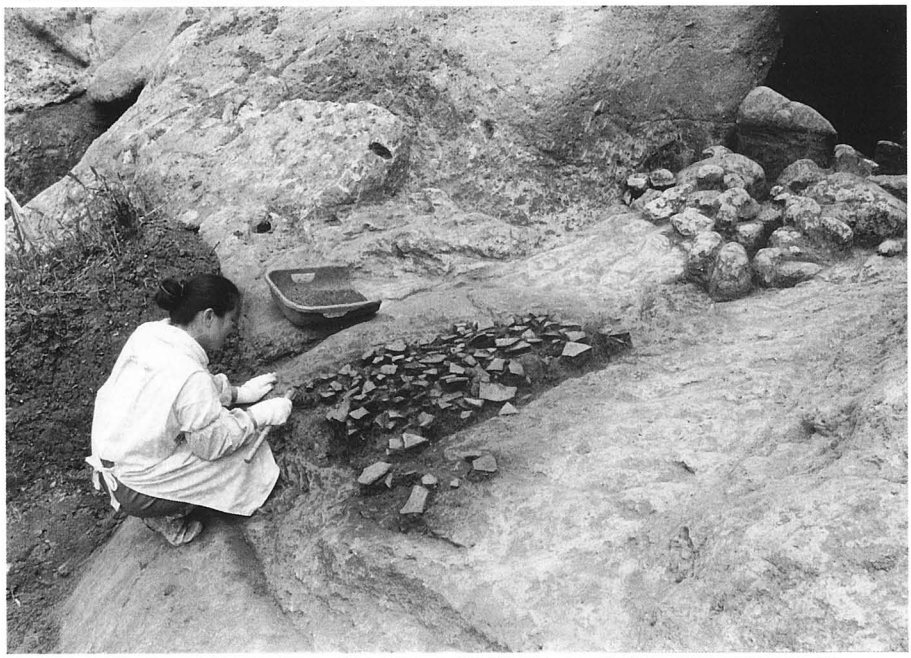
図版12

第５号横穴墓閉塞状況

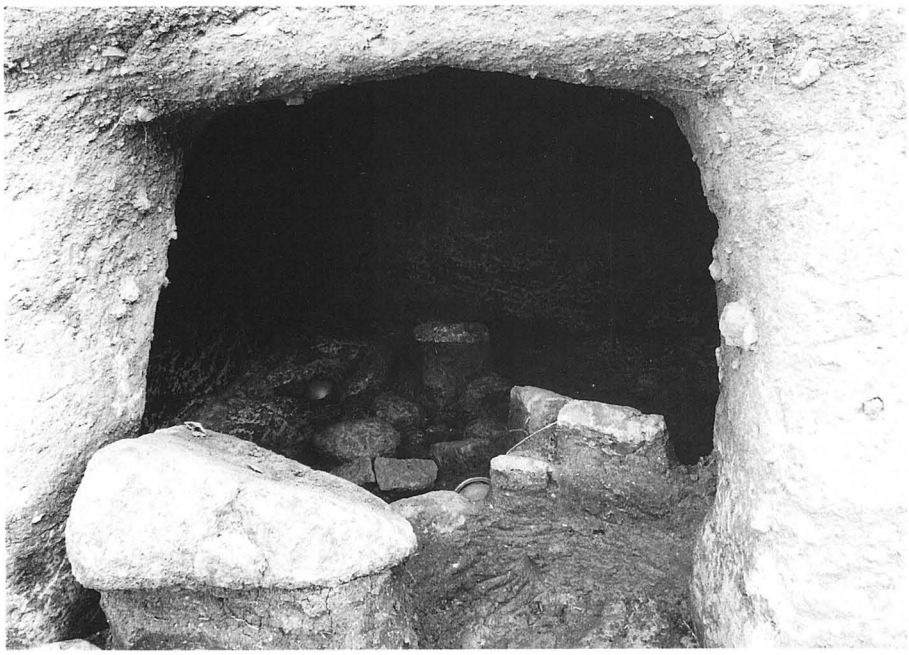
第５号横穴墓土層断面

第５号横穴墓前庭部
遺物出土状況

第５号横穴墓前庭部
遺物出土状況



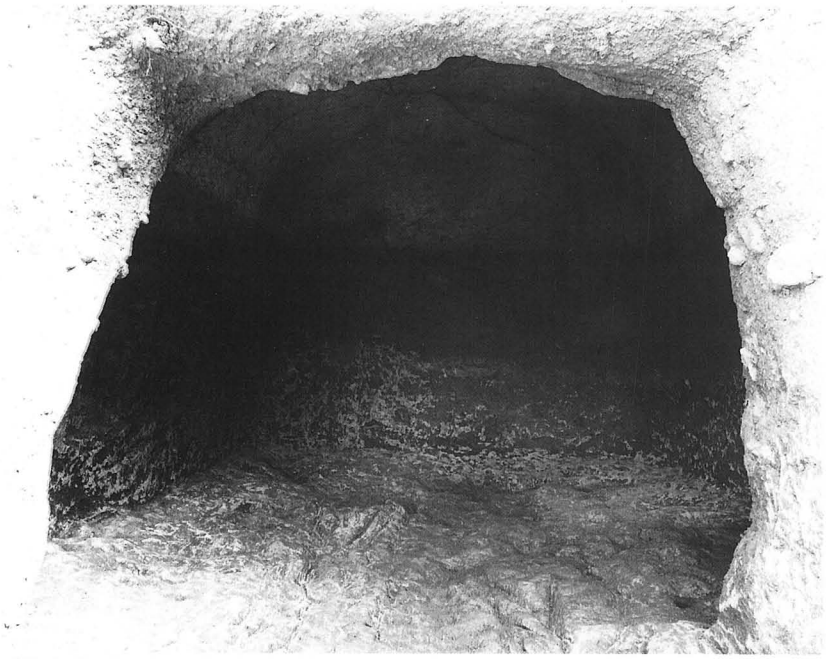
第５号横穴墓作業風景



第５号横穴墓玄室内

図版14

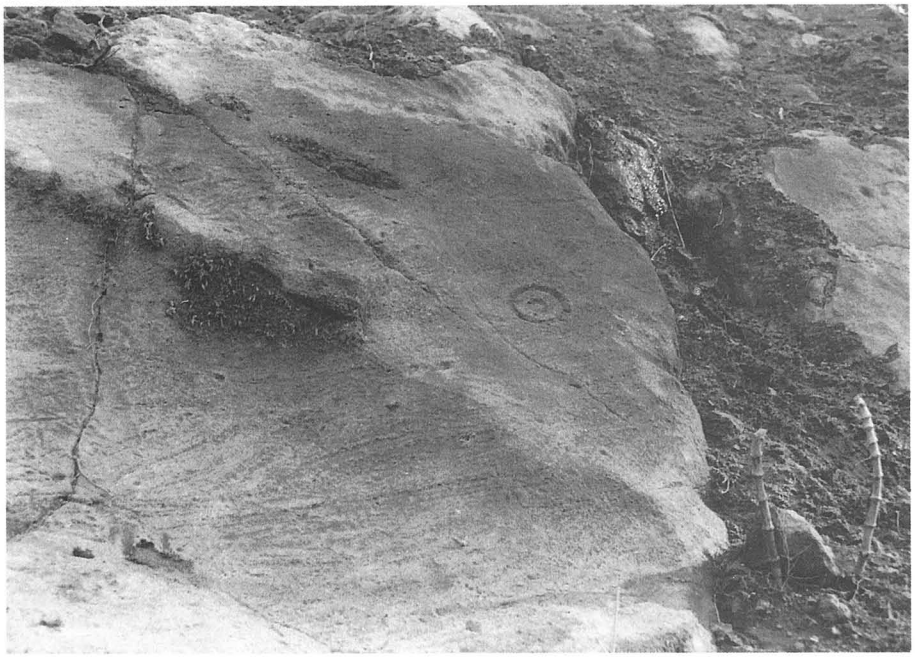
第５号横穴墓前庭部完掘状況



第５号横穴墓玄室内

第５号横穴墓東壁

第20支群南壁円形刻文全景



第20支群南壁円形刻文（１）

第20支群南壁円形刻文（２）

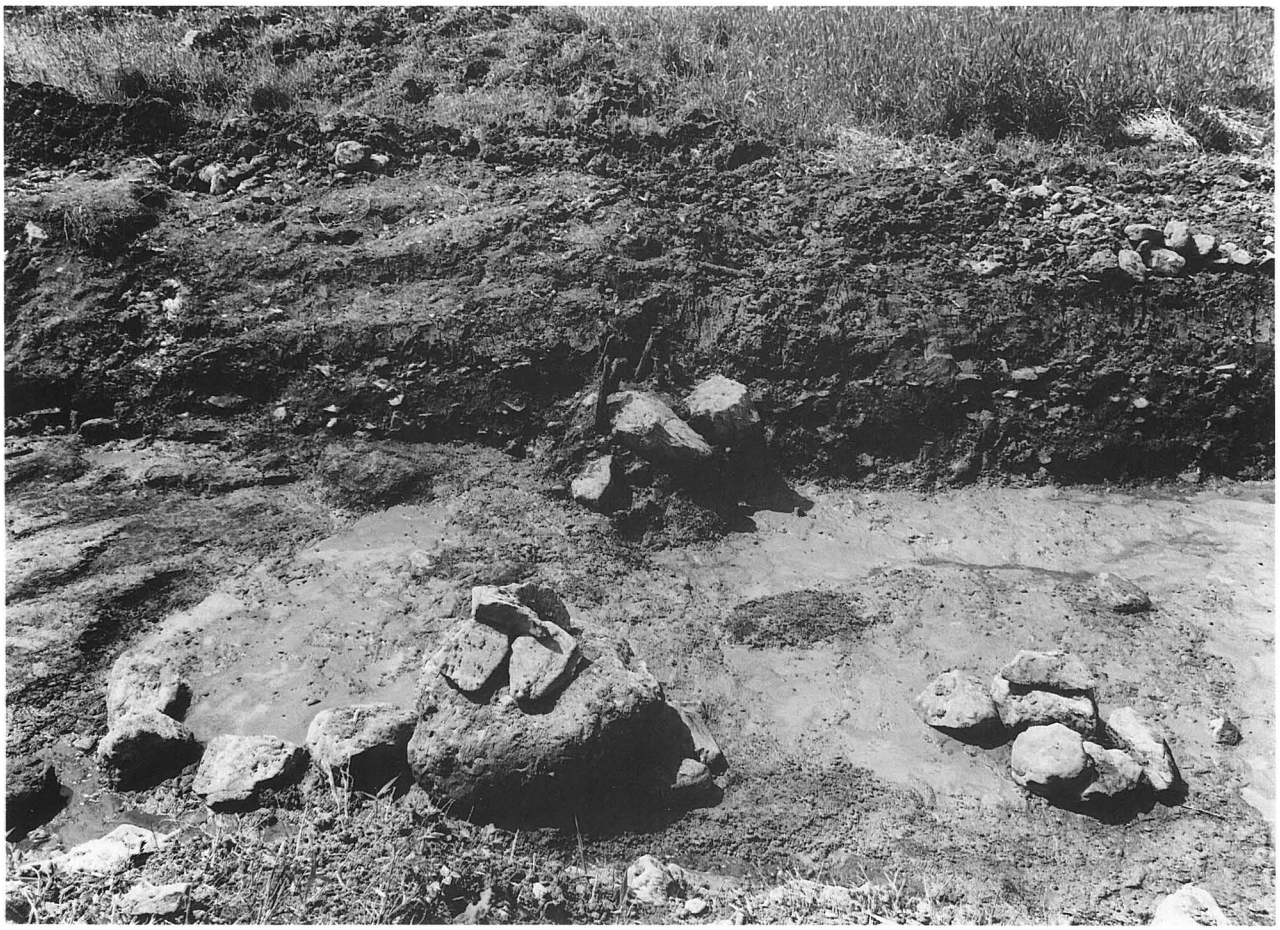
図版16

第20支群横穴墓下方斜面土層
堆積状況

第20支群全景

第20支群近景

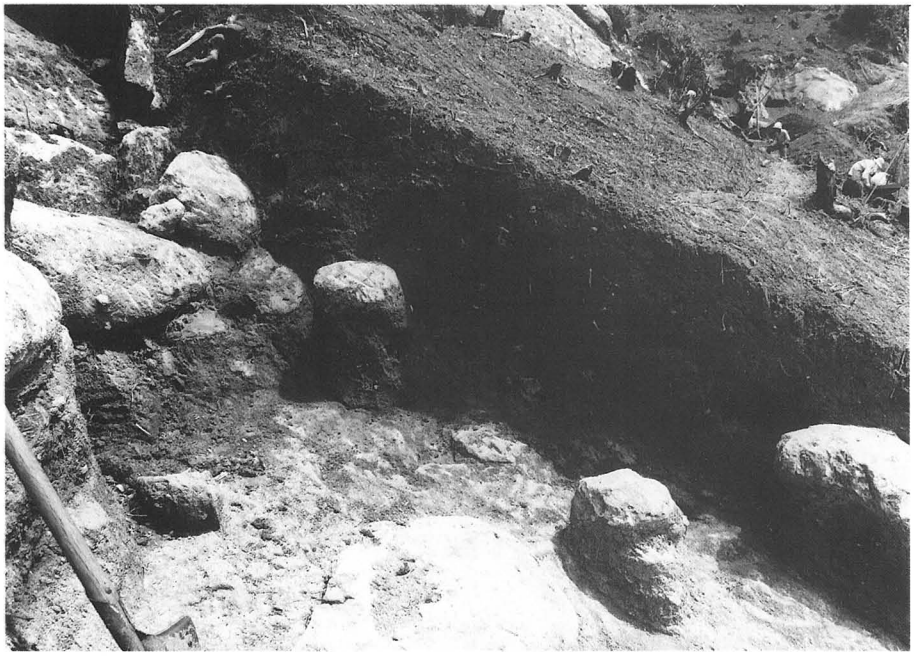
斐伊川放水路第11トレンチ全景



斐伊川放水路第11トレンチ土層断面（北から）

斐伊川放水路第13トレンチ土層断面（西から）

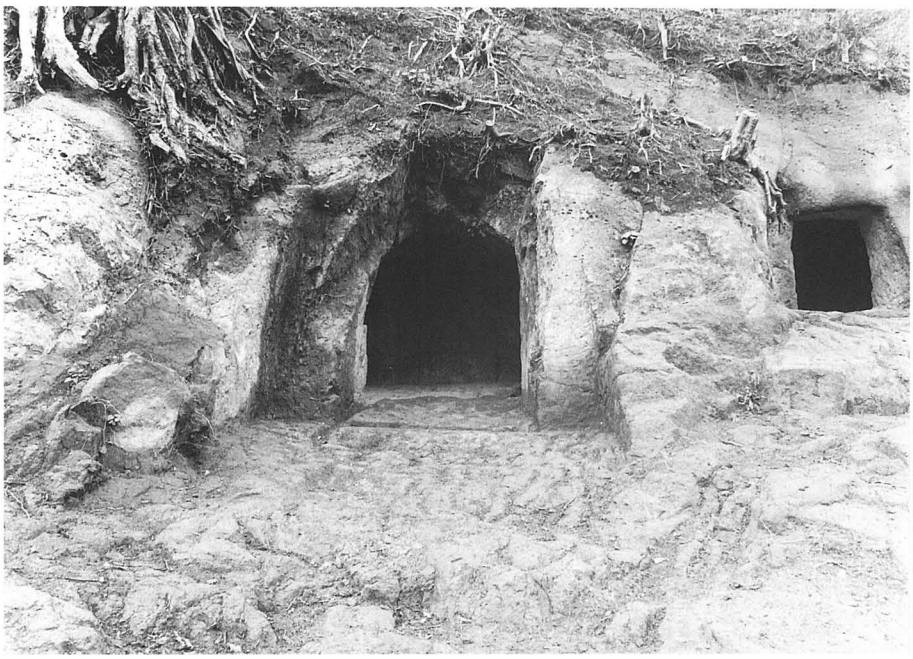
斐伊川放水路第12トレンチ土層断面（西から）



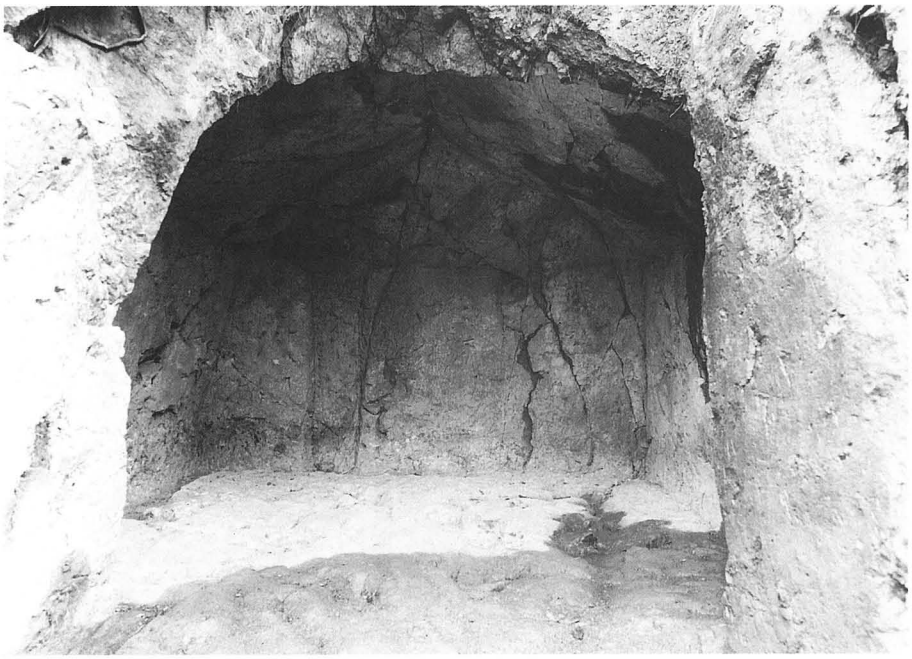
第１号横穴墓土層断面

第１号横穴墓閉塞状況

第１号横穴墓全景



第１号横穴墓前庭部完掘状況

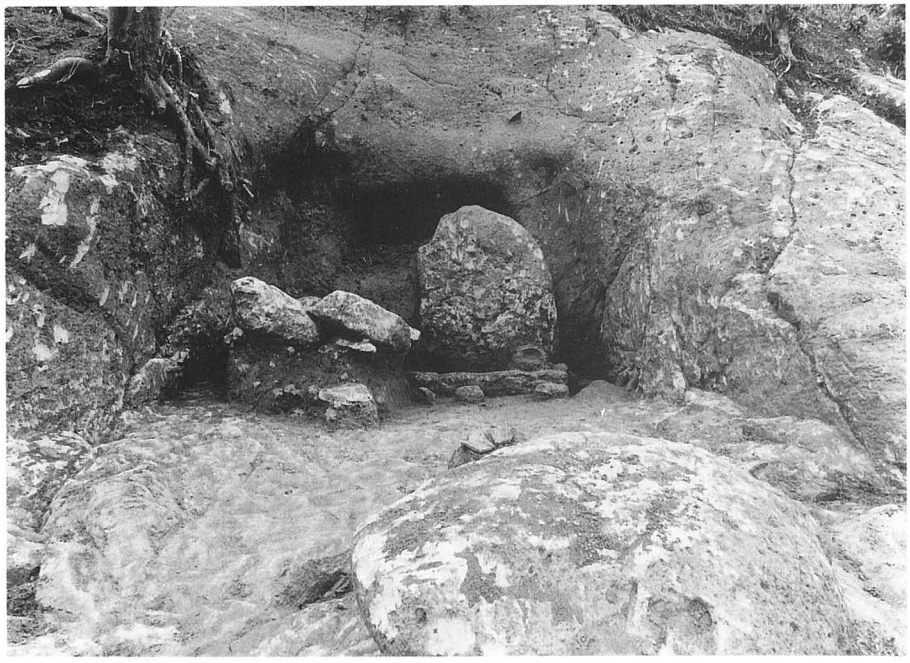


第１号横穴墓玄室内

第１号横穴墓奥壁～南壁

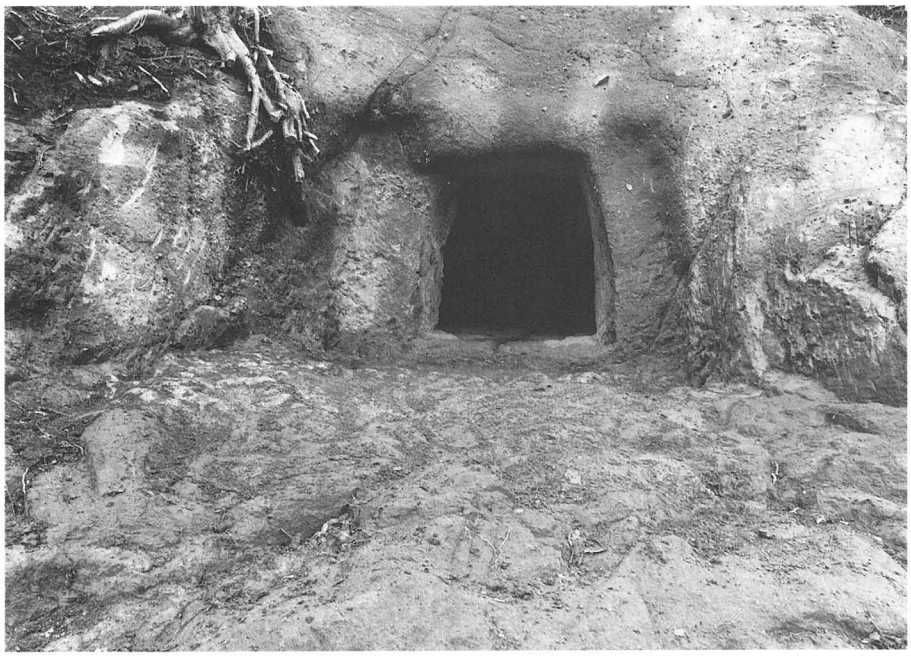
第２号横穴墓土層断面

第２号横穴墓閉塞状況

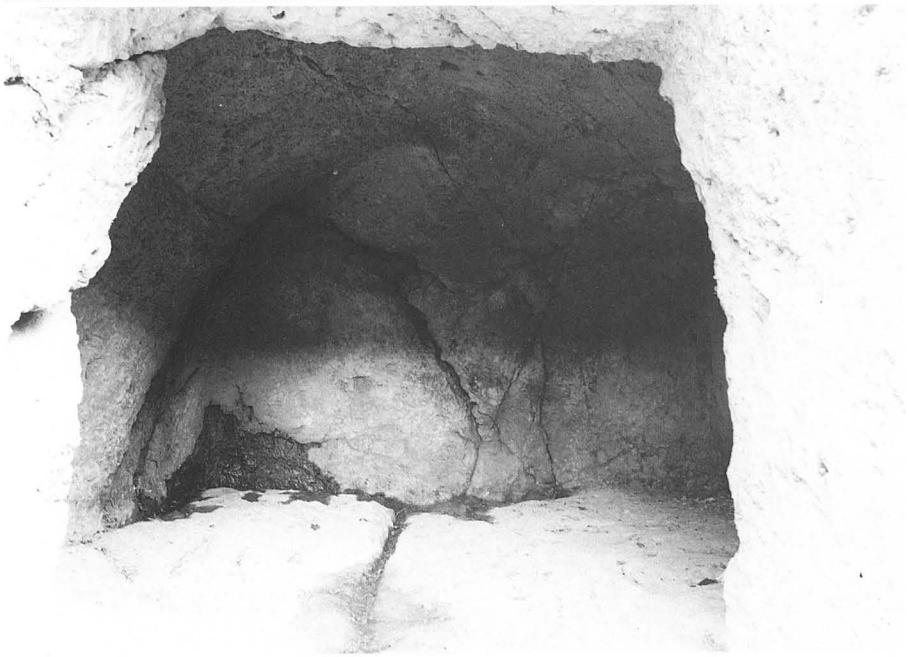


第２号横穴墓閉塞状況

図版22

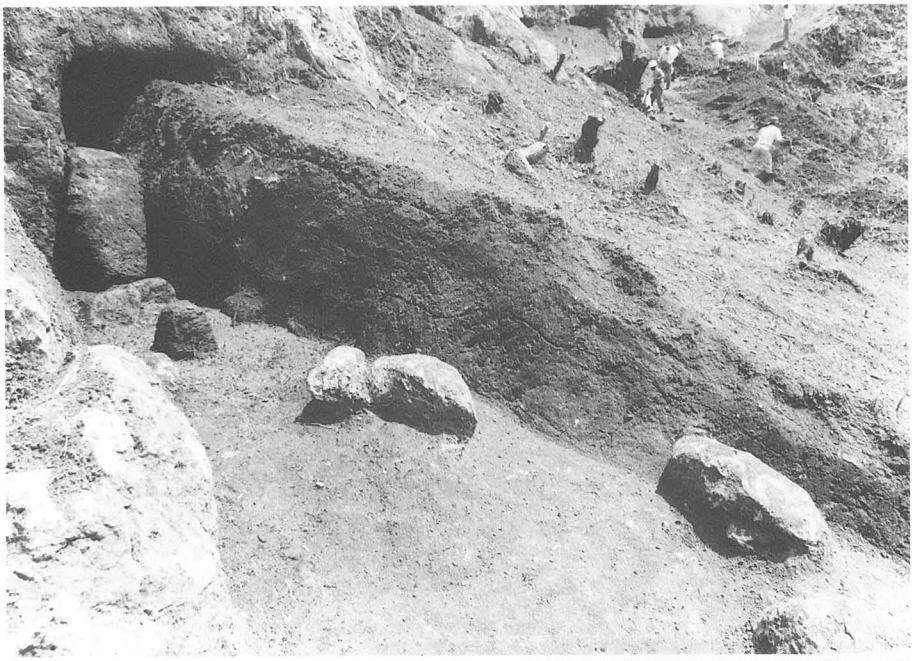


第２号横穴墓前庭部完掘状況

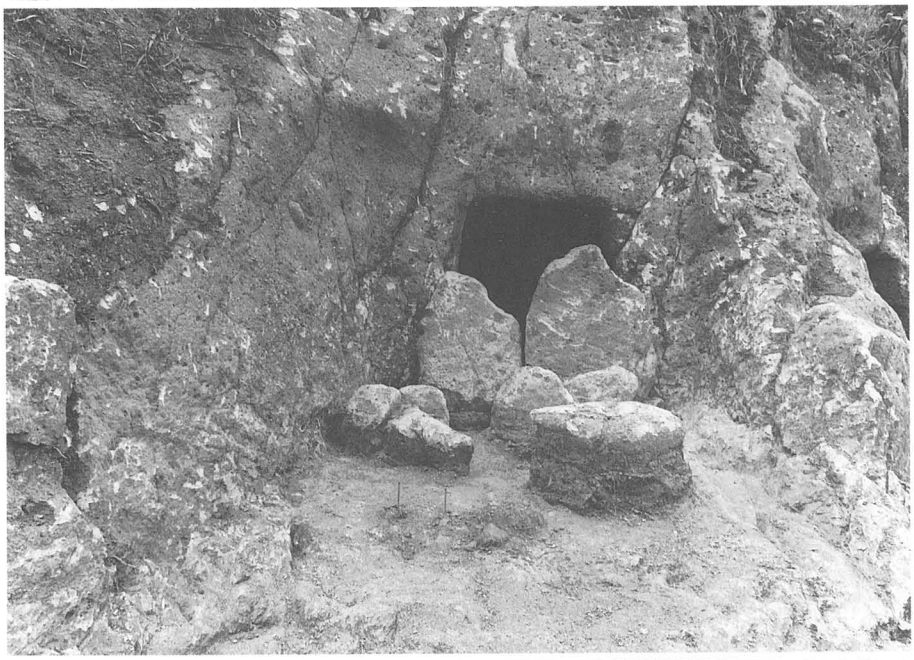


第２号横穴墓玄室内

第２号横穴墓奥壁～南壁

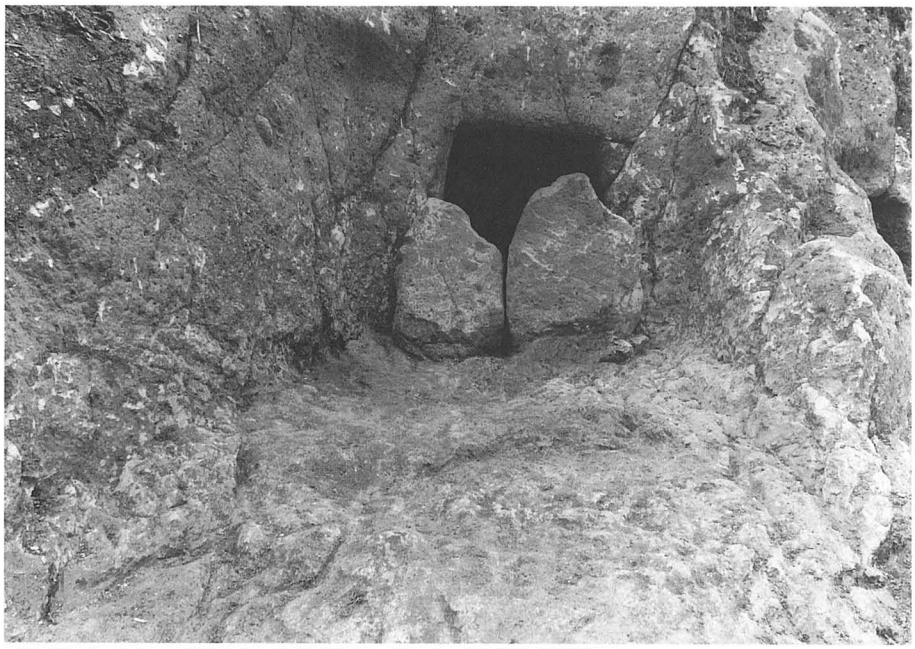


第３号横穴墓土層断面

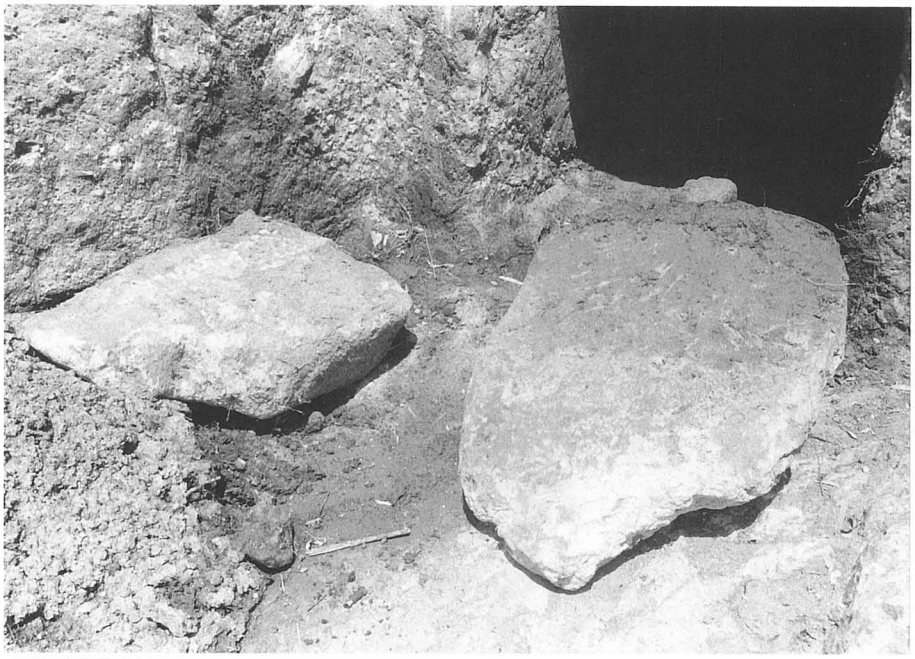


第３号横穴墓閉塞状況

第３号横穴墓閉塞状況



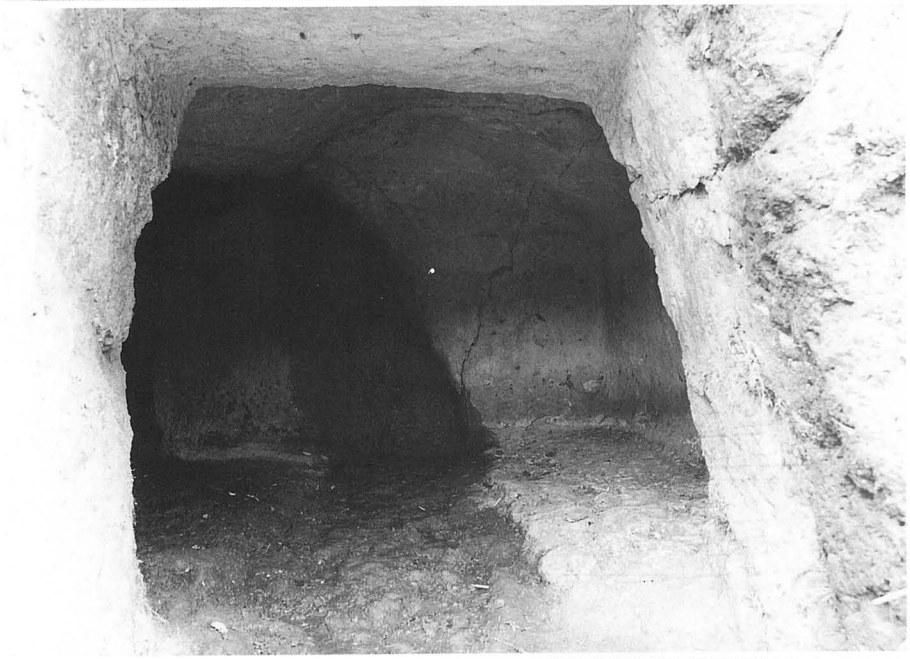
第３号横穴墓前庭部



第３号横穴墓閉塞石

第３号横穴墓遺物（Ｍ－33）
出土状況

第３号横穴墓前庭部完掘状況



第３号横穴墓玄室内

第３号横穴墓北壁

図版26

第４号横穴墓土層断面

第４号横穴墓検出状況

第４号横穴墓閉塞状況